労働大臣賞受賞

明日をになうもの

働く年少者の生活文集

1956

労働省婦人少年局編

明日をになうもの

労働大臣賞受賞

・働く年少者の生活文集・

女性労働協会氏寄贈

1956

労働省婦人少年局編

働く年少者の生活文集によせて

年々、中学卒業者のうち、七十万前後のひとびとが、学窓から職場に就職しています。大きな期待、希望、憧れに胸ふくらませつつも、一抹の不安をもって入った新しい社会の現実は、どのように若いひとびとの眼に映ったでありましょうか。

工場や商店、官庁、農山漁村の職場環境や地域社会の現状、与えられた仕事、賃金、職場の上役、先輩等に対して抱いた赤裸々な感情、欲求などなまなましい生活実態が、日々のできごとを通して、切々と訴え述べられたもの、これが働く少年少女の生活記録です。

これらの作品は、文学的なものではなく、また、その表現が稚拙なものも少くありません。けれども、日々の労働を通じ、身を以て体験している生活からにじみ出る真摯な実感は、毎年の作品毎に、新たな共感をよび起し、深く胸を打つものがあります。

今日、十八歳未満の働く年少者は全国で二百数十万を数え、広く産業の各分野にわたって働いており、現在及び将来の日本経済のうえに果す役割は大なるものがあります。さらに、心身の発達途上にあるその諸特性は、現在、労働者であるとともに、将来の市民として保護育成されるべき二重

の課題をもっております。

今年もまたここに、働く年少者の生活文集「明日をになうもの」を世におくります。社会の多くの方々が、年少労働者の問題をよりよく理解し、また、同じように働く年少者の方々にとって励しともなれば幸いです。

なお、頁数の都合から、三十年度の応募作品全部を収録しえないのは、本当に残念に思いますが、ここに掲載された労働大臣賞受賞作品を通して、これと優劣をきめ難い、他の多くの作品の声をも聞いていただけるものと信じております。

昭和三十一年三月

労働省婦人少年局長　谷野せつ

選者のことば

社会的な見方の芽生え

読売新聞社
編集局教育部長　金久保通雄

「働く少年少女の生活文」を読んで、いちばん強く感じたことは、なぜ日本の働く子供たちは、こうも不幸な環境におかれなければならないのだろうか、ということだった。

不幸な子供たちだから、子供のうちから大人にまじって働かなければならない。その不幸な子供たちを、社会はあまりにもつめたく迎えている。そして子供たちの不幸は二重にも、三重にも、つみかさねられている。

働く子供たちにたいして意地悪い、つめたい大人たちも、しょせん不幸な人間なのだが、それだけに子供たちは、ちょっとした大人の思いやりにも深い感激を覚え、これがみじめな子供たちの生活を強く支える柱となっている。

片親のない子供、苦しい生活のなかでも向学心に燃えている子供、暗い生活のなかで強く、明る

く生きようと努力している子供、なぜ自分はこうも不幸なのだろうかと考えている子供――働いている子供はシンを持っている。

文章もつたなく、考えもあさいが、生活文をつづることによって、自分たちの生活をみつめ、考えだしている。そして、なによりも社会的なものの見方が芽ばえてきていることがたのもしい。

実生活に徹した作文

作家
婦人少年問題審議会長　平林たい子

みんな粒がそろって、ある程度のでき栄えである。実生活に徹していて、観念的なことを言っている作文がないのが、一つのよい特長となっている。しかし思考する部分ではみんな似たりよったりの考え方をしているのが目につく。特に女子の文章は、感覚的で、思索能力が男子よりも落ちているかも知れない。職場の描写が型の如く同じになっているのは、注文を誤解している所もあるだろう。しかし、五枚という枠で休みのひまにかいた文章としては、上出来である。恐らく、同じ年頃の学生の文章よりも、ずっと人に訴える力をもっていると信じる。

自分をもっと大切に

日本放送協会
教育部教養課長　横尾克巳

応募の生活文の、どの一篇をとっても、恵まれない境遇の中で、真剣に生活を追求している姿には敬服しました。義務制の九年の学校教育を終えて、これまでとにもかくにも、同じ歩調で来た友人と進路を異にする、人生最初の岐路――この悩みが切々と語られていないものはなかったと思います。この悩みは、諸君自身の責任というより、むしろ諸君の境遇の結論といってよい位なので、諸君の進学する友人に対する劣等感といった割り切れない気持には、充分同感出来るものがあります。しかし一方から言うと、この考え方はやや定石的に過ぎはしないでしょうか。なるほど、わが国の社会は、これまでは学校出万能のところはありましたが、戦後、民主日本の出発とともに、政治や経済の様子も相当変って、たとえば組合なども実力を持って来るようになりました。諸君の考え方には、やや従来の、学校教育に対する必要以上の過大評価があるように思います。勿論、知識や研究は充分尊重すべきですが、これは何も学校でのみ与えられるものでないことは、諸君のよく御承知のことです。

定石的といえば、一般的に言って生活文そのものが月並な型と、きまり文句が多いように思いました。もっと独創的な表現や新鮮な感じ方がありそうなものだと思います——例えば「山彦学校」のあのほかに、真似の出来ない目のつけどころのような——。これは結局、諸君が、本当に自分の生活や職場を自分の目で見、自分の言葉で語っていないからではないでしょうか。本当に真摯に自分の仕事や生活を愛していれば——たとえ拙くても——もっと切実な表現が出てくると思われます。つい不用意な表現だとは思いますが、ぎりぎりの働く理由が、家のためだったり、恩師の教訓の一つが拠りどころだったりでは、折角苦しい目をしながら働いている諸君自身が可哀想ではありませんか。もっと自分を大切にして欲しいと思います。

なおもう一つ、私の仕事のことになりますが、こんなにも苦労して働いている諸君に、ラジオが余りにも関係がないのに今さら驚き、且つ悲しくなりました。わが国のラジオは随分普及したと思っておりましたが（通信教育の講座などもやっていますが）、まだまだ諸君の手の届くところまでは行っていないのです。

放送を仕事としているものとして、考えねばならぬことと泌々思いました。

大人に反省させる文章

労働科学研究所長　桐原葆見

労働する若い少年達が年とともにすくすくと育って来たことが、年々の作文を通してはっきりみとめられることは、何よりもよろこばしいことである。それは一昨年のものと昨年のものと今年のものとを読みくらべてみればよくわかる。ものを見る眼も、考え方も、それを表現する力も、今年は一段と進んで来た。ここに選ばれたものは、全くその一部分であつて、選に入らなかったものの中にも埋もれてしまうことが惜しまれる多くのすぐれたものがあったのである。

経済的な、その他のいろいろな事情で、下積みになって働かなければならないこの少年達が、貧乏とむじゅんにみちた社会とたたかいながら、けなげにもまっすぐに成長しようとしている姿はいじらしい。それだけにそれをとりまく大人の世界の偽まんと不合理とが多くの少年達から抗議されている。その訴えは必らずしも強くはないけれども、これに対してわれわれは襟を正して反省し、その実を示さなければならない責任を痛感する。

必らずしも強くない、というのは、その運命とその周囲にある大人の世界のむじゅんや不合理に対して手軽くあきらめて、独自の内面にいんとんしようとする風が、男子にも女子にも、その作品に少なからず見られるからである。これは、その見たり知つたりする世界が非常にせまくて、またその見聞を広めたり考えを深めたりする余裕が、労働の忙しさと疲れと貧乏とのために、ほとんど無いという事情によるものであるが、その学校時代の教育が形式的であったことにもよるであろう。そんなことが多くの少年の作文の行間から見とれるのである。

この少年達にもっと多くを知り学ぶ機会を持たせ、もっと広く深く考える資料と時間とを与えたならば、彼等は必らず自らもっと向上し、もっと力強く成長するにちがいない。働く大衆の向上がなくしては、繁栄も文化もあったものではない。われわれは力をあわせて、彼等を勇気づけることをしようではないか。

目次

序文
働く少年少女の作文によせて……谷野せつ…一
選者のことば
社会的な見方の芽生え……金久保通雄…三
実生活に徹した作文……平林たい子…四
自分をもっと大切に……横尾克巳…五
大人に反省させる文章……桐原葆見…七
働く少年少女の生活文
夕刊配達……（新聞配達）清水成雄…一七
牛乳配達……（牛乳配達）木村鎬栄…三〇

入社通知のハガキ……（金属給仕）高橋道子…二三
日誌帳を開いて……（呉服店員）佐藤巌…二五
実社会に出て感じたこと……（文選見習工）佐藤澄子…二七
見習人となって……（洋裁見習）後藤花子…三〇
妹と共に……（綿糸工）西間木紺子…三四
土に立つ……（農業）小室文子…三六
工場生活から……（服物整理工）菊沢靖夫…三九
十時休み……（農業）鳥山ひろ子…四二
働きたり……（材木店々員）五十嵐課…四四
労働の中の喜び……（製糸工）山田タミ…四七
働くことの喜びから……（事務員）望月博…五〇
住込職人……（建具職見習）匿名…五三
母に感謝する心……（カメラ店々員）匿名…五六

日　記……（銀　行　員）匿　名…六六
希　望……（建具職見習）鶴　波　渡…六一
「土方」の詩……（土　　工）西口喜昌…六四
青空のように……（会　社　員）友田和昭…六六
生きる日の喜びを求めて……（農　　業）望月民江…六九
機　械　一　年……（機　械　工）舟久保とし子…七二
農民として……（農　　業）小林登美江…七五
自分の力で……（事　務　員）小島由美子…七八
働きつつ学ぶ……（販　売　員）大沢範枝…七九
僕は手打うどん屋の小僧……（うどん製造見習）匿　名…八二
働くよろこび……（紡　績　工）室岡礼子…八四
大人の人に尋ねたい……（紡　績　工）志城むつみ…八七
仕事を通して……（運搬物資運工）柴田郁子…九〇

女工員になって……（工員）新城経子…九三
私の危機を幾度も
　助けてくれた人と制度……（鉄工）菅原淳三郎…九四
私はこう考える……（紡績工）塩田幸子…九七
果樹園を夢見つつ……（農業）山本徹吾…九九
女工生活……（紡績工）野上弥生…一〇三
大志を抱いて……（印刷工）甲山朋春…一〇四
勤労の中での勉強……（農業）仁木啓二…一〇七
ある昼休み……（機械工）梅奥信之…一〇九
四つの信条……（事務員）村上浩一郎…一一三
或る日……（紡績工）工藤恵美子…一一五
僕のもつ宝……（鑑科技工）川上小太郎…一一八
二つの希望……（事務員）香川綾子…一二〇

入社して以来……（電話交換手）阿部純子…一三
百姓の娘……（農　業）真辺千枝子…一三五
進　歩……（事　務　員）広田正子…一三八
職業人となって……（看　板　屋）北村高公…一三
手袋とともに……（鞄　製　工）前田栄三郎…一三三
私はこうして働いてきた……（農　業）田崎文典…一三六
僕のアルバイト……（新聞配達）山内正勝…一三九
山で働く喜び……（材木出し）坪根　博…一四一
職場の一日……（看護婦学校生徒）柳田美代子…一四四
若　芽……（職　工）有村悦子…一四六

装幀・カット　塚谷政義

明日をになうもの

夕刊配達

北海道　清水成雄
（新聞配達　十三歳）

僕が小学校を卒業する頃から真剣に考えるようになったことは、何かアルバイトをしたいということだった。父亡き後、大勢の子供をかかえて働いている母の負担を少しでも軽くしたいと思って、何か学生でもできるアルバイトをあれこれ考えた。学校に支障のないものといえば納豆売か夕刊配達のどちらかだ。しかし一軒々々の家に入って「納豆買って下さい」とたのんで歩くのは僕には苦手だ。断わられれば尚更僕のような心臓の弱い者にはできそうもない。

あとは夕刊配達。「よしこれをやろう！」そう思うと何だか勇気が出たようで、早速新聞配達所に頼みに行った。配達所の小父さんは、近い中にあきができるから通知したら来るようにと親切に言って下さった。母に相談したら「どんな仕事でも一生懸命やろうという気持は尊いけれども、まだ小学校卒業したばかりだから無理しなくていいのよ。お母さんが一生懸命働くから、その分だけ勉強なさい」と言って下さった。しかし、これは僕も考えた末の決心だったし、決して一時的でないのだからと母を説いたので、母もそれならばと条件付で許してくれた。

条件というのは、

一、アルバイトしたため成績が下ることのないよう今

までより尚一層勉強すること
二、給金は無駄使いせず使途を明らかに、できるだけ貯金すること
三、服装をキチンとして清潔な感じでアルバイトをやること
の三箇条だつた。一寸むずかしいなーと思つたが、何くそこれ位やればやれるさと思い、母に大丈夫、心配御無用と胸をたたいてみせた。一日一時間半か二時間位だから勉強する時間は十分ある。四、五日して配達所から通知が来たのでいさんで出かけた。はじめは見習期間で配達の人について歩いた。僕の受持は百十軒あまり、第一日目はどの家がどうだったか夢中で分らなかった。帰ったら足はボッコみたいになるし、くたびれてこのまま寝てしまいたかったが、母との約束を思い出して机の前に坐った。四、五日たつと、どうやら道順は覚えたが、まだ一軒一軒の家をはっきりのみこめない。もう直ぐ一人で配達しなければならないのに、こんなことでどうする、僕は何て頭がわるいんだろうと情なかった。しかしよくしたもので、一週間もたつと、すっかり判るようになった。

四月一日、中学入学式の日の夜から一人で配達した。「夕刊ッ」「夕刊ッ」とはり切って一軒一軒声を出したせいか、終った頃には声がかれてしまった。一月たってはじめてお給金を頂いた時は、嬉しくて母も一緒に嬉んでくれた。母が少し涙ぐんで、仏だんにお供えした後、母と使途を相談した。先ず学級費と学用品代、そして今月から雑誌も一冊買うことにして、残りは修学旅行や高校入学の時のために貯金することにした。

何だかとても得意な気がして、歌でもうたいたいほど愉快になり、希望が湧いてきた。

やがてだんだんと馴れてきてつかれもなくなり、宿題のことなど考えていても足は機械的に一軒一軒動くようになり、僕の夕刊配達も一日も休まず続けて一年あまりたった。しかし、その間いろいろなことがあった。吹雪の夜は目もあけられない位で、雪だるまのようになって帰ることはこの地方としては珍しくない。そんな時、母はラーメンを作って待っていて下さった。ある家では戸口がかたくてなかなか開かない。その戸を無理にあけよ

うとして、屋根から雪崩が頭の上に落ちてきてクラクラした事もあった。犬にかみつかれてビッコをひいて配ったこともあった。しかし、僕が「夕刊ッ」と入れると「御苦労さん」と言って下さることでも嬉しい。「毎日御苦労さんね」とお菓子を頂いた時も嬉しかった。

配達している中に、はじめから計算に入れていなかった一大収穫があることに気が付いた。それは身体は勿論だが、非常に足が丈夫になったことだった。いつか遠足の時、かなりの道程を歩かされたことがあった。学友の殆んどが歩けなくなったのに、僕はまだこの上一里や二里位は平気だと思ったほどつかれなかった。今年の運動会にはマラソンに出てみようかと楽しみにしている。それから自分の果している責任というものがどれだけ重大かと思うと、どんな面白いことをやっていても、時間がくれば配達にゆく。これが義務だと思えば、別に惜しいとも思わない。ただ困るのは運動の練習や、グループの勉強の時などである。しかしそんな時、友人達が一緒に配達して、少しでも早くすむようにと手伝ってくれる。しみじみ友情のあたたかさを感じ、理解ある先生、はげましてくれる母、友人達に囲まれて、自分は幸福だと思う。

もう大分貯金もふえた。修学旅行にもゆける。母の日に母にプレゼントもしたし、弟や妹の誕生日や入学にささやかなお祝も買ってやった。成績も小学校の時より少しだがよくなった。

働くことは楽しい、本当に楽しい。一日は忙しいが、僕にとって張合のある毎日だ。これからも頑張るぞ、誰にも負けずにうんと頑張るぞ。

牛乳配達

青森県　木村鎬栄
（牛乳配達　十五歳）

ボーン、ボーン、ボーン、柱の時計が音もあざやかに午前の三時をうつ。僕は時計が鳴りだすと、どんなに眠くても、ぱっと飛び起きる。もうそのくせがついてしまったのだ。朝の空気はなんと言ってもすがすがしい。そのすがすがしい空気を、胸一杯に呼吸しながら自転車を飛ばすのもなかなか気持がいい。牛乳店へつくと、僕は従業員たちと一緒に小型自動車に乗り、牛乳専門の製酪工場へと向う。製酪工場までは十二、三分もあれば着くからすぐだ。工場へ着くとただちに、自動車からおり、工場の中の冷蔵庫から約千本の牛乳を運び、これを自動車に積み込んでくるのである。その積み込む時の苦労は容易なことではない。一本一本きれいに並べないと道がでこぼこなため、ビンがころんだりするから、ていねいに取りあつかい、つい時間を費やしてしまう。やっとの思いで積み込みも終ると、もう五時に近い。これは大変とばかり急いで牛乳店へもどると、今度も又、やっかいな仕事にぶつかる。牛乳ビンの口へ紙のふたをし、ゴムテープでとれないようにするのだ。それも千本の牛乳ビンだからなかなかの時間を要する。それもようやく終った時は、すでに五時半を過ぎている。

次は、いよいよ配達だ。僕の配達地域は、十和田通りと、市営住宅で、お得意先は五十軒を越えている。僕は

自転車に牛乳をつけ、カタカタと音も軽やかに配達しに出かける。

五時半と言えば大分明るいので、どこの家でも起きている。「お早ようございます。牛乳です。」と言うと、台所後の奥さんが飛んで来て、

「はいどくろうさん」とにっこり答えてくれる。この言葉は牛乳配達の僕にとっては、一番うれしい。こう言う気持は牛乳配達、あるいは新聞配達をやっているもの全体に共通な喜びであると思う。だが仕事となるとやっぱりむずかしいことばかりだ。集金に行った時など、お金の勘定が合わなくて泣きたいこともあった。又仕事の都合で十分ばかりおくれてあやまっても、きいてくれなかった大人もいた。雨の降った日など、びしょぬれになっても責任を果たすため遠方へ配達に行ったのに「どくろうさん」という一言も言ってくれなかった人もあった。そんな時は、いっそのことやめちゃおうかという気持が強くなってくる。でも自分の家の環境からどうしても止めることはできなかった。母にはげまされ、友達にもはげまされたので、歯を食いしばって今日も又朝早くから配達をしなければならなかった。しかし牛乳は人間の健康を回復させるために最も良質な薬である。もしも病人がいたら、そしてその病人が全然食慾がなくて困っているとしたら、僕の届ける牛乳によって貴い生命をとりとめるということにならないとも限らない。考えてみると皆が自分の早く来ることを待ちうけているような気がして、自転車のペダルをふむ足もだんだん速くなって行く。

こうしてやっと一日の仕事を果たし得た時はもう七時半頃になっている。それから家に帰って朝食を簡単にとり、勉強道具をそろえて学校へ走るのだ。だからいつも学校はすべり込みセーフとなる。他の人が「牛乳配達ってらくそうでいいなあ」という言葉をチョイチョイ耳にするが、決してらくなものではない。

どんなに小さな仕事でも全精神を集中しなければ良い結果が出てこないのだ。僕もはじめは大変らくな方面をやらせてもらっていた。しかし仕事はこれでいいという区ぎりがない。二月のある日、僕は大深内を配達してくれと命ぜられ、一時はひやりとしたことがあった。その

日は猛吹雪で、自転車も通らぬというきびしい寒中にリュックを背負いバスにゆられて配達したのだった。又バスも通らない日は歩いてでも配達したのだった。学校から帰って来てすぐ、大深内に牛乳を持って歩いていったが、帰りには、腹がへってふらふらになって牛乳店へ戻った。そしてこんどは町の方もすこしまわったが、雪のため道路がさわさわして、歩いているんだか歩いていないんだかわからないくらいだった。腹はへるし、ふらふらするし、歩けない位だったが、でも僕は歯をくいしばってがんばり、家に帰って来た時は九時をすぎていた。こんな数々の苦労を経験して、今では幸福だとしみじみ思う。よくもしんぼうしたものだと、又よくもここまでこぎつけられたと自分ながら感心することさえある。母は僕を深く理解してくれ、よく協力してくれた。今さらながら母に対して頭が下がるのである。母はよく僕にこう言う。「働けば働くほどそのむくいが何時かはむくいられる」と。牛乳店の主人には叱られたこともたびたびだった。しかし僕は仕事には負けなかった。又仕事も止めようともしなかった。そこに働くことの喜びを覚えたからだ。

月々にもらう給料なのであるが、決してむだ使いはしていないつもりだ。僕の実力で稼いだ金で修学旅行に行くつもりである。血と汗を流した尊い給料なのである。

僕は才能には恵まれないけれど、健康には恵まれている。学生時代から働く体を養い、将来どんな仕事にぶつかっても恐れない力と勇気を持って、ことにあたるつもりである。

どんなつまらない仕事でも、どんなにつらい仕事でも、楽んで自分がそれにまじめに働くつもりでいる。そして仕事はいつさい責任を持ち、よい個人、よい社会人、よい職業人になることを目標として日々がんばって行きたい。

入社通知のハガキ

岩手県　高橋道子
（食堂給仕　十五歳）

学窓を巣立ち、実社会に入って日も浅い私にも、やっと落着いて周囲を見渡すことができるようになりました。

私は某デパート食堂部の給仕です。入社試験では、全然自信がなかったのですが、入社通知のハガキがきたのです。その時の気持は天にでも昇るような感じでした。どんな苦しいことがあっても、やり抜こうと固く決心しました。あの時の感激が忘れられず、カバンの中に今でも、入社通知のハガキを入れ、時々取り出して見ます。

最初数日の私には、すべてのことが珍らしく、着かざった人々の入れかわりたちかわり出入する有様に、時々ぼんやり見入っていることがありました。緊張して何から何まで固くなっているので、思うようにできませんでした。メニューは五十種類もあり、今まで食べたことも見たこともないものばかり、それを覚え切るのも一苦労です。その料理の番号を覚えても、どんなものか分らず、テーブルをまちがえて、お客さまの前で真赤になったことも二、三度ありました。ちょっとぼんやりしている時など、「何、ぼんやりしているの！　貴女達なんか、私達の倍も、働かなくてはならないのよ。早くこのランチをあのテーブルに運んで！」突然きびしく叱られます。「あ！　すみません。」私は、はっとして頭を下げま

す。けれどこんな時、もう少し親切に叱って頂けたらと思うのでした。こんな時は、この仕事がいやになりました。でもこんなことでセンチになってはだめだめ、と何度も自分自身に言い聞かせるのです。

見習期間が三か月あり、それを終えると、自分のテーブルを受け持つことができる仕組になっています。この食堂はお昼どきなど、立ち食いするお客さんもある程の忙しさで、全然暇がなく、ほとんど立ち放しの仕事です。立ち放しのせいか、十人もいる先輩の足は、みな太くなっています。生れつき「やせぎす」な私は、かえって太くなった方が良いなど、一人きめにしているのですが、お昼食の時など、しきりに足のことを気にしているお姉さん達の話を聞いていると、一人でおかしくなります。

短いこの二か月の間、学校で教わった以外の色々なことを、実際に見、聞き、知りました。いちばんはっきり身近に知ったことは「人のためにつくす」ということのようです。ほんのちょっとしたことで、好意を持たれたり、お互いがうれしくなったりするのです。世の中の誰もが、「人のためにつくす」という主義を守ったら、どんなに良いことかと考えます。

「明朗さと素直さとを持ち、自己に忠実であり、また女としての女らしさを失うことのないように、万人に愛され、好かれるような、また人を愛し、好むように、ただそれだけで本当の意味で尊い人なのです。」中学卒業記念アルバムに印された恩師K先生の筆蹟。私はこれと「本仕事、我が務め」という、このデパートのモットーを守り、何年後も入社通知のハガキをカバンにしのばせていられる、明朗で素直な、そして良き社会人になろうと、一日一日を有意義にお務めしています。

日誌帳を開いて

宮城県　佐藤　巌
（呉服店々員　十七歳）

今日も何事もなく一日が終った。店を閉め終ると、自分の今まで緊張していた気持が、すうっとぬけてしまった。ああ今日も重荷を目的地まで運びおえたと思う安心感からだろうか。床につく前、今日の出来事を考えながら、時折書く日誌帳に目を向けた。

一月十八日　今日は朝から失敗の日だった。商品を出しお客の来るのを待っていた。八時頃一人の百姓姿のおばあさんが学生服を買いに来た。五年生とのことで五号をお目にかけると「価は」ときいた。「九二〇円ですが」と答えると、「まけてけさい（まけて下さい）」と言った。「ではおばんちゃん（おばあさん）に特別九〇〇円でいいから」と言うと「もう少し負けさい。孫にはまち（おこずかい）で買ってけるんだを（買ってあげるのですから）」と言って聞かない。「もう値を引くところがありません」と強く言うと、「では他店より買うかわな（買いましょうかな）」と言った。突然、だまって奥で新聞を見ていた主人が「なんだ」と声をかけた。すぐ、こういう訳ですと話すと、主人はおばんちゃんに向かって「では特別朝口だからもう二十円引いてあげっから」と言うと「そすか（そうですか）。んでいただいていいんから（それでは頂いて行きますから）」と言ってすぐ買って喜ぶようにして店を出た。おばんちゃんが帰るとすぐ

主人によばれたのでいって見ると「なんだ今の人に対しては」と言われ、「さあ」と答えると、「百姓のおばんちゃんだからと思ってあんな口を聞いていいのか。『これ以上だめっしゃだめだいちゃ（だめ、だめですよ）』とはなんだ。口の悪いこと。売らずに客を帰してもいいのか。もっと口に（言葉に）気をつけて応答しなさい」と注意された時、自分にはなんだか訳がわからず、面白くなく、一日ぼかんとして暮してしまった。

一月二十二日　朝から日本晴で店の前で日なたぼっこをしていると、三十代の男の人が肌着を買いに入って来た。急いで用をすませ、勘定となったとたんに、彼は真赤になって「しまった。あわててさいふを忘れてきた。あとできますからとっておいてください」と言って逃げるようにして店を出ていった。よくもまあ、朝からあわてる人もいるものだと思いながらも、自分もこんなことがあったので、ああお客さんははずかしかったろうなあと同情もした。今日は非常に調子よく、お客様から「番頭さん商売上手だとと、では番頭さんの言うとおりこれにしましょうか」と、自分の推した品を快く買っていただいた時、やっぱり自分は商売が上手なのかと、自分が自分でうれしく、うぬぼれ、よしやろうと思う志を強くした。こんな失敗やほめられてうれしいと思ったことで日誌が占められているのを見、だれとも語り合うことのできない自分が思ったことを書いては心をなぐさめているのだかもしれない（であるのかもしれない）。失敗した日などはがっかりしてしまい、自分はもうだめだと力を落し、住込呉服商の店員として歩んで来た一か年半の過去を振返り、なんだか自分が全然前進していないような気がし、一里半はなれた生まれ故郷から時々友人達が遊びにきた時の彼らの派手な服装、自由な行動と、しかられてがっかりした気持とが一緒になって、今日までの自分の進歩が見いだせず、友人達や他の人々の進歩だけ見えて、自分の選んだ道を失いかけるのだ。反面、今日注意されたのは自分がお客様に応答する心がまだできていないからだ。いなかでは価をねぎる客が多い。でもこれが小売店の強みかもしれない。そして今、自分が自由にならないからとて、派手な姿をされないからとて、将来必ず彼ら以上にできる日がくる。自分の職業はそれは

みんなの職業よりもつらいかもしれない。小さな町の呉服店の住込店員としての職は、それは良い職ではないかもしれない。自由に外にも出られず、朝から晩までお客様を相手に働き、月中一日の休みとてない。大きな会社のようにたのしいレクレーションとて全然ない。でもそれだけ自分が進んでいるのだと思う二つの意見にわかれ迷うのだ。又お客様からほめられた日などは、自分にも力はあるんだ、よしやるぞ、父も母も失った自分だ。だれもたよる人とてない。でもおれにはお客様がいる。やるぞ親切をモットーとして必ずやるんだ。あの店に、あの店員がいなくてはと言われるまで。それには長い年月がかかるだろう、色々の邪魔物が横たわるだろう。でもやるんだ。と、こんな日に限って不思議な位自分の前途が明るくなるんだ。今夜も日誌帳を開いては、つまらぬことで迷ったり、希望を大きくしたりしたことで日誌が占められているのを見て、自分だけが、立ち上ったり又倒れたりする連続を繰返し、毎日をすごして行く、つかみどこのない変な人生行路をたどっているのだろうかと、考えさせられるのだ。

実社会に出て感じたこと

秋田県　佐藤澄子
（文選見習工　十六歳）

中学校での教育を最後に、これからの進もうとする道や目標に最大の希望を胸に抱いて、元気よく実社会へ足

をふみ入れて早くも一年の年月が過ぎ去りました。この一年間にあった様々の事実を書き、世の中の大人の人々に考えてもらいたい、きいていただきたいと思います。まず私の現在勤務している印刷所の環境は、私達に適したよい職場とはいわれないように思えるのです。私達のおかれている立場というものが、大変に苦しいのです。ちょうど広い海の上にただよっている難破船のごとく、波に自由にされるように、上の人のいう通りに、何んでも、「はい」といってききいれなければならない訳です。善悪にかかわらず。自分達のいうことは無理にやらせ、私のような年少者の意見には、あまりにも無関心なのです。言論の自由を認めない場合が多く、例えば、残業の点などを考えても、年少者の残業は労働基準法で禁止されているにもかかわらず、強制し、断ると、「我がままな子供だ」とか「なまいきだ」とかいって、ただ私達を悪くばかりいって、労働基準法に違反していることを知っているのか知らないのかと疑問を抱かずにはいられません。いいえ知らない筈はないと思います。各現場に、労働基準法について書かれた紙が、かかげてあるのですから。ただそれをまもらないだけなのです。忙しい時は残業を一週間も続けて、むりやりにやらせられます。すると、自分の仕事は予定どおりには全然進まず、体も疲れてしまいます。特に私の仕事は文選（見習）といって、目がとっても疲れるのです。勤めを終えて家へ帰ってくると、家事の手伝いをして、後は寝る事しか考えない日もたびたびあるくらいでしたから、通信教育は受けてみたものの、さっぱり進みません。ある時授業を受けに行ったら、こんな題で討論会が行われました。題というのは、「勤労と勉学は両立するか」というもので、これに対して、一人の生徒が「先生、それは努力次第で出来ることもあるし、努力なしではできません」ということを発言しました。また、ある雑誌には、「人間形成の道」という題で、次のような事柄が記してありました。「高校へ入れる学生と、入れないで中学からすぐ仕事につく若い人たちとの相違は、大変なものである。社会への出発のそもそもから、まるで別のコースにおかれているようなものである。学校へ入っている人は優越感を抱き、働いている人は反対に劣等感を抱き勝ちになる。し

かし結局は人間として自己を完成するための道なのだ」という事を述べているのでした。私はこの文を読んで大変心をひかれ、かつ教えられるものがありました。私も自分に与えられた境遇に対して、常に負けていたわけで、ひょっとすると上級学校へ進めなかった自分に劣等感を抱き勝ちでした。この狭い気持を捨てて、これからも仕事に精を入れなくてはいけないということを、つくづく感じました。それには、個性に合った職場で働くことが一番良いということはわかりますが、この現在の就職の困難な時に、個性に合った職場を見つけることはなかなか容易なことではないのです。ですから、今、職業についている人でも心から働く喜びを味わっている人は少ないのではないでしょうか。それから、一年間をふりかえってみて、中学校時代にもっともっと職業に対しての知識や技術を身につけたかったと思いました。どうしても中学三年の時は進学の方面に先生達は力を注ぎ、就職の方にまで、なかなか手がまわらなくなるのではないでしょうか。もちろん進学の道を選ぶ人が多いからでしょうが、もう少し就職する人の方にも職業に必要な、珠算やペン字の練習などを教えていただけたら、と思うことがあります。又、先に就職している人は、後から入った人を親切に導いて、お互に仲よく仕事をしていったら良いと思います。以上は私がこの一年間に体験したこと、又は考えていたことを述べてみたものです。今の私は、一生懸命働いて、父母を始め妹や弟と協力して、一日も早くよい家庭を作り上げていきたいと思っています。これが私に与えられた最大のつとめだと思いながら。

見習人となって

山形県　後藤花子
（洋裁見習　十七歳）

私達の住むこのM市は、昨年誕生したばかりなので、市とは名ばかり、三万五千にも満たない小さな市である。一町六か村からなるこのM市には、洋裁研究所一つと、お花やお茶の教習所があるが、貧しい家計からはその教習を学ぶこともできず、私の弟子入りも当然のことだったのである。今日では見習人という名に変っても、世間の人は弟子、弟子と言っている。

弟子なんて耳ざわりの悪い言葉だなあ、と思いながらも弟子という生活に甘んじなければならなかった。

とうとう弟子入りの日が来た。私にしては、けっして待ち遠しい日ではなかった。内心は、どうせ弟子にいくなら都会にでも出ようか、一生の仕事を覚えるためだもの、一人前になるまではどこにいても耐えて行くことは同じだろうと、都会か、町かに出たさでいっぱいだった。仕事を覚えるための条件を考えると、都会を選んだが、身体の弱い母を思うと、都会に出る決心もにぶってしまった。人として認められ、自己の存在を得るには、少しでも理解ある指導者について、巾のある色々の体験をすることも大切であるが、自らの道に忠実であれば、きっと目的が達成せられるとも思った。

もちろん、当面した師弟生活の矛盾に順応し、生きていく根強さを自覚して、劣悪な条件の中に自分の歩みを

見いださなければならなかった。長い間の家父長制度からぬけきらない、従われること、従わなければならないという双方の行き方、男性が支配に立つこと、この権勢力に反撥を感じながら——。

生きる道を求めて、洋裁を選んだ。現在の就職難時代では、恵まれた条件など、あろうはずもない。不利な条件の下では、上達することが難しいかもしれないが、絶対不可能だろうか、私はそうは思わない。根強い師弟生活の中にも、自分のベストを盡してこそ、成果は期待されるだろう。又実社会に出て、色々の多くの体験を通して、その仕事が認められる方が、人間としての値いがあると思うのだが、どうだろうか。一人勝手にそんな事を考えてみたりする。

女性は物事に憧れ易いという。確かに憧れ易いかもしれない。近頃の娘達は町に出る度に、流行だといって品物を買うようになったとか。

家の経済も考えず、自分のこととなると金をおしまず、お花だとか、やれ、お茶の会と、一生懸命である。一部の人達であるが、楽しみを目的として、お茶やお花を習いに行っている。そんな憧れながらの教習や、花嫁修業と違って、私の場合は、初めから生きて行くために、食べていかなければならないという、深刻な問題があったのだ。

都会へ出ることを断念して、私の住む所から遠くない隣村（旧）の或る洋服店に、見習として入る事になった。そこの洋服店の主人は、五十代の人で、若い時からすでに二十人もの弟子を仕上げているとかで、腕の評判がよく、かなり温厚な人柄だということだった。それだから技能者の養成に当っては、十分な理解力も持っているらしいようだった。家の都合では通いの方がよかったのだが、通いでは覚えられないという先方の理由から、住込みになってしまった。

見習いとして入った住込みの生活は、一年半を迎えようとしている。一年の中から得たものは、根強い師弟生活の辛さである。

朝は飯炊度に早く起床して、掃除と、水くみ、言いつけられるがままに、何んでも「ハイハイ」と返事しなければならない。

今のような気候なら、それ程でもないが、こぼした水が凍りつく、寒い時など泣きたくなるのも時々だった。朝早くまだよく明けない中に、誰も通った跡のない雪の道を、毎日井戸に水くみに行った。張りつめていた井戸の氷を、天秤棒で割らなければならない日もあった。

朝食もかじかんだ手で主人夫妻に、お給仕しながら早くすまさなければならず、皆んなより遅く食卓についた時など、食べるものも食べずに、早く食卓を退いてしまう時もある。

食後は茶碗洗いで後は仕事となるが、食前の洗面さえ、ゆっくりすることもできない。

日中はお客さんへのお茶湯を沸したり、雑事の使いまできせられ、食後の休みもない。昼もやはり食後の後片づけは全部私の仕事である。

或る日昼食を終えて、私が後かたづけをしていると、「ごめん下さい、労働基準監督署からですが」と名刺を出した。私が主人に取次ぐと、いぶかしそうな面持で名刺を見ながら、下に下りて来た。私が後かたづけを続けていると、係さんと主人の話が始まった。

署からの係さんは、初めに私の生年月日等を聞いて、何か書類にしたためていたが、満十八歳未満だから、労働時間は八時間くらい、休みは週に一回等、と話し、賃金、娯楽、養成指導員の有り方、見習人に対するいろいろな件について、主人にきいた様子だった。私は外で水仕事をしていたので、二人の対話を聞かなかったが、水仕事を終えて仕事にかかろうとしていると、主人は「馬鹿野郎ばかりきて、人の仕事に邪魔してける」と、言いながら、さっきの名刺を破いてしまった。主人にはよほど気にいらなかったらしい。お茶も出さずに引込んだ主人の妻も、二階から下りて来て、二人でぶつぶつ言っていた。私は二人の不平をミシンの音で消してしまった。

お盆や年始の特別な休日しかない、毎日の労働と、夜は夜でしぶい目をこらえながら、十時までの作業、それどころか「K洋服店の弟子達なんかまだ続けていた」と私に言う。

この家の人は私達を、いくら使ってもよいと思ってそんなことを言うのだ。少しの賃金もくれずに、使う事だ

け考えている。楽しみと言えば二か月に一度位、一晩泊りで家に帰る他は何んにもないじゃないか。そんな生活は一年でもうこりごりだ。帰家の途につきながら、もう行くものかと度々思うが、家の人から、弟子なんてそんなものだ、そんなことに負けるなら、どこだって勤まらないと言われる。私は、そうした絶対服従の中からでも、生涯かけての技能と知識を得られるならと思うのだが、今日のような盲目的な徒弟制度では、自分で判断した技能しか得られないだろう。私の場合は、一人前の有能な人として立つことはできないだろう。

立派な技能を持った職人を育成するには、理知的な巾の広い考え方と、私利私欲にとらわれず、奉仕の念をもって努めてくれる指導者であって欲しいと思う。辛い生活を覚悟していたとはいえ、自分の毎日は、明暮だけのくり返しで、余りにも的はずれだったのではないだろうか。

今は社会への目が開かれ、私達の生活にすべて便利の良いように、必要な色々の公共団体機関や、施設が設けられるようになった。

それらの機関による法規や、施設に私達の生命は支えられている。だが長い間の考えから一朝一夕に、新しいものを意識しようとせず、古い昔の名残りは、何時まで消え去らないのだろうか。根強い徒弟生活の封建性の名残り、服従的な見習生の惨めな日常に自己の存在を失い、自分の一生が不安になって、生きる勇気もなくなり、苦しみのない方向の世界に近づいて行きたくなる。これは現実に耐えることができない、弱虫だけが想像する世界だろうか。

最後に、年少者の皆さん、働く若人の集いを作ろうではありませんか。主人の言うなりに、黙々として従っている建具工や、自転車工、商店の店員さんのほとんどは、皆服従的奉仕をしている。労基法も適用されない。私の主人のような人には、あってもなくても全然無関係らしいが、腕前をみがいてゆく熱意から、さらに良くなりたいと努力する時、いろいろな障害をこえなければならない。その障害物を打破するには双方の協力が必要である。そのためには指導者への講話会等の催しもよいだろう。

又見習生に月一回位の養成講座を開くとか、テキストをくばるとかで、専門的な技能を教えることができたら結構だと思う。

新しい時代の職業人として、私たちはこれから広く世間全体に目を向け、社会の一員として職業にたずさわり精一杯奮闘する。

これこそ私達個人の成長発展の道であると共に、又大きくは我が国の進歩であろうと思う。

妹と共に

福島県　西間木絹子
（繰糸工　十七歳）

四月十五日、今年も又新しい養成工が入社した。私達の入社日の事を昨日のように思い出した。しかし、早いものだ。あれから三年目になる。あの日も工場の桜の花が風に流され、まるで初雪でも降って来るようでとてもきれいだった。姉妹で働いている友を見て、とても羨ましく思っていたのに、これからは反対に羨ましがられる番になった。久しく見ぬまに妹の背丈の伸びたのには、まず驚いた。私が背伸びしてもまだ低い。母も私と妹を見くらべて驚いたらしい。「なんだ、靖子の方が大きいんでねえか、姉の方が妹みてだぞ」と言って大笑いした。私と妹は苦笑するほかなかった。友達からも決って何か争い事があると「背の低い姉ちゃん」と言ってからかわれた。でも私は、妹の方が大きいのを自慢するように話すのが、今ではとても嬉しい。まだまだ中学生だと思ってい

たのに今日からは一人の労働者、社会人として出発するのだ。授業には、どの子もどの子も大きな希望と期待に胸をふくらまして、頬を真赤に輝かせていた。私のあの日の姿を見せられたような気がして、思わず涙があふれてきた。私は祈りたかった。社会や職場が、今羽ばたこうとしているこの小鳩達の大きな希望と期待を、無惨にふみにじることのないように、そして正しく明るく伸ばしてくれるようにと。

しばしの別離に名残りを惜しんでいる母と子、自分の懐から吾が子を今、この荒波に手離そうとしている母の気持はどんなだろう。「仲良く、体に気をつけて働くんだぞ。」そう言って母は、満足そうに振り返り、振り返り帰って行った。ああなんと嬉しそうな母の顔、五人の子を育て、今またこうして社会へ三人の娘を送り出してくれた母。「母ちゃん、大丈夫、私が靖子の事は面倒見るから安心して下さい。」姉として妹に恥ずかしくないように一生懸命働こう。そして親孝行しよう。私は母の後姿に力強く誓った。妹が入社してからは、とても仕事に張合があって寮生活がとても楽しかった。作業中時折り妹のことが気になる。そんな時は休憩時間にさっそく行く。「案外、家のことを思い出して泣いているんだべ。」「まさか、絹子姉ちゃんこそ家へ帰りたいんだべ。」と反対にやられてしまった。いつ来ても楽しそうにしているのでほっとする。私の養成の時とはまったく正反対、明朗活潑、天真爛漫、いつも生き生きとして、暗い影など少しもない。めそめそと過ごしてきた私の養成時代が恥ずかしく思われた。ある日、私と妹が外出した時、妹の同級生に逢った。真新しい自転車、高校の制服、その胸にはきんぜんと胸章が輝いていた。「あら靖ちゃん。」「あらKさん。」「どこへ行って来たの。」「今日は買物。」「あんた糸とり工場へ行っているんだっけか。」そうさげすむように言う友、もとは親友だったというその友のあまりにも高慢な態度に、私は思わず怒りを覚えた。「うん、まだ、糸とり覚えないけどこれから習うのよ。日曜休みだから遊びに来なね。」そう友達に自慢するようになんの屈託もなく話す妹を見て、私ははっとさせられた。私には何かが欠けていた。そうだ、社会人としての誇りだ。今まで女工、女工と自分を自分で蔑げすんでいた私、私は

妹が本当に偉いと思った。「靖子も学校へ行きたいんだべ。」「ううん、おら学校になんか行きたくねえよ。」「靖子が学校へ行きたいと言えば、父ちゃんだって母ちゃんだって無理してもやってくれたのに、なぜそう言わなかったの。」「おら、ちっともあがりたいなんか思われえかったもの。それにこれ以上、金の事で父ちゃん母ちゃんに心配させたくねえもの。一生懸命働いて母ちゃんや父ちゃんに孝行するんだ。」そう言って希望に目を輝かす妹。さっと妹は高校へ行きたかったかも知れない。人一倍勉強に熱心な妹のために、私も姉も進学を望んだのに、それを押切って自ら職をえらんだ妹。きっと妹は良き社会人となってくれる。きっとなってくれる。私はそう確信することができる。あの日から一か月余、今は二交替で妹は多条繰糸、私は自動繰糸、互に職場は違っても、これからは、下らない虚栄心をすてて、自分の仕事に感謝の心を持って、いつも真剣に堅実に仕事に励んで行くのだ。妹と共に、伸良く伸び伸びと明るく楽しく。

上に立つ

茨城県　小室文子
（農業　十五歳）

「文子もう起きなよ」と、母の私を起す声がかすかに耳もとにひびいた。眠い目をこすりながら起き上ると、戸のすき間は明るくなって小鳥の声が賑やかである。頭上の時計が五時を打った。私は、毎朝のように食事の用意

に取りかかる。母は、裏山へ草刈りに出て行った。間もなく祖母が起きて庭を掃き始めた。六時には朝食が済む。兄は、町の工場へ出て行き、妹と弟は登校の支度をしている。

今日は陸稲を蒔くので、野良着に着替え裏庭に出る。やや冷たい風が静かに流れ、何とも言えぬ心地がする。私は力一ぱい深呼吸して、一人で豚小舎脇の堆肥の山を切り崩し始める。ふと後を向くと、父が松葉杖によりかかっていた。

父は、終戦以来関節炎で体が不自由になって働くことができなくなり、そのため私の家では生活がとても苦しく、母を始め家内中苦労を続けて来た。全く病人や幼児で働き手がないから、一町五反も耕していたのを急に耕作面積を減らしてしまった。

私は、この三月中学を終ったばかりで、まだ農業は慣れないけれど、これからは養鶏や養豚を取り入れ、一生懸命働いて、生活が少しでも楽になるように努力したいと思う。

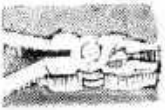
父は、「俺が丈夫な頃は二反分位の肥合わせは朝飯前に済ましたもんだ」といって、金肥の配合の事や、肥の切り返しについて細々と注意してくれた。母は洗濯を済して、誰か表へ来たらしく何か話している声がする。農家では早朝から作業にかかっても、ちょいちょい余り用事もない人が来訪して、無駄話に長時間を過ごしてしまうことが多い。又一寸来た人にもすぐお茶を出す。先方でも遠慮しながら腰を下ろして、二、三分で済んでしまう話を余計なことまで話して時間を無駄にしている。この点は第一に改めねばならないと思う。これでは作業の能率が上らないし、ただ忙しいと仕事に何時も追いかけられていて、新聞やラジオ等によって教養を高める時間の余裕も持てない。私は、一年を通じて無駄がなく平均に働いて、しかも充分教養娯楽の時間が取れるように、農作業を計画的に工夫してやらねば駄目だと思う。

そこで、私は、日記をつけて一年間の農作業の在りのままを知って、来年は予定を作ってやって見る積りだ。

やがて、母ともっこで肥を畑へ運び出し、祖母と私で麦の畦間へ作条を作った。腰を曲げて鍬を引きずって後ずさりにして畦を作るのであるから、祖母は海老のよう

に腰が曲っていても、この作業は苦しいらしい。私も腰が痛くなって途中で何回か立ち上った。全くいまだにこんな原始的作業を改めないでいるから、農村に腰の曲っている人が多いのだと思う。私は、早速せびき鍬（立ちながら畦を作る鍬）を作る事を父に相談した。母が肥をまいた後から祖母が種籾を蒔いて私が土をかける。肥がなくなると父母ともっこで運ぶ。全く重たい肥である。腕が抜けそうだ。こんな作業も畑へ農道を作って、車で運べば楽で能率も上るのに、何十年も平気で続けて来たのである。このように原始的な作業が農村には沢山行なわれている。これは、現在の農村に新しい教育を受けた人が少いから、他の産業のように近代化することがおくれているためだと思う。現に、私の級友達も、進学した者の他はほとんど都会の生活にあこがれて出て行ってしまい、今農業に従事している者は私とA子さんだけである。私は、在学中やがて生活改善普及員になって、農家の生活改善のために働きたいと大きなことを夢見ていたが、働き手のない家の事情を考えると外に出るわけにもいかないから、卒業後は母を助けて農業をする決心をした。そして、今後も土とたたかいながら勉強して、生活や経営の向上をはかりたいと思う。

やがて、夕陽が筑波の峯へ落ちかかる頃、一反五畝ほど蒔いて今日の作業が終った。慣れないせいか体がへとへとに疲れた。でも夕もやに包まれて静かに暮れて行く野づらを渡るそよ風に頬を吹かれながらたたずむと、前の田から蛙のコーラスが流れてくる。しばらくうっとりして日中の疲れも忘れてしまう。詩の世界である。私は、土に生きる者の喜びをしみじみ感じた。



工場生活から

栃木県　菊沢靖夫
（織物整理工　十七歳）

「お早うございますッ」と、威勢よく職場に飛び込むと、重く威厳豊かな先輩の声が「お早う」と、笑顔を添えて答える。

僕はここから一日の活動を始めるのだ。まず作業場の回転窓を全部あけると、冷い空気が、まだ眠りから覚めきらない鋸屋根の屋内を快よく洗う。すかさず凄じい始業サイレンが鳴り響き、あちこちからモーターが唸りだす。僕も力強くスイッチを入れる。何の取柄もない機械の騒音が、朝にあっては、新たな労働意欲によって、新鮮な調べに聞える。しかし、その調べも二時間たらずの寿命にすぎない。やがて、仕事にうみあきた工員の頓狂な声と共に、十時休みがくる。十時休みとて就業規則にはうたってないが、先輩に誘われて、いや応なし裏の空地へしのび出る。

ここへ来ると、種々なニュースが入る。中でも社内の人事ニュースは頻繁だ。そこに起きた矛盾にかきたてられ、工員は嫉妬や怒りに燃えるのであるが、いずれも溜息に流れてしまうのである。又、ときには、新聞の一面が、みんなの大論争を巻き起こすことがある。又、話のあいまあいまに、ちゃりを入れ、いつも人々を爆笑の渦に巻き落す冗談王もいて、まさに、このひとときは、さながら、楽園である。だが、これからがちょっとつら

い。仕事は山と来て、空腹はつのりつのって、疲労は刻々と身にしみるのである。これにつけくわえて、いつも工場長の巡回があるのだ。又、大時計の回転の遅いのが、目に余る。しかし、こうして待つ昼休みは、閑甚や、卓球なども待っていて、なお更楽しいものになる。

昼休みに一気に遊び過ぎるせいか、午后は、なんとなくつまらない。その上ねむいのである。だからたいていの失敗はこの時間に演じられる。ベルトにワイシャツの片袖をもぎとられ、左手に大怪我をしたのもこの時間だった。でも例の三時休みが来ると、気分は一新する。ただ肝心の就業規則にうたってないので、ちょっと、上司の姿が気にかかる。気にかかるのは上司が文句を言うからではない。又、何かでその代償を奪われる恐れがあるからでもない。それどころか、上司でさえ、たまたまここに顔を出すのだ。それでも工員達は、なお、上司の目を盗んで脱出する。思うに、この行為は、必ずしも必要がさせるのではない。知らぬ間に潜んだ工員独得の習慣が、あらわれるのかもしれない。そして僕も、その習慣を身につけてしまったのだ。あらゆる面において、先輩の一言一句は、僕にとって唯一の社会教師でもあるのだ。

やがて、開放のサイレンが鳴りわたると、機械化された工員達は、振り上げたハンマーでさえ、そのまま投げ捨てて、逃げるように門を出るのだ。

僕は、こうした中で二年間すごして来た。そして、そこに生じた数々の喜怒哀楽は、心の道標となって、さまざまな方向に誘った。

わけても、最初の給料日は、大きな歓喜を与えてくれた。薄っぺらな給料袋を、新しい風呂敷でしっかりと包み、わずか一杆たらずの家路を走って帰った。「人類は衣類を欠くことはできない。僕も、一端ながらその生産を担っている。僕だって社会の要求する一人だ。」僕はこう思うと、働く楽しさが、とめどもなく湧いてきて、冥想のうちに、深々と労働の意味をくみとったものである。

しかし、それは束の間の喜びであった。冷酷な現実は、真実をもって生きようと誓った僕の心に、猛然と戦いを挑んできた。いくらそれに対抗しても、日増しに希望は崩され、絶望の果は、冷い現実の仲間とならねばな

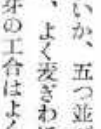
らなかった。長いものには巻かれろの観念が発達して、上役の御機嫌をうかがう目は必然的にこえてきた。だが、やがて来る純真な後輩も、循環小数のごとく、このように仕込まれるのだろうか。

こう思う時、僕は一つの大きな問題に激突する。それは明日の日本だ。こうした僕らが明日の日本を背負っていることだ。このままでは、何年たっても労働者の生活は、低下しようとも上昇することはないだろう。これでは、永久に健全な社会は訪れないだろう。

僕はここに教育の徹底化を切望するのだ。なぜなら、この泥濘社会を救うには、この道以外、僕には考えられないからだ。これからの社会を担う若人各自は、正しい認識と、高い教養を身につけ、働くものの健全社会を作らねばならない。

憲法は教育の機会均等をうたっている。しかしながら、現実はそれを許さない。そのため、幾十万の若人が悩んでいることだろう。年少労働者を長時間使って得た利益は、その場限りのものだ。が、これらの向学心に燃える若人に、教育の機会を与えたなら、きっと明日の日本に活用して、国家的な大利益を挙げ、明るく、住みよい日本となるのも夢ではないだろう。

これが二年間の働く生活から、しみでる僕の声だ。



十時休み

群馬県　鳥山ひろ子
（農業　十七歳）

「いいか、五つ並べてみて中の三つを取った位の間隔。ほれ、よく麦ぎわに並べて……」「……」「うんそれでいい。芽の工合はよく見るんだぞ。」うね越しに説明しながら父が起してゆく黒土はしっとりしめって温かい。さっきからしびれるような腰の痛みを感じながらも、私は一生懸命蒟蒻を植える。時折、額から眉毛を伝って落ちる汗の玉が太陽にきらりと光った。風が小麦畑を渡ると、私は青さの波に呑まれてしまいそうで心がわくわくして来る。手拭で髪をかき上げ麦わら帽子姿の私の影が妙にちんちくりんなのは、もう昼が近いからだろう。「Kさんみたいに手拭で頬隠そうかな。色が黒くなるもの。」とちょっと心配してみるが、矢張り風の涼しさに勝たれて、そのまま作業を続ける。「一服するか十時半だ。」という父の言葉をきくや叔母の横を通り麦のうねに走り込み、それから川べりの土手に腰を下ろす。草のひやっこさ。

「戦争前はずいぶん蒟蒻も作ったが、食料不足で陸稲作りに移ってなあ。」枯れた木の根のような手で煙草をくしりながら話す父の話を、私と叔母は黙って聞く。「今年こそ蒟蒻がうんと育たなきゃ。」「うん、二か年もの米の不作と蚕の失敗にたたられちゃったもん。」「そうだな、この玉がこの秋掘る時にゃ二倍位太らあ。」と父は白っぽくきれいに乾いた鶏卵ほどの蒟蒻玉をころころところ

かしもてあそんでいた。

ふと横の桑園に目をやり「草が生えたなあ。」という叔母に、「Tちゃんとこなんか馬耕だってさ。家もすればいいんに。仕事も楽だし、能率的だし……。」と言い始めた私は、父に「じゃお前がすればいい。だけど一反するに鋤を五つ位折っちゃうぞ。」と大笑いされ出鼻をくじかれた。「ふうんだ。」とふくれてみせると叔母が、「ひろちゃん、それより今度の県会、Sさんが落選しちゃって惜しいなあ」という。「古顔だし、腰は低いし。」と叔母は盛んにほめた。「私みたいに未成年者は運動に二日もつぶしたんに……。皆熱中して選挙祭りだったよ、まったく。でも親友の父ちゃんだもの仕方ないや。」「だけどSさんいい人だよう。気取りだなんて人の悪口さあ。」と一本気の叔母は盛んに口惜しがっていた。「それに又村会の選挙だなんてよくまあうるさい日が続く。父ちゃんは又、事務所へ行き通しだろ。行かなきゃ駄目？」と今度は父の方へ話題を向けてみた。

「お付き合いだし、それに部落を代表して出すんだもの落選したらとんだことだあな。一票だって盗まれれば。」という返事なので私は考えてしまった。推薦制で押しつけら投票が本当の公民選挙という名でいられるのかしら？

「こんにちは。蒟蒻植え？」下の道から、畑帰りらしいMさんが声をかけてきた。はずんだような甘い声の持主で、いつも明らかな人である。

「十時休みなんだ。休まない？」「うん、じゃちょっと話そう。」「すぐそこへ行くよ。」と言いながら私は立ち上り、登り口でMと腰を並べた。

「その野良着似合うなあ。改良作業衣って着良いかしらん。改良した所説明してよ。」「うん、ほめてもらったもの、いわなきゃ悪いな。袖は替袖が有って、痛みやすい所にはミシンかけてな、ほら、肩や肘にこう。それに袖口に鈎ホックつけてこう折ると白い布が出て七分になって。ほら替袖の白とカフスの白で上品だろ。」「ふうん。今度四HCか青年団で皆の前で発表してみ。」「はずかしい。あがっちゃうもの。」「平気。ひろちゃん心臓強健だから。」二人して、よもぎをつんで投げあいながらそういって笑った。

働きたり

埼玉県　五十嵐　潔
（材木店々員　十五歳）

「畑、麦刈り、田植があと一か月後にどっと待ち伏せしてるんだ。思っただけでもうんざりしちゃう。八時間労働だなんて夢だな。」「うん、蚕が一番忙しいな。寝るのは四時間位きりだもの。だけど勤人みたいに八時間労働って実施できないんかしらん！」「そしてそれでも食っていける百姓にならなくちゃ。」「そんなら八時間仕事したらあとは、浴衣着て遊ぶか……。」「そんな……」二人して顔を見合わせて、又大笑いした。

はつらつとした笑い声が、緑にふくらんで来た野山にひびいて、小鳥の鳴き声も一だんとにぎやかに明るい。空も限りなく碧い。

仕事はじめを伝える父の声が、小川のせせらぎにのってきこえてきた。「じゃあ又あとで。」「うん又な。あ！そうだ。今夜の歌う会行こうな。呼ぶからなあ。」そういってMはしずかに「原爆を許すまじ」を歌いつつ麦畑のあぜ道に入って行った。白いエプロンと麦わら帽子がゆらゆら遠のいてゆく有様は、映画の中のように美しい。あの向うの丘でも誰か蒟蒻うえに余念がないらしい。蒟蒻よ、あの太い背大将のような茎でぐんぐん伸びて、貧しいこの山里をゆたかなみどりにつつんでおくれ。

目の前をつばめが一羽ついと飛ぶ。

僕は今年中学を卒業して、「上」と言う材木屋に四月一日から通い始めた。

ここは中流の材木店で、材木を山から買って来てそれを売るだけである。だから人数はそう必要でなく、実際のところ勤め人は僕一人である。旦那と、次男の兼ちゃんと、僕の三人でいろいろやっている。

朝七時半に出勤し、道路、事務室、材木の置き場を掃除し、リヤカーやオートバイでの運搬である。もう二か月余り通って、大分慣れて来た。材木の名前や、角の大きさも幾らか覚えた方である。早くいろいろ覚えて、一人前になりたいと思うが、一か月や二か月の修業ではどうにもならない。

「材木を持って行って頭を下げろ」との教えで、むやみにぺこぺこするようになった。自分でも誰のために頭をつけてもらって、誰のために下げるのか？と思うと、馬鹿々々しくなることもあるが致し方ない。

しかし、材木を担いだり、人に頭を下げることよりもっと辛いのは、沢山材木をリヤカーに積んで汗を流し、重いペダルを進ませながら、先生や友達に会うことである。この前もA君と会った。A君は高校へ進学したので、あの立派な制服に二本線の学帽をかぶって、皮の靴をキュキュ軽い音をさせながら、向うからやって来た。僕は古ぼけたジャンパーに、よれよれのズボンをはいている。A君は下を向いて、僕に気付かなかったらしい。或いは気が付いても悪いと思って、そっぽを向いているのかも知れない。僕も馬鹿にされたり、見下げられたりするのが辛かったので、知らん振をして通り過ぎた。僕はあの二本線の学帽が、とても羨ましかった。また、その学帽が僕を見下げているようで、くやしくもあった。

しかし、辛い、恥ずかしい、苦しいことばかりでもない。生まれて始めての月給日など、とても嬉しかった。あのふくらんだ封筒を見ただけでも、何とも言えない良い気持だ。家中の者にも、少なからず贈り物をしてやった。妹も、弟もみんな「きょっちゃんありがとう」「歯ブラシ買って貰ったんだもん、毎日磨くよ」なんて一番ちびの英二も言う。母は母で「学校に出ると入るじゃあ、随分助かるよ」などと言って喜んでくれた。僕も、母から小遣として幾らかの金を受け取った。僕は、この

金をいつまでもジーッと見つめてこう思った。この少しの金で、自分の今まで苦しんだ一か月間を、今度は楽しみで満たすんだと。

映画も見た。好きな本も買った。映画を見たり、買い物をしている時は、とても楽しい。今まで働く事とは、苦しいことばかりだと思っていたが、こんな楽しみもあったのかと、つくづく働く喜びを味わされた。また僕は、この頃金というものにどんなにか魅力を感じるようになったか知れない。金を得るために、毎日こうして働き、つまらない材木運びで一生を終らすんだ。金さえあったらこんなことをしなくとも、と思うと急に人生が嫌になって来る。しかし自分は考え直した。生れてすぐ主人であり、旦那ではない。親の援助と、自分の努力が必要である。自分が今こうして材木運びをしているのも、将来何か役に立つ時が来ると思う。だからこそ、日常生活のちっぽけな出来事や、経験を少しでも無駄にしてはならない。どんな時、どこかで、この苦しい経験が、世の中のため、自分のために、何倍になって戻って来るか知れない。自分は、この経験を忘れずに、一生の役に立たせなければならない。又役に立つ時が必ず来る。しかし、いくら大切な将来への経験であっても、毎日々々材木運びをしていたのでは、何の楽しみもなく、社会と言う大きな世界から、友達から、どんどん取り残されて行くようで気が気ではない。もっともっとたやすく金を得るために、また、社会から友達からおいていかれないためにも、自分は何か勉強し、それを生かさねばいけないと思った。ソロバンをしようか、英語をやってみようか等と真剣に考えた。A君が高校へ行っているのも、将来、金儲けにその学校生活が大きく役に立つから、毎日、ああして学校へ行っているのではないか。僕も勉強をしなければならない！

しかし、僕の現在の境遇から言っても、勉強することは、よういな事でない。父は亡く、体の弱い母を持って、帰ればすぐ家の手伝もしなければならないし、金もかかることだし、疲れた労働の後すぐ頭を使い、気を使ってがんばっていたら今以上に、精神的にも肉体的にもいろいろの点で努力し苦しまねばならないと思う。だけれどもそれに負けずに努力し、最後までやり通してこそ、

始めて生きがいのある、毎日毎日が活気づいた希望に満ちた人生になっていくのではないかしら、と、日々考えてはいるが、未だに、何をするというはっきりしたあてもつかめず、未だに材木運びに専念している。

労働の中の喜び

千葉県　山田　タミ
（製糸工　十七歳）

山鳩が淋しく鳴いている。

時刻は明日になろうとしているのに、さっきから同じ事を繰返し考えては、眠れないでいる。今日一日を何の苦しみもなく、楽しく働けたであろう十二人の室の人達の安らかな寝息が、静かに和して、夜空へと消えて行く。幸せな人達、小さな人間の感情なんて忘れて、楽しい明日への夢を見ている人達にくらべて、大人への矛盾に反抗心を抱いている私にとっては、「真の苦しみは」と言われれば「人と人との間をうまく通り抜けて行く難しさは丁度一本の丸太橋を渡っているように、常に不安が心をしめている。」としか考えられない。今日の出勤間際に、自分の不注意で切った一本の指のために、どんなに大人への矛盾に心が傷つけられ、苦しんだか。だが、その中にも心の苦しみを打消すだけの働く喜びを見い出すことができなかったとしたら恐らく、今以上に苦しんでいたと思う。

慌てて、走って医局へ行くと、看護婦からは、外の病院では聞かれぬような言葉を頭から浴びせかけられ、何

も病院らしい治療もしてくれず突き出されてしまった。嫌な思いをして来る必要はなかったと後悔した。滲み出る血に、不安で御飯も喉に通らぬままに出勤し、あの不安なサイレンを耳にする前に何回か心の中で繰返した言葉をやっと、指導員の前に行って言った。「すみませんけど、今日、指怪我しちゃって台に付けないんですけど、お願いします。」しかし指導員は、冷い一瞥を血の滲んだ指に投げかけ、すまして人に背をむけて行ってしまった。「情け知らず、薄情な人、意地悪婆さん。」あらゆる憎悪の言葉が心の中を駆けめぐった。

名札は変って一番忙しい屑糸だけをやる糸終いの台に付けられている。何も言えぬ小さな女工と見下げている意地悪い指導員の横顔を、喰入るほど睨みつけている時に、その憤りの心を静めるのに、どんなに友の言葉が必要だったろう。「悔しいけど我慢してね。いつかはあの人も反省する時が来るんだから。」

人の涙なんか何とも思わず、ただ台が常に変らず動いていればいいと思って、年下の者に憎まれても、年上の人に見込まれたい一心の考えを持っている古臭い考えのエゴイスト。自分の経て来た苦しい道なんて、大人になれば忘れてしまうのか。また同じ苦しみを、後輩に負わせて行く愚かな人。そんな人にかまわず私は働くんだ。糸を繰ぐんだ。何だってやって出来ぬ事はないんだ。不自由な肉体労働の中にも、働く喜びはあった。が、その心の中に、人間を憎む気持が働いていなかったら、どんなに幸せだったろう。

冷えた蒲団の上で、過去を静かに思い出してみる。入社後早二か年の歳月は流れたけれど、今日までの月日の間には、これ以上苦しい事が一ぱいであったではないか。ベランダで、一人月を見つめて、止度なく流れる涙に、唇をかみしめた夜も。センベイ蒲団の中で、悔しさに身も世もなく泣き濡れた夜も。が、みんな働く事のつらさより、人と、人との間の感情的な苦しみの方が多かった。けれど、今静かに考えてみると、何も知らぬ私をこれまで大人にしてくれたのも、みんな、こんな苦しみのためじゃないかと、涙にぬれた瞳で、星空を見つめながら、自身を勇気づけてみる。苦しい時、悔しい時、淋しい時、決って思い出されるのは、同じように貧乏な父

母のもとを離れて都会の波にのり出した友達である。もう、新ちゃんは魚屋の前掛を外して、やっぱり汚いセンベイ蒲団にくるまって、今頃は「母ちゃん。」なんて寝言言ってるんじゃないかな。あの人は末っ子で、母ちゃん子だったから。新ちゃん、清ちゃん、スミちゃん、皆んなもう眠った頃だろうな。でも中には、私みたいに苦しかった一日の反省に、まだ寝付かれないでいる人もいるかも知れない。ああ、この間の楽しかった同窓会が思い出される。東京銀座を少し離れた、東京とは思えぬ静かな浜離宮公園、緑の一面の芝生、澄切った池。川風は緑の草を渡り、私達十二人の心の中をもやさしくなでていた。隅田川の見える、小高い芝生の上に腰を下して、誰言うとなく「懐しいなあ。嬉しいなあ。」これで三度めの、集いなのに、みんな最初の時と変らず、嬉しそうだった。幼馴染の友、何かしら、打解けて話せる友、苦しみもお互に知っている友、いつもの通り自分の今苦しんでいること、悩んでいることを打明け合い、皆んなでもしも自分がその問題に打っかったとしたらと、我がことのように真剣に考えてくれる。「田舎への送金に、給料が少なくて困る」とこぼす清ちゃん。「惨酷な親方を持って、毎日ゲンコで殴られる。」と言う田崎さん。それぞれの苦しみは、私達だけでは解決できない問題だけど、その中にも「私行って、その親方を思い切りこらしめてやるわ。」と、自分の事のように力む友思いのスミちゃんも、結局は、慰め合う事で終ってしまう。暗い話の後には、決って、楽しい話題、田舎への帰省の相談、これだけは皆んな笑顔で考える。先生の話、進学した友達の話、一日も早く帰って皆んなの顔がみたい。だけど、私達はどんなに苦しくたって、淋しくたって、あの懐しい先生の教えて下さった宮沢賢治の詩「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」を思い出そう。皆んな静かに声を合わせて、朗読した。

「俺達は、もう、故郷の父母を恋しがったり、進学した友達を羨んだりしていられないんだ。働くんだ、学ぶんだ。偽気に学校に行っている人達よりは、常に精神の緊張で築き上げた勉学の方が、どんなに尊いものであるか、と言う事を良く考えて、皆んな頑張ろう。そして、利己主義な大人達にも、いつかは解ってもらえる時も来

るんだ。皆んな、働く事、学ぶ事に喜びを持とう。そして力強く進むんだ。」と、力強く言う村田さんにつられて、皆んなの口からは力強い労働歌が流れ出た。「町から、村から、工場から、働く者の叫びが聞える。」公園を散歩しているビール腹の社長さんも、紙屑を拾っている小父さんも、波に遊んでいるカモメ達も、聞いてくれ。そして、赤風は、この声を遠い古里の父母のところへ運んでおくれ。私達は明日から又元気一ぱい働くんだ。そして、苦しいことがあったら集ろう。いつでも力づけ合って生きて行くんだ。今度会う日を楽しみに、力強く手を握りしめて、それぞれの電車の中へ消えて行った。朝、早くから、又魚屋の前掛をさげる人も、カッポウ着を付けて働く可愛い女中さんも、皆んな、笑顔で働くんだ。そして私も、つまらぬ感情なんかみんな捨てて、意地悪い指導員にだって笑顔をもって、「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ、皆ンナニ負ケズ」やり通してみたい。

勇気付けられた胸を抱きしめて、夢中で冷い蒲団の中にもぐり込んだ。

働くことの喜びから

東京都　望月　博
（事務員　十五歳）

午前九時までに出勤、午後五時に退社し、学校へ行く。日曜の休みの他は、こうした慌しい毎日の生活が続く。貧弱な体も、ただ一生懸命なままに故障することもなく良く耐えている。今の生活で僕は考えることすら忘

れがちであるが、自分の仕事に愛着を持ち、働くことに喜びを感じている。それは、人生の喜びである、と思っている。

僕が神田の雑誌社S館にアルバイトに行ったのは昨年の夏休みだった。三月に卒業すると同時に再採用されていった。仕事は編集部の雑用だった。封筒に宛名を書く、お茶を入れる、走り使い、時には原稿を受け取りに行く、といった細かい仕事に追いまわされた。日給で月平均三千円前後を貰う。八時間勤務で、それ程の労働でもなかったが、最初の二、三週間はかなりの疲労を覚えた。

僕はこうして、わずかな収入ではあったが、自分で働き学費とし、家庭への援助としている。自分の生活が、経済的にも時間的にも、かなり貧しいものではあるが、決して不幸だとは思わなかった。ひたむきな生活意欲は、僕に一そう働くことと、学ぶことに努力を惜しませなかった。

最初の仕事は封筒の宛名書きだった。下手な字を気にしながら何枚も書いた。指にタコが出来、腕はしびれてきて、目はちかちかして痛い日が一週間ほど続いた。お茶一杯入れるにも大変な苦労をした。まっ黒く、見ただけでもにがそうな茶で、どなられては、おろおろし泣き出しそうな事もあった。家にいて母に注がれる茶を無頓着に飲んでいたことが、非常に悔まれ、日常の些細なことにも神経質になった。電話の応対にも一苦労だった。ひっきりなしのように掛ってくる電話にあわてて飛びつき、相手側の話し方に圧倒されるばかりで、要領を得ぬ内に切られてしまい、用をなさず怒られたりした。毎日雑用に追われて一日中、走りまわった。原稿を受け取りに行く外勤は楽しいものがあった。室内の空気から解放され、外気にあたった時の気持は、何とも言いようのないものであり、思わず飛び廻りたくなるような快さだった。日光に久しぶりに会ったような気もして、辺りがまぶしく感じられるように思った。著名な作家の家を訪れる喜びは、外勤の一番の魅力だったかもしれない。菓子などすすめながら、しきりと、種々の事を尋ねて話し相手になってくれる所もあった。

ある日、外勤から帰ってきてのことだった。係長に呼

ばれ、思いがけない事を聞かされて、目の前がまっ暗になった思いだった。「外勤中にパチンコ屋にいた僕を見た者がある。」と言うのだった。僕は身に覚えのないことを聞かされ、しばらくは唖然としたままだったが、はっと、自分にかえると一生懸命に否定した。係長は、そんな自分に冷やかな面持ちで「間違いならそれに越したことはないよ。しかし、今後そんなことを言われないようにするんだね。」そう言い残して出ていった。その日、一日は自分にとって重苦しいたまらないものだった。いろいろなことが気になり出して、二、三日は自分を苦しめた。

しかし、僕はもっともっと仕事に愛情を抱き、勉学に勤しむよう努力した。それが、いたずらに汚名を着せられるような未熟な自分を、少しでも進歩させるもの、と信じたからだった。社会生活の限りない疑惑、苦しみの多い中で若草のように伸びようとしている僕たち、僕はこの世の中で悲しみにたたかれても、苦しみにひるむことがあっても、それを克服して、真実に生きたいと念じている。

始めての報酬の二千五百二拾八円が手渡された。仏壇の灯明がともされ「無駄には使えないね。」と母は手を合わせた。目頭がじいんとするのを感じた。尊い努力による代償を得た感激だった。

学ぶために、いやそれよりも生きるために働らねばならない僕は、自分の仕事に愛情をもって、ひたむきに努力する自分に喜びを感じている。僕の前には血の出るような四年間の夜学生活がある。働らくことに喜びを感じたい。学ぶことに喜びを感じたい。

勤労の体験に働くことの喜びと、尊さを見出した僕は、夜、学ぶことへの意欲をも、いささかも鈍らすものでないことを信じている。

住込職人

東京都　匿名
（建具職見習）

「こら、お前そんな所で何をしてる」「……」「どうしてお前言われたように出来ないんだ。本当にお前、この先一体どうして行くつもりなんだ、バカ」……今日も又朝から始まったのである。何も知ない僕はもう汗だくだくになって必死である。

去年の春、新制中学を卒業して上京以来、今日は丁度一年目、来る日も来る日もこのように叱られどうしだ。このようにして一たい仕事が覚えられるんだろうか。「ちくしょう」人がまだ知らないと思って何言ってんだ、今にみろ、きっときっと見返してやるからと歯をくいしばり、このような毎日をがまんしている。

上京する時は、沢山の夢と希望を抱いていた僕にはこのような生活は考えてもみなかった事だ。ああつくづくいやになって来た。今更中学時代の事を思い出しても仕方がないが、学生時代の僕は、毎日毎日のんびりと自分のしたい事、思う事をそのままに通して過ごして来たのに、上京後の生活はこんなにも急変してしまおうとは……。夜は、フトンの中で泣いて泣いて泣きぬき、枕をぬらして寝るのです。

元来、僕の家は豊かな家ではなかったし、家族も多かったので、希望していた進学も、受験し合格迄したのに取りやめ、親のすすめるまま、今の建具屋に、職人にな

るべく長い年期に入ったのである。上京当時は、とてもちやほやされたが、それが一か月、半年、一年とだんだんと厳しさが加えられ、今は犬か猫でもあるかのようにこきつかわれ、意見は更に聞きいれられず、ただ親方の言うままに、されるままに働かされ、動かされて、まるでドレイそのものではないか。御飯にしろ、入浴にしろ、僕は家の人が全部終らないと出来ない。そして後始末は、全部僕一人でさせられるのだ。朝は早く起こされ、一人で家中の拭き掃除から仕事の準備迄し、夜は夜で、みんなが入浴がすみ、休んでしまってから、たいてい十一時十二時にすましてねるのだ。このような事で、いったい僕は何のために生きているんだろう。このような事でいったい僕の長い将来はどうなるのだ。

又ここでは、本を読んだり、勉強したりする事はまったくいやがり、一度進学を志したのだから夜間、あるいは、通信教育でもさしてもらいたいと思っても、職人には、勉強は必要がないと頭からおさえられ、外との交流も一切親方の手をへないと出来ないのだ。手紙すら書けない。書いたものは、みている前で大きな声で読み上げさせられて、もし、都合の悪い事が書いてあれば、取り上げ、又はみている前で焼かれてしまう。何事も絶対服従、たとえまちがいでも、「ハイ」と言っていなければならないのだ。このつらさ、僕の大好きな先生やお友達にすら、なかなかお便りも書けないんだ。本でも読もうとしようものなら、取り上げられたり、夜なら電気を消されてしまう。こんな事をしていてどうなるんだろう。いったい僕はどうすればいいんだ。すがる事の出来るものはただただこの書いている事にのみあるのだ、心のわだかまりを全部なくするために。しかし、今書いているこれも、電気を消された床の中で、側に寝ている兄弟子達に気付かれないように、ふとんをかぶって懐中電気をつけて書いているのだ。これが僕の最後の手段なのだ。毎夜、毎夜、ふとんは泣き床に変ってしまう。一体このような日がどの位続くんだろう。でも、こんな生活をしている中でも、いつも頭にひらめくのは、学校生活の中での先生のお言葉……。

ある晩夢の中で先生から「社会は決して自分の思うままに、又君の思うような世ではない。君の生活はまだま

だ上乗の方だ。こんな処でくずれるやつがあるか。自分よりもひどい人のある事をいつも心に念じて、苦しさをのり越えなさい。〝わかるな〟わかったら声の出なくなるまで、涙のなくなる迄泣きなさい。そして明日の朝からは勇気を出して励みなさい」と言いきかされ目が覚めました。その朝は、なにかすがすがしい気持がして、大きな力を得たような気がした。

その後、自分でもわからないが、気持がだんだんと変り、叱られても、前のように、はらだたしく感じなくなった。そして、年期職人としての在り方がわかって来たような気がする。そうだ、親方が、他の弟子以上に僕に厳しくするのは、僕がみこみがあるからなのかもしれない。卒業したばかりの僕を、一人前に育てようと思って一生懸命なんだ。きのう迄の僕の気持といい行動と言い恥ずかしいような気がする。

この頃は、叱られる度に、しっかりしろ、まだまだと、自分が自分に呼びかけるようになった。そして、東京に身よりのない僕は、何をする時でも、これが少しでも親方のためになるならと励めるようになった。今になって、始めて親方が自分を引く一本のつなであることをしみじみと知る事が出来るようになった。それにしても、こうなったのは先生の夢の中のお言葉があればこそだと感謝せずにはいられない。

母に感謝する心

神奈川県　匿　名

（カメラ店々員　十七歳）

五月は誰でも「実に素晴しい季節だなあ」と、思わず口走らずにはいられない。そんなに良く晴れた或る日の午後、母と二人で、同じ時間に、同じ室で、こうして向い合ったのは本当に幾日ぶりであろうか。外はまるで真夜中のように静かである。唯、柱時計だけが正確な音を立ててカチコチと気持よく鳴っている。他に何も聞えて来るものはない。かえって気味が悪い程である。自分は好きな本に目を通しながら〝幸福だ〟と思った。と、いつの間にか針仕事をしている母の手先を、頭を、順々に見つめながら色々と母について思うのであった。終戦直前にちょっとした病いがもとで、一家の大黒柱である父を失い、終戦を迎え、食料難にも、失業難にも、どんな苦しみにも打ち勝ち、今日迄食べる物も食べないで女の手一つで自分を育ててくられた母。その母が、今自分の前で針仕事をしている。髪の毛はもう半分以上も白く、顔はカボチャのようにしわだらけで、ちょっとの若さも見えない。自分は限りない感謝の気持で胸がいっぱいになって「お母さんどうも有難う」と心の中で叫びました。そんな母に、久しぶりで、お店の色々の出来事など話して上げた。丁度このお店に勤めるようになってから早や一年目になる。お店の内容も、お客を相手に商売をする態度も大分慣れて来た。伊勢佐木町通りのカメラ屋なの

で、毎日毎日変った出来事も起きる。そしてお客の中にも様々の人がいる。その多くの客の中には、自分と全然呼吸の合わない難かしい人もいる。と言うのは、つい先日のこと、写真の引伸をお客に依頼された。自分ではその通りやった積りだったが、その写真の出来が悪かったのか、気に入らぬことがあったのか、兎に角その場で破いてしまった。そして口の中でブツブツ言っている。それを近くで見ていた主人が慣れた口調で「何かお気にいらぬ事が。」などと丁寧に問うものだから「私はこう頼んだのだけど。」と怒っていたが、主人がなだめるようにあやまり、結局もう一度写真はやり直しで事がすんだが、もちろん客の前で主人に怒られた。そんな時ほど実に口惜しく哀しく思うことはない。「皆んな人を馬鹿にしている。もう品物も写真も買いに来るな、早く帰れ！」と言いたくなってしまった。「何故自分が悪いのだろう。お客の言われた通りをやった迄ではないか！それを勝手に怒鳴り散らして……。」

「日曜も祭日も休まないで毎日毎日お店に出ている僕を、なぜお客の前で怒るんだい。」と思わず口に出しそうになりました。自分は急に悲しくなって二階の休憩室で泣いてしまった。一日中そのことだけが頭にきてちっとも離れない。帰りの電車の中で前後の事も考えないで一層死んでしまった方がましかもしれない。そんな馬鹿げた考えすら起してしまった。でも家に帰って、夕食を待っていた母の前に坐ると、今迄の考えは何処かへ行ってしまった。

翌朝、お店に出ていると、主人は「普段の日の君と違う、どうした」と聞いた。自分は「写真の引伸の件の事で口惜しかったことが、今だに忘れられません。」と簡単に答えた。主人は「それはいけない、君の考え違いだ。人は誰でも優越感を持っている。自分の撮った写真は誰よりも上手だと思っている。その写真を君は焼き過ぎる程黒く焼いている。君のその失敗を責めた私は、決して怒っているのではない。唯、少々でも客の気持ちが解るように客の前で、しかるふりをしただけに過ぎない。一人の客を失う事は多くの客を失う事も同じだろう。君には不満もあろうが、商人という者はそうして立ち上るもんだよ。そんな事を繰り返している内に君の腕

が一歩ずつ一人前になって行くのだよ。」と、言われた。例えその言葉がお世辞にしろ実にうれしかった。その言葉を聞いて商人として本当に正しい知識を身に付けたような気がした。と同時に今迄の考えに間違いがあった事が解った。そんな日から、私はある望みを持つようになった。それは「一日も早く立派な商人になって自分のお店を持ち、少しでも母を楽にして上げたい。」と、こんな一度に欲ばった望みである。昔から石の上にも三年と言う諺がある。僕はその言葉を固く信じて三年間は真面目に一生懸命に働いて見よう。そして自分の望みに、少くとも近づけるように努力をし、頑張って見ようと新たな決心をした、と細かく母に話した。母は針仕事の手をちょっと休めながらこんな事を言った。「働きながら生きるという事は実に難かしいことだね。でも、お前はもうすっかり考えることは一人前だね。」

いやに〝ね〟を力強く言っては本当にうれしそうに笑いながら、又針仕事をつづけた。僕はなんだか母の口から〝一人前〟という言葉が出て来ると同時に、再び大きな声で、「お母さんどうも有難う」と叫ばずにはいられなかった。

日記

新潟県　医　名

（銀行員　十七歳）

四月十八日（昭和二十八年）

いつものように、眠むい目をこすりながら、朝飯の支

度をする。野菜を切るにもまないたが、すっかりくぼみ容易ではなかった。仕事をする度毎に、あんな物があったらなあ、こんな物があったらなあ、とほしい物ばかりである。

そんな時、父さえいたらもう少しどうにかなったのに……

こんな事、考えていた時、ラジオが「私達の言葉」を放送していた。その中の一つに父のない子の就職についてと言うのがあったが、それは、勉強をやりたい人が、経済的理由で進学できず、おまけに父のない事から就職も出来ないでいると言うような話であった。

聞き終った私は、怒りで目の前が暗くなる思いだった。それ程私は父のないと言う言葉が嫌いなのだ。何故なら私にも父がないからである。

父のない子をどうしてそうまで警戒しなければならないのだ。両親が健在で、しかも経済的に余裕もあるのに悪を働く人も多いではないか。父がなくとも、お金がなくとも、どんな苦しみにも耐えて立派に生きてゆく人もあるではないか。誰が父のない事を言んでいるだろう。それも多くは戦争で失ったのだ。そんな事皆んな忘れたかのようにそしらぬ顔で……。

いっそ、誰もいない山奥で生きたいなあとつくづく感じた。

四月三十日

月末。私―銀行員にとっては一番いやな日である。

朝から目のまわるようないそがしさである。仕事に追いまくられていると「時」の経つのも忘れてしまう。もう三時だ。正面玄関の扉が降りた。ほっとすると一緒に大きな溜息をする。やっと我に帰ったようにソロバンに手をやる。

その数字の莫大な事、とっさに読む事ができない程である。千円札の束に、羽根がはえたように出て行く窓口、あんな大金、どんな人がどんな時に必要とするのだろう。千円札にも驚いていた私には、見当も付かない。その金がどこをどう回ってくるのか知らないが、五時、六時ともなると集金に出た人達が、千円札の束を持って帰ってくるではないか。出た金の七割位は又入ってくると

の事で、今更ながら金の流通の早い事を知った。こんな事、感心しているうちに時計は早や八時を指している。それなのに私の仕事は増える一方である。いつ終るのだろう。

ふと、先生から教った労働基準法を思い出し、そこには確か十八歳未満の者には八時間以上の労働をさせてはならないとあったようだ。

それなのに誰も帰れとは言わず、仕事を手伝ってくれる様子もない。私は仕事が嫌いではない。それどころか面白味さえ覚えたのだった。なぜなら三度の飯より好きなソロバンをはじく事だったからでもある。

九時も回った頃、誰かが「ぼつぼつ帰ろうか」と言った。すると上役の一人が思い出したように私に言った。「なあ佐藤君も知って居るだろうが、おまえにはまだ夜勤させてはならない事になっているのだから、人に逢ったら遊んで来て遅くなったといえよ」すぐ返事する事ができず、ただ唖然としていた。

なぜ、うそを言わなければならないのだ。わからないわからない、大人の世界はどうしてこうもめん倒なんだろう。良いと思った事もできず、悪いと知っていても上の人が言う事ならしなければならないとは……。

三月十日（昭和三十年）

勤めるようになってから二年。

今では仕事の要領もだいたい覚え、毎日をとても楽しく過せるようになった。

学校を出たばかりの私。少しの事で腹を立てたりしていたあの時を思い出し、馬鹿だった自分がおかしくなって来る。

何も教科書を読む事だけが勉強ではない。一生涯が勉強ではないか。生きると言うそれ自身が勉強なのだ。わからない事はどこにもころがっている。それを知る事だけで私達の一生涯は終るだろう。いや知る事ができないで死ぬかもしれない。

こんな事も考えられるようになった私である。それに今頃はどんな苦しみも、悲しみも越える事ができるようになったのだ。

歌う事だ！　どんな苦しみも歌うと忘れる。淋しい時

でも元気がでる。
小学校の時、習ったっけ、「心に太陽を持て、口びるに歌を持て」と……。
これからも歌おう。そうすればどんな苦しみも一遍でとんでしまうだろう。いや自分で吹っ飛ばすんだ。

希望

富山県　碾波渡
（建具職見習　十七歳）

僕は今から二年前、建具の見習に、住みこみではいった。
初めての社会に希望をいだいて新しい門出を出発した。家を出る時、僕は、両親に「一生懸命に働き、りっぱな社会人になります」
といったが、あの時は少し、てれくさかった。そして今の建具という職業についた。職業につくと自分の思った事もできず、体は自由にならず、思っていたよりつらいものだということがわかった。
朝は五時三十分ごろに起き、先ず掃除をするが、やく一時間三十分ぐらいかかる。家にいた時は掃除もしなかった。僕が朝早くから起き、一時間三十分もやるので、初めはたいへんつらかった。
ここで一番心配になったのは、ねぼうする事だった。一日ねぼうすると、どうも僕みたいな小心の者は、気になって気になってならなかった。そこで僕は、一日で一

番大事な時は朝だ、朝ねぼうすると一日がむだになると思って、夜は早くねるように心がけた。そして、だいたい七時に朝食になる。朝食のあじは、又かくべつにおいしい。食事がすむと、まっていたように用足しが命ぜられる。

外に出ない時は、少しの時間もゆるさず仕事にかからなければならない。食後すぐに仕事をする時の胃は、なんとなく重い。

友達はみんな建具職を頭のよくない人のする仕事だといっているが、建具の仕事についた人でなければ、そのあじはわからない。事務員のようには頭をつかう事は少いが、そのかわり、頭と手が同一にならなければよい戸が作れない。仕事をしていて一番いやなのは、しっぱいした時だ。初めの半年はただ、しかられればよいと思っていたが、二年もたつと、しっぱいしたのは、ただしかられるという事より、どうしてしっぱいしたかと思うとはらがたってならない。しかし、しかられてしかられて、自分のわるい点をなおして人間をつくってくださるのだと思うと、しかられるのは、なんとなく自分のとくになるような気がする。僕の所は、十時と十二時、三時と各二十分ずつの一ぷくがある。しかし、僕らみたいな小僧には一ぷくもろくにできない。午前の十一時から十二時までは僕にとって一番長いような気がする。もうはらがへって目がくるくるまわっているようだ。そして大和の昼のサイレンが鳴ると同時に昼食になる。この大和のサイレンまでが、なにかしら喜こばしてくれるようだ。そのせいか、今ではあの音楽サイレンのふしだけはみんなおぼえた。そして食物がのどをすべるようにとおる。食事をしたあとあじのよさと、はらがしっかりした時は大変こころよい気持だ。と思っていると「渡」――と親方の声がする。相かわらず使い走りである。

もう少しなぜ休ませてくれないのかと心の中で思うが、これも苦労の初めだと（耳の虫）にきかされて歯をくいしばって、がんばる。

この「耳の虫」というのは、僕がこまっている時とか、くだらない遊びをしている時とか、ゆだんする時に心にいいきかしてくれる虫で、よい虫かどんな虫かしらないが、どうもいるような気がしてならない。この「耳

の虫」というのは僕がつけた名前で、なにかしら、こまっている時にたすけてくれるのだ。

そして今のように、休みたく、くやしい時は「がんばれ、がんばれ、これも苦労の一つだ」というような気がする。やがて、三時になる。僕は一ふくの二十分だけでもと思って、野球放送をききたいと思ってダイヤルを廻そうとすると、「こら」とことばもきたなく、大きな声でどなられる。「野球なんか聞かない方がよい。ただ仕事を一生懸命にやれ」と、「耳の虫」がいう。なんということをいうばかな虫だと、いったんは思うが、いつもよい「耳の虫」だと思っているせいか、しばらくしてそのとおりになる。そして仕事が六時に終る。仕事がすんだら、あと掃除のカンナくずの粉で頭も服も真白になる。だいたい六時四十分ぐらいで一日の仕事がみんな終る。しかし使いがある時もある。そして七時ごろには、夜食になる。三食で一番うまいおかずがあるのがこの夜食だ。腹がへっているせいと、うまいおかずなので、三ぜんのごはんがもう一ぜんもたべたいところだが、そうはいかない。食事がすみ自由時間になると時間のゆるすかぎり思った事ができる。

しかし、あまりおそくなると、明日の仕事につかへてくるので、おそくまでは起きておれない。初めの半年はただ新聞だけを見て、ねたので、八時半にはいつもねていた。しかしながら半年一年とたつと、学校時代がなつかしくなり、勉強したくて勉強したくてならなかった。今考えると、なぜ中学の時もう少し勉強をしなかったのかと、くやしくてならない。しかし今からでもできない事はないと思うと、熱がわきたって来た。

しかし、今からの勉強は苦学だ。けっしておもしろおかしいではできぬと決心した。そうして東京文化高等学園通信教育に入学した。すきでやった勉強だ。苦しくてもがんばりぬくぞと「耳の虫」と約束した。勉強をやり始めると、初めて勉強のおもしろさがわかって来た。

僕みたいに中学の時あまりすきでなかった勉強の味が、こんな苦しい時になって、初めてわかった。僕はほんとうにうれしく、遠くにある倖せが、なにかしらつかめるような気がして、むねがいっぱいになった。

土方の詩

石川県　西口嘉昌
（土工　十七歳）

「それだけ家の事を思って行くといってくれるなら……」慣れない針仕事に手を休める暇もなくこうつぶやく父を見て、これまでにおぼえた事のない気持でいっぱいになった。

――父は苦労したな――つくづくこう思う。

「よし！　働きに出よう、そして少しでも父を楽にしてあげよう」こう決心して懐しい学校とも職場とも別れをつげた。私の新しい道はこうして決った。

四時半頃にはもう明るくなる。この頃では、私達の職場は七時に仕事始めとなる。まだ梅雨まで余程日数もあろうというのに、ここ二、三日はいやにしぶつく。金が無くって出て来た自分には、高価なカッパ（合羽）は安々と買えず、親類から借りたみのを着て仕事に出た。初めの間はまだいいが時間がたつにつれて雨気を吸って重くなる。手慣れぬスコップを唯握るだけでも苦労するのに、全くこんな時は泣きたくなる。汗と一緒にこんな詩が流れ出た。

「土方」

一、俺達の資本は
二本の腕とスコップ一ちょだ
俺もこの仲間に昨日から加わった
随分ひどい仕事だ

初めからひどいと思っていたのに
やってみると又別の苦しさがある
使い慣れぬスコップを握った
二日目の今日
とうとう手に「まめ」が出来た
そいつがトロッコの線を持ったひようしに破れて皮
がとれ
赤い肉が顔を出した
痛いんだよそいつが
とってもしょんで痛いんだよ
これ程の事は時期が経てば直るが……
二、俺達人間には
どうにもならない事だよ
『雨』ってやつだよ
こんな言葉を何処かで聞いた
『土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降ればい
い』
全くその通りだ
雨が降ったら俺達の仕事は上ったりだ

だから土方の資本には
天気を加えていいだろう
何百年後になるか知らぬが
原子時代の今日
雨雲をどこかへ持って行く
我々土方は願う
早くこんな時代の来る事を
その頃になって
初めて
土方の資本は
二本の腕とスコップ一ちょ

初めての仕事だけに要領を覚える事が第一だ。これには先ず道具の名を覚えようと、わずかの数ではあったが少しでも早くと、メモに書き記して覚えた。バリ、イノクギ、ジンクロなどと一通り覚えた頃は手のまめも固まった。どうやら人並みの手になった。

皆良い人達ばかりだ。顔は日焼けして黒いが、とってもやさしい心の持主の多いのに感謝したい。「どうやデンソ（私の家屋）だいぶ慣れたか？　慣れるまで無理し

ては駄目やぞ」などとよく見守ってくれた。疲れている時など「わえ（君）は線路をはずせ」と楽な仕事へまわしてくれた。

今では仕事にもどうやら慣れた。今度はうんと働いて、皆に今までの御恩返しだ。

トロッコめがけて投げ入れるスコップに落日が映えてきらりと光を放った。

今日の海はとても美しい。

青空のように

福井県　友田和昭
（公務員　十六歳）

平凡なことかも知れない。しかし青空はいつ見ても僕の心を打つ。そしていつ見ても何かの強い力で僕に言い聞かせる。又いつ見ても沢山の夢や反省を頭一杯甦らせる。……

「人の裏表」という言葉は、僕らが小さい時から現在に至るまで常々耳にし体験している言葉である。これから将来もこの言葉をなくしていくために、色々の角度から、僕らは教育され又努力して行かなければならないことであろう。しかしこの傍でこれと全く反対のことが僕らを教育し訓練しているのである。それはやがては社会の滅亡を招くものだということを人々は知ってか、それとも知らないでか——。小学校・中学校で学んで来た全てのことが、今僕の頭に矛盾という形に変り、浮んで来る。僕が中学校を卒業する時にも、先生から「どんなにつら

く悪しい事があっても裏表のある行動をする人にだけはならないようにしてくれ。」と忠告されたのが、今も強く心を打ち続けている。

僕の仕事場は官聴という、普通の人から言えば、生意気な人ばかりの集りであり、又一面堅い人ばかりの集りであると考えられている職場である。しかし僕も初めてこんな風な職場に入り成程と思う点も多数あったが、逆にそれとは反対の場面をも見てしまった。役人という昔からのしきたり通りのやり方で、今も続け、そして唯上役にのみサービスするのが自分の仕事であるという風になってしまっている人が以外にも多いことである。憲法にも公務員は一部の人の奉仕者ではなく社会全体の人への奉仕に盡さねばならないと言われている。ところがこれらの人は、常に自分の利益を考えて仕事をし、奉仕しているのだとつくづく考えさせられた。だからと言って、上役の命令や指示には全然従わなくとも良いなどというのではないが、自分の考えさえ述べずに、上役に服従しなければならないことはないはずだ。いやたしかにそう言う人が多いのである。しかし今の職場で果して堂々と意見を述べるような近代的な人（本当は当然だ）が幾人いるのだろうか、と毎日の職場の人の行動を見て僕は思っている。そして、上役のいない時にはその人の悪口を言ったり、あんなふうにすると良いとか悪いとか批判したりして、意見が沢山に出てくるのである。これらの人は、どちらかというと若い人よりも年配の人に多いことは確かである。だから結局若い人達も、初めはそんな気持ではなしに仕事に精出しているのかも知れない。でも、そのような人達の雰囲気に次第次第に感化されて行ってしまうのであると思う。若い人達がこんな心がけではいけないのは当然である。が、しかし本当に強い意志で職場に臨んでいても、現実には、思うようにうまく行かないものだとつくづく教えられた。だからこそ一層、陰での態度が悪くなるのだと思う。

先日も衆議院議員、知事、県市町村会議員の選挙があったが、その中で数多くの選挙違反が警察であげられていることは、僕らにとって実に残念でたまらない。何故にこのような事を犯してまでも当選したいのか、又堂々と戦えないのか、選挙権を持つ多くの有権者は何故正し

い投票ができないのだろうか。あのように公明選挙々々々と叫んでいるのに。そして当選となると先程も蘇がれたように、汚職議員の出現が明らかにされている。表面では道路を良くするとか、橋をかけるとか、学校を建てるとか経済を安定させるとか言いながらも、実際はそれらを実行しないどころか、それらのことよりも更に、悪い方面に手を伸しているのではあるまいか。そのようなことは、勿論国会議員のみならず県市町村の役人連中にも何をしているか、わからないような人が、何人かいるのだと思う。そう言われても仕方のない行動が小さい事にまで、いくらも現れているのだから仕様がないだろう。その日の生活にも苦るしみ、毎日毎日働きまくっている人が多数あるのに、片方では、そんなお金がどこから出るのか、料理屋で飲食し、高級車を乗り廻している会社の重役や、役人連中がいるのは、どういうことなのだろうか。

僕は、昼は仕事場で、社会人として働いているが、夜は、高等学校の学生である。人に裏表があるということは、一番楽しいはずの学校に於いてまでも僕達につきまとうのである。だから僕達は学校生活を送っていると言っても、実際はそんな感じは全然なく、唯机に向って先生の講義を聞きに来るだけのようなものである。だから中学校の時のような真の友達関係もなく、学校生活の楽しみもないわけである。僕らが、教室で友達と語り合う時間が少いという事もあるかも知れない。しかし、殺風景な夜学生の互の心には、人を真に信用することが、普通の学生と比べて少なく、何んだか人に自分の心を見られぬようにするという考えが働いているような気がする。それは学校で教えられる、色々の点と、今自分が見ている社会や、その中に動いている人間との考えが、あまりにもくい違っているからだと信じる。

裏表のある人間即ちこれは裏表のある社会を作ることだと思う。だから僕はいつも思うのだが、美しい青空を眺める度に、僕もあんな心の人になりたいと思い、今の自分の不純な物の考え方が、又見方が、情なくなってしまうことがある。

生きる日の喜びを求めて

山梨県　望月民江
（農業　十七歳）

河川の水も細くなるにつれて、山々が近くなり素朴な山村に入る。小室山と益母富士で名高い土地が私の生れ働いている静かな村です。

私は二年前に中学校を卒業しました。その当時は勿論高校に進学したい心はありました。進学する人々と共に課外授業もやったが、これは私が進学したいためではなく、勉強はできるだけやっておけば得だと考えての事で、初めから進学は諦めていました。私に進学させようなどと考えさせない条件が、あまりにもそろっていたのです。先生も度々家まで足をはこばれて、母と相談したようですが、私には一度進学の意志があるかと聞いただけで、その後進学の事は一度も話しませんでした。だから私は農業を手伝うことが唯一の道だと思い、その中でも勉強はできるのだと一人励ましていました。

わずかながら、養蚕を主として生計を立てている私の村では、麦刈を目前にその多忙は一通りではありません。「ほら、桑くれだぞ」と第一声がかかるのは、まだほの暗い四時頃です。どの桁にも、一枚の青い葉も見当らない。唯真白い蚕の背だけが、桑を求めてうようよ蠢めいている。家人はそれぞれ眠い目をこすりながら、黙って桑をくれ始めます。後から後から桑を運んで来る。「まだいるのか」兄は不服そうに貯桑場でどなる。こうし

て全部給桑が終ると五時半過ぎ。こうしてやっと食事の膳につくのです。朝食が終ると、すぐ桑採りだ。背負子を肩に桑畑へと急ぐ。採って来た桑は昼に与える。午後は夜と朝の分を採らなくてはならない。暑い日中とは言えども、少しも休んではおられない。又雨の中でも採らねばならない。「今少しの辛抱だ。もう直ぐ汗の結晶が見られるのだ」そう思うと、自然に力が湧いてくるのです。太陽も何時しか西へ傾きかけると、夕風が日焼した頬をなでて通り過ぎる。入日に彩られた空の彼方を急ぐらへ急ぐ鳥の姿が去った後も（私達の仕事はこれからだ）と鼻唄に合わせて桑採りの手を早める。「もうそろそろ終ろうか。でも明日雨が降ったらどうなるか——大丈夫こんなに夕日が美しいから。——でもまだ何だか不安な気がしてならない。矢張り今少し取って置こう。」

こうして明日の天気を気にしながら、手許の見えなくなる迄働くのです。

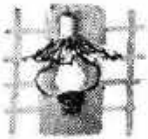
月明りにてらされた畑道を、一日の仕事をおえて帰る私の心は暗かった。ただ働くだけが人間に与えられた能力であり、これが農民の最上の美徳であると年寄達は考えているかもしれません。封建時代そのままに受けついで来たこの生活の、どこに「考える葦」としての生活がありますか。どこに人間らしい楽しみがありますか。いくら貧しく、暇がなく、昼の労働で疲れ切っているからといっても、本も読まずに寝てしまう生活に甘んじていることができるでしょうか。このままで成長していったら私という人間は、どんな人間になることでしょう。友達は学校に通っている。それに比べて私は何する事なし仕事に明け暮れしている。たまらない気持がするが、今の私にはどうすることもできない。本当に零細農家で働いている私達には何んの楽しみも、教養のための勉強もできないのです。むらむらとおこる学びたい欲望に、運命をのろい悲しみなげき、そして一さいをあきらめてしまおうと思ったことが幾度もありました。「えい！くそ、ばかまじめにやったってなんになるか、要領よくやるんだ」そう思ってなにか気の抜けた生活が何か月か続きました。「こんなことではいけない」心の奥で良心がつぶやいていた矢先、幸い町の青年学級が開設されました。現在七十人の学級員が通い、一日の労働に疲れた身

を、知識欲にうえた目で一心に講師の顔をみつめる。この時の幸福感というものは、働いた者にこそ与えられるものであると思います。

暗い希望のない孤独な生活から、明るい学級員と接するうちに、私は今迄の自分の生活を振返って見るようになりました。ただまじめに生きようとしていた私は、まじめさ、正直さと共に、それに劣らぬ知性のあるたしかな考え方、科学的な見方がなければ、本当に私達の望む生活はありえないことを知りました。もう一年前のような暗い気持は、今の私にはありません。苦しい生活をしているが、それも目的のない苦しみではないようです。忙しいけれど充実した日々を送ることによって、以前もっていた学校へ行けない劣等感も、いつの間にかなくなってしまいました。この頃はむしろ、人生は働きながら学ぶことこそ、正しく生きるための勉強の道だと思っています。

機職一年

山梨県　舟久保とし子
（機織工　十七歳）



ズシン、ガチャガチャと伝わって来る機音に私はふと目をさました。「今寝たばかりだと思ったのに、何処の家ずらかい」と一人ぶつぶつ言いながら、柱時計を見ると四時が鳴ったばかりなのだ。「こんなに早くから一体どこではたを織っているのかなあ？」と思いながら、もう一度耳をすますと、機音は一台だけでなく、右からも

左からも遠く近く重なり合い、午前四時の静けさを破り山峡にほしいままに響き、雑音の舞台となった。隣室から「へえ起ろよ、他家じゃあみんな織っているじゃあねえか。」という父の叱鳴り声と同時に姉がむくりと起上った。続いて次の姉もまったくねむたそうな目をこすりながら、姉の後に従って行く後姿を見送りつつ、何とも言えぬ寂しさに襲われた。家中の者が昼夜ロボットのように一時の休みもなく織った製品も、手形の長期化や不渡手形の増加がその深刻さを極めて来て、少しも売れぬのだ。そのために倒産、借金、給料逆配などがいちじるしく、中小企業は今最悪の事態に直面しているらしい。

機業の町に住んでいる人達は生れながらにして悲しい運命を背負っているのではないかと思う。大部分の人達が中学を卒業すると、好き嫌いなく、家内工業である機屋に織工として釘づけにされてしまうのだ。中学を卒業できる人はまだ良い方として、家の近所には中流以上の生活を営みながら学校など長欠して成年同様のはた織をさせられている友達もいる。だから私がこの上、高等学校進学を願ってもきまって「はた屋の娘が学校などに行って何の役に立つのだ。学問で食って行くのとは違うぞ。みろ羽田さんの娘なんか、小学校で卒えて、へえ二台平気で織るちゅうぞ。われ（お前）なんか理想ばかり高くてどうしょうもねえ。」と言われ、それに対して私の意見を言おうとしても、てんで相手にしてくれぬばかりか、何をしても私だけが注意されるのだ。

「どうして私ばかりが叱られるずらか。」そして、たとえ当然の事だと思う事さえ、理想という一言で、頭から圧えられ否定されてしまっても、じっと我慢しなければならない慣習の中で、毎日悩ましい日は続いた。そして色々な事を考え悩むにつけ、今の機業への不満がムラムラと起きて来るのだ。今、私達の町では景気が悪い悪いと言いながら、朝から晩まで、無茶苦茶に機を織っている。このままで行ったら生産過剰のため機業の町の経済は一層苦しくなって行くのは当然すぎる理窟ではないか。それよりも市民全部が、心を一つにして労働基準法に従い、時間を定め、製品の調節を計ったり、より良い消費者の要求に応じた製品を作るのに必要な機械や方法を、機業に従事している人が自ら進んで研究しなければ

ならないはずだ。

こんな事を考えると大人の人々が必要を認めてくれない教育や学問は、この町、この職業にこそ必要ではないだろうか。また、ここで良く考えて見れば、今の大人の人々は生れながらにして、教育より、人間完成より、唯無暗に働く事のみを重んずる。これはこの町の生活の中に長年育成されてきたのだから、今急にそういう考えは捨てて下さいと言っても、少し無理かもしれない。だから、卒業当時、私ばかりが叱られたと思ったが、それも親の立場としては当然の態度だったかもしれない。

織工として一年経った今、卒業間もなかった頃の私を反省すると、余りにも興奮していたのだ。毎日親のもとで、何の苦もなく、家内工業であるはた屋に、家族の者と同じ仕事に従事し、家の都合によっては、みんなで楽しい海水浴や、温泉、遠足等にも行き、一日の苦しい織工としての仕事を終え、食事の後、皆で明日の仕事について話し合ったり、又、四辺木格子に囲まれた工場から冷えきって勝手にくれば、どんどんもえるいろりをかこんで、手作りの大根や人参、馬鈴薯のごった煮を分け合って喰う時は、やっぱり家内工業の長所を知る。だから今は、親達にあまりさからわず、三十年若い世代の文明の時代に生れ育てられてきた私達こそ、誰よりも先だって、この小さな企業絹糸織物の町の根強い封建性を、ぶちこわさなければならないだろう。昔主義の慣習に悩まされた私達は過去においての因習を反省しつつ、未来を空想し、現実にぶつかって行く事をいつも頭におき、みんなの幸福をみんなで楽しく考える家庭や町、又、世界にほこる富士吉田市絹糸機業の町を、私達若人が団結して、手をかたくにぎりしめながら、建設の道を前進せねばならないのだ。

農民として

長野県　小林登美江
（農業　十六歳）

「なあ、父ちゃん、姉ちゃんをば学校続けさせてくんねかい。俺あうんと働くから、学校も休んで働くから。」涙声で父に頼んでいる妹の声が今も耳の奥底深くから聞こえてくるようだ。あの日から速くも四か月たち、もう五月も過ぎ去った。と言うことは、退学後農業に従事するようになってから四か月の月日が去った事を意味する。そして今は奥信濃の山村に住む一介の農民である。

喜夏を思わせる燃える太陽は、今日も私の手と言わず足と言わず無遠慮に照りつける。そのうだるような暑さの中を、ずるい役牛を引きずりながら、石の多い坂道を登ってくる父の大きな背中が見える。

家から丁度二時間も登った山林から、薪を運ぶのである。牛車が通れる道迄は可成りの長い細い道がくねくねと続いている。その道を重いしょいこで背負いながら運び出す。始めのうちは慣れないので終始ふらふらと危くころびそうになる。後から二ツ年下の妹がフウフウと荒い呼吸をしながら薪を背負って来る。「重てえから休んで来いよ。」と大声で叫ぶ私の頬には汗の上に幾筋もの涙が流れた。どんなに苦労しても妹だけには苦労させたくない、きっと進学させよう。何時か私の地下足袋の中も泥と汗とで丁度熱泥地のようにぬるぬるしている。昨年は学校迄も休んで働いたのである。働こう働こう、力

の限り妹のために、そして一家のために。

しかし、このように勤労に精魂を傾ける以前は妙に感傷的な気持が全身をみなぎっていた。制服を着替えて野良着になった時には流石に悲しかった。でもそうするより仕方がなかったのである。病弱な母、年老いた祖母、働き手は父一人だった。朝は、朝露を身に浴びて田畑に出、夕方は月が背を照らす。田畑は荒れて、草の中からは優美な虫の音が聞えてくる程だ。或る朝、昨日の疲労ですっかり寝すごしてしまった私は、朝食の御飯の臭い味噌汁の臭いが食欲をそそった。それと同時に寝すごして仕舞った後悔の念で一杯だった。あわてて飛び起きた私の眼に写ったのは、衰弱した身体に鍬をかついで帰って来る母の姿である。腰から下は朝露にぬれて、しずくが白い土を黒く化して行く。貧しい私の家では母に栄養価の高いものを与えるだけで精一杯である。だから私の食事など考えも及ばぬことである。ところが或る日学校へ行って弁当を開けてみると、少量ではあるが、栄養価の高いものが並べられているのをみて、思わず驚きの声を上げた。母は粗末な私の弁当をみて、せめて恥をかかせないようにと、自分の食べ物を倹約して迄も私の弁当を作ってくれたのである。衰弱しきった身体を朝露にぬらしながら働く母、自分の食べ物を倹約して迄も私に栄養価の高いものを食べさせようと努力している母のことを思うと、どうして学校へなど通われよう。家の者を不幸にして迄も、我一人幸福の青い鳥を得ようとするそのような冷酷な行為は良心が許さなかった。「働こう、働こう。自分一人が私欲を抑制しさえすれば、皆の幸福は得られるのだ。」そう決心すると、私はあれ程好きだった学校生活も断腸の思いで断った。親しかった友達も今は手のとどかない高い所へ行ってしまったような気がした。学問が何だ！　学問が何だ！　生活の成り立たない所に学問の樹立は望めはしない。私に与えられたものは唯「働くこと」という一言に他ならない。道場にあった小さな生命は勇躍して働くことに精魂を傾けた。それからは毎日野良に出て働いた。あれ程好きだった勉強も、まるで別世界のように思えてきた。働き続けた私の肌は赤銅色に化し、目だけが異様に光っていた。

しかし退学後三か月経って、社会にあり余る矛盾が私

の前に積み重なれば重なる程、それを追究しようと思う気持が起って来た。知らないことも多いし、特に専門的なことになると何一つ理解出来なかった。そうこうしている内に、勉強に未練の残っている自分をはっきりと知るようになった。と同時に過去を後悔する気持が猛然と起って来た。「勉強しよう、やり直そう。土台がなければ駄目だ。学問のための勉強では無い、自己完成のために……」

山村に住む者には、定時制へ通うことなど勿論不可能である。それ以来、通信教育を受ける固い決心を胸に秘めて励んでいる私であるが、一日働き続けて机に向かい、睡魔と戦いながら勉強に精進しようとすることは並大抵のことではない。しかし私は力の限り頑張ろう。

豁然と迸び出された薪を見た時の感激は、汗を流して働いた者のみに与えられた喜びであろう。何時も自然の肌に接している私にとって、自然の変化でさえ驚異に感じられる。水々しい若葉が日々青さを増し、紅葉の色を増して行くのも趣きの深いものである。この美しさ、この楽しさは百姓が最も良く知り味わっていることであろう。瞳を坐下に向けると、一寸法師のように小さな人、人家、田畑、青い水を一杯にたたえ流れて行く千曲川、何時迄も眺望に興じていたい程だ。

一般に百姓などは無知な人の集りと世間の人は軽蔑している。しかし只黙々と働き続けるように見られがちな仕事も、研究すべき課題は無限にある。私が望むことは、百姓にも教育の施設が出来る事だ。そして誰も彼もが教育の重要性を理解するようになって欲しい。独学生、つまり通信教育生に対しても、軽蔑の眼で「二千円や三千円で高校の勉強が出来るものか」などということのないよう教育の重要性を理解することによって、農村の因習やねたみから解放されるであろう。そして教育費全額国家負担が実行されるよう願わずにはいられない。日本の貧しい向学心に燃える人達のために。

私はどんな苦難にあっても性格だけは竹のように伸びたい。決して卑屈になりたくない。竹のように忍耐強く、少しの曲線もなく大空を目標に進みたいものだ。

土の臭いがプンとしてくる。明日も又力一杯頑張ろう。

自分の力で

岐阜県　小島由美子
（事務員　十五歳）

「いってくるよ。」といって、用水に沿って黄いろくなった麦を見つめながら私は職場である小さな織物組合に向う。その織物組合というのは、私が幼い頃、名古屋からよく遊びに来て「もう少しだよ、あの赤い屋根までね。」といつも目標としてきた所だ。そんな時、今自分がこんな所で働くなどとは夢にも思わなかったが、これも太平洋戦争のためだろう。

この戦で両親を失った私は、祖母といなかでくらし、ようやく中学を卒業して、この就職難に自分の希望の職である事務員に就職出来てうれしくってたまらなかった。

けれど中学の時先生から「社会というものは、家庭や学校生活のようになまやさしいものではなく、思いもつかぬようなこともある。それを辛抱しなければいけない。」とよくいわれていたので、不安な気持でいた。

校長先生のピアノ伴奏で「あおげば尊し」を力いっぱい歌って、なつかしい母校や先生をあとに校門を出た。

いよいよ社会へ踏み出した。どんなだろうと胸ふるわせて出勤した。

とても質素な所で「人の生活は世の中への奉仕、職業は奉仕の手段である」「先生や師匠に素直であるほど進歩向上ははやい」の生活目標と、他にポスターが掲げてあるだけで、花一輪もない。けれどとても好感が持て、

希望も持てた。そして、自分の力で明るくしようと、さっそく花も飾ったし、書棚もきちんと整理した。なんだか急におとなへの仲間入りをしたような感じである。

私の最初の仕事は名簿作りだった。中学の時とは全くちがう。つづけ文字やわからない字がたくさんある。まちがった字を書くより、よくきいて正しい文字をかかねばいけないと勇気をふるって聞くと「よしきた」と丁寧に教えて下さる。

自分の仕事を終って次の仕事を請求すると、「そう一生懸命すると肩がこるよ、少し休みなさい。」といわれる。でも何か仕事をしていないと、かたくなってしまう。

そんな日からもう二か月もたった。今では仕事も少しずつわかりはじめ、一日一日もより楽しくなった。そして今では昼休みを待ちながら一生懸命仕事をする。その昼休みは、町役場の方と老若男女みんな集って、バレーボールをするのだ。そのバレーボールが、とっても楽しく元気一ぱい遊ぶ。四十分の休みはそのためすぐすんでしまう。

こんな幸福な自分を思う時、よく思い出す。

二、三日降りつづいた雨があがり、朝とても早く買いものに出た。雨降りの後なので人々は大勢往来していた。するとむこうからやはり今春卒業したのだろうか、まだ何となく学校の匂のあるような男の子が、重そうに箱をたくさん積んで自転車で走って来て、店の前で止った。と同時に手がすべったのだろうか、自転車は、ひっくりかえってしまった。私は、「はっ！」として立ちどまった。中の菓子はどろんこである。

その時、男の子は、失敗とはずかしさで顔をまっ赤にして側をくいしばって、自転車を起し、汚れた菓子を拾い始めた。私も何とかしてあげねばと、とまどいするばかりだった。

男の子の気持ちはどんなにつらかったろう。まだ就職して間もないのに失敗して、主人からは「そんなことでどうする。」ときつく叱られるかもしれない。こんな早くから重い荷を積んで自転車で走って、夜になれば疲れきってしまうだろう。私は、この出来事に出合って以来胸にやきつき、自分が失敗したり、疲れたりすると「今

頃はどうだろう。」などと思い出す。そして、自分の今の幸福をにがさず一生懸命勉強して、仕事と勉強と一石二鳥の効果を上げ自分の力で、楽しい職場、いや楽しい社会を築こうと私の胸はふくらんでいる。

働きつつ学ぶ

静岡県　大沢範枝
（学校購買部販売員　十七歳）

「もしもし、それから時間は十二時までにお願いしたいのですが……はい……はい。ではお願い致します」パンの注文の電話を切ってから、ノート、鉛筆、画洋紙の並んだ狭い販売の所にもどって来て、ほっとした。九時五分――。後二十分で中学の一時間目が終る。早くパンのお金の整理をしなくては――。

一年前のことを思うと、働きながら定時制に学ぶ生活が、ひとりはおえましくなる。

昨年の四月五日の、A高校入学式の朝、進学したい気持と、家の事を考えてあきらめる気持とは、私の内に対立していた。しかし、中学三年二月末の高校入学試験は、そうした対立の内にも、先生のおかげと、一方ではどうにでもなれという気持で、受けてしまった。

自分の力を知るためには、受かればいいと思い、どうせ行けないのだもの、落ちればいいとも思った合格発表。同級生のほとんどが、進学の喜び、あるいは、職の決まった喜びの中に卒業式を迎えているのに、私は進学でもなく、就職でもない。私は自分があわれであり、腹

立たしかった。積極的に自分の境地を拓いて行こうとしない自分が。家の中は、その日の食べることに追いつめられているだけでも暗い空気なのに、更に冷いものが流れて行った。そうした中にあって、私は家人や親類の人の声を聞きながらも、A高校の門をくぐってしまった。一見、平穏な生活が、四月、五月、六月……と過ぎた。しかし、経済的にあまりに、切迫した家の中だった。一学期の終り、とうとうA高校を退学した。私自身、自分の気持をどうすることも出来ずに八月の休みに入った。その時、中学のY先生が、中学の購買部に来てはと相談して下さり、私は求めるようにしてそれに頼った。そして、九月、Y先生のおかげで職につき、定時制の門を叩いたのだった。

人なかに出るのがきらいな私、そして、相手のちょっとした言葉に気を病ませる私には、やさしい仕事も、精神的にはずいぶんと疲れを感じた。職場の中学とA高校とは、ほとんど同地に建っていた。自然、同級生と会うことも多かった。ささやく声が私の事を言っているように感じられ、逃げるようにしてその場を去るのが常だった。しかし、それも、一日の仕事が終って、若々しい集いの中に自分を運び、明るい螢光灯の下で忘れることが出来た。そこには働く友だちばかりがいた。

定時制に通う私には便宜なように注意のはらわれた職場である。うれしい事だと思う。しかし、私は一抹の物足りない淋しさを覚える。

今もパンのお金を整理しながら、働きつつ学ぶ自分から一年前のことを思い返し、現実にもどるとそれを感じるのだ。それは何だろうか——それは仕事を義務としているためだと思う。自分から欲してその仕事に熱中して行く姿には縁遠い自分であった。ただ、与えられたものを、なるべく与えられた通りにしようとするだけなのだ。

自分の個性にあった職について、力の限りがんばるのは働く者にとって、唯一最大の望みであると思う。私も強くそれを感じる。しかし、多くの人達が働きたくとも職のない現実を考えてみる時に、個性に合う職業などとは言っていられない。私も今の職がなければ定時制にも行けず、すぐに困るのは解りきったことである。

働く以上は楽しく働きたい。ではどうすれば良いだろうか。今の私には解らない社会の問題のように思う。ただ解ることは、たとえどのような職であろうとも、その職業の社会における重要性を知り、誇りを感じ、自ら楽しみをつくることであろう。今の私の仕事は実に中学校にとっては、なくてはならない存在なのである。殊に商店街からずっと離れた高台にあるこの学校の購買部は、一日でも休んだら、生徒たちがたちまち困ってしまう。無邪気な子供たちのべそをかいたような顔が、いくつも、私の頭に浮かんでくるではないか。私が仕事にはげむ時、そのよろこびがすぐに自分にはねかえってくることを、私は知ってもいる。

学習の中に生活を結びつけて強く生きようとする若人は、今夜も明るい螢光灯の下に集い、深い理解をよせあうであろう。そうだ、友よ、がんばろう。たとえ微々たるものでも、一日一日と努力をつんで明るい人間になろうではないか。善と悪を見分けるだけでも良いではないか。苦しい時には苦しいと、解らない時には解らないと、美しいものは美しいと言える人間になろう。そしてお互に助け合える人間、平和を愛する人間になろう。

ゆがみのない社会をつくる前に、ゆがみのない自分達になろう。

僕は手打うどん屋の小僧

愛知県　匿名
（うどん製造見習　十五歳）

僕はいま中学三年生だ。東港中学校の夜間に通っている。

僕の家は県営住宅である。家賃も出せないくらい貧乏である。父は鋳物工。父の仕事は忙しい時はすごく忙しいが、今は全然だめである。家賃の払えない訳も一つにはそこにある。父は家に帰ると、いつも口ぐせのように「仕事がない。仕事がない。」と言っている。そして父のその話の終りは「早く戦争が起きればよいのに。」ということになるのであるが、僕はその度に父の考えがわからなくなる。たしかに父の仕事は戦争が起れば忙しくなるだろうが、僕の家を焼いたのも戦争であるし、僕達を貧乏にしたのも又戦争にちがいない。とすると、戦争して父の仕事が忙しくなっても、後に又不幸が控えているのではないかと思うのである。

ともかく僕の家は貧乏だ。だが父は怠け者ではない。鋳物工としての父は職の内容もくわしいし、仕事もうまいように思う。しかし収入が少いのだから困ったものだ。以前、家で二、三回商売をしたこともあるが、その当時の父は人使いもうまく、よく働いた。しかし、その商売の経験も皆失敗に終った。父はこの原因を、父の酒好きと短気のせいにしているようである。だから、父はきまって僕に「俺の仕事の失敗は、お前も知っているよ

うに、いつも酒と短気のせいだ。これは俺が小さい時我儘に育ったからだ。」と言う。

母は体が弱く、働くのはよく働くがすぐ病気で寝込んでしまう。今も風邪ひきで寝ている。こうして寝込んでしまった時の母は、十分の養生もできないくせに「金がないので何も買ってやれないが辛抱してくれよね。」と言う。そんな時、たまに借金すると、薬代も十分でないのに無理な僕の買物をしてくれる。

僕はこうした父や母を見ていると、親の愛情の深さをしみじみ考えさせられる。そして何とかして金もうけをしようという気になったのである。

中学三年になる春休みのことである。僕は手打ちうどん屋へ働きに行くことになり、昼間の学校をよして東港中学夜間学級へ入学の手続きをとった。

勤め先の仕事は手打うどんの製造業。朝早くからの仕事なので住込みで働いている。朝早い時には二時頃、普通は三時から四時頃の間に起きる。眠い目をこすりながら、うどん粉をこねたりふんだり、そしてかまどの火をたいたりするのである。眠気さましに何回も顔を洗いながら……。

昼間はうどんの配達である。積み馴れない白玉の箱を、自転車の後に五、六杯積んで町の中を走る。勤める前は、ただ「今日は、毎度有難うございます。」と言ってうどんを渡せばよい——やさしいことだ——と思っていたが、仲々楽ではない。しぶしぶ金をくれる家へもペコペコしながら品物を届け、先方の御機嫌をとらなくてはならない。店へ帰れば主人の顔色をうかがわなくてはならない。食事も、ただ何も言わずおいしそうに食べなければならない。夕方になると、あわてふためいて学校である。その学校も遅刻することが多い。疲れが出て学校で寝ることもある。

こうした毎日の中で、僕は仕事をなげすてて、家へ帰りたくてたまらなくなる時がある。昼間の学校に行って本を読み、友達と遊びたいという人間並でもの気持に僕もひかれるのである。以前には、そんな時、こっそり家の前まで帰ったことがあった。家の前まで帰ってきた時、母が風邪をひいていたのか、咳をする声が聞えてきた。瞬間、僕の、胸の中はカーッとなり、目があつくな

り、自然に涙がにじんできたが、（こんな気持に負けてなるものか）と思って、泣きながら店へ帰ったこともある。

僕は今のうどん屋に住込む時、こんなことを考えていたのである。父の口ぐせのことば「人間は小さい時に苦労しなければ駄目だ」ということを実行してみよう。そして苦しみの底から、どんな失敗にもへこたれない心を作っていくのだ。そう考えたのである。

だが、疲れた体をひきずって夜学から帰り、「ただ今」と言って店に帰っていく。そして寝床をとっている時など、店の子が奥さんに甘えているのを見ると不図、父母を思いだし、何とも言えない気持になる。そんな時には、思いきりふとんをかぶって寝るのである。ふとんだけは、温く、痛い手足や腰をいたわってくれる。そのやさしいふとんの中で、僕は僕の希望の灯をともす。

僕の希望——僕はどんな仕事でもよい、その職の親方になろうと思っている。人に使われる仕事の中で、僕はしっかりした一人前の人間に早くなろうと決心したのである。自分の足で立ち、自分の腕で食え、誰にも遠慮しないで暮せる人間に僕は早くなりたいのである。

働くよろこび

三重県　室岡礼子
（紡績工　十七歳）

私が、現在の東亜紡織桷工場に入社したのは昭和二十八年の四月一日だった。その頃の信州は、春とは名のみ

で吹く風もまだ冷たかった。

そんな信濃路を後に、はるばると遠い三重県の地に落ちついたのである。

家を出る時の私の気持は、働きに行くのだという考えより、他の事で胸の中はいっぱいだった。家を遠くはなれる淋しさや悲しさ、又三重県という見知らぬ所の生活、どんな人達と一緒になるのだろうと、あらゆる不安や好奇心をいだいていた。そんな気持のままで入社した私である。その日から今日まで、二年二か月何事もなかったかのように日々を過してきた。だが私は、入社した当時より現在の自分が、心身ともに成長したなあと感じられる。

ついこの間の事、高校へ進んだ一人の友からこんな便りがあった。

「私はこの頃しみじみと自分が情けなくなりました。高校生活の二年間、その間に私は何をしてきたというのでしょう。ただテストのみに苦しめられ、その日その日を過してきたと言ってもいいでしょう。今の私の気持はすっかり痛めつけられ、挫けてしまいました。そして、絶望のどん底に落ち込んでしまったようです。一年も前から楽しみにしていた修学旅行も、生活があまりにも苦しいために行く事ができなくなりました。私はどうしてこんなに苦しい生活の中から高校を望んだのかしら……。自分で自分がかわいそうでなりません。そんな時、働いている礼子さんが本当にうらやましくて、幸福そうに思えます」とこんな内容の事が書かれてあった。私はこの手紙を読んで強く感動し、考えさせられた。

友はたしかに優れた頭脳の持主だった。それだけに高校へ進みたかったのだろう。それに将来のことも考えて、やはり、高校を出なくてはだめなのだと考えていたのかもしれない。

父親は進学を反対していたというのに、友は無理を通して高校へ進んだのだった。

私の場合は、友とは全く反対の考えだった。十歳の時に母親を亡くし、当時十二歳の姉を頭に五人の幼い兄弟が残された。それからの父は、私達を育てるために、どんなに苦労した事か。私は中学に入った頃から早く自分で働きたいなあと思うようになっていた。どんな職業とい

った希望でなく、ただ漠然と働きたかった。父に何から何まで苦労をかけることが、私にはたえられないほど苦痛だったのである。中学も終りに近づき、皆が高校々々といって騒ぐようになっても、なぜか私は高校へ行く人達をそれはどうらやましいとも思わなかった。私は働きに出る事を当然としていたから、父に一言も高校へ行きたいなどともらした事はなかった。私がこんな気持になっていたのも、幼い時からの境遇のせいかもしれない。

今こうして友と自分を比較してみると、互いに異った道を歩んではいるが、結局は強く生きんがために苦労し、努力しているのである。私の生活は、職場と寮とのはっきり区別された生活をしている。仕事は交替番といって、一週間交替で朝五時から働く日と、午後の一時四十五分から働く日とに分れている。

幸い私達の工場には学園があり、一日二時間の授業を受ける事ができる。課目は和洋裁・社会・国語等である。一日二時間と言えば短かい時間のようだが、働いている私達にとっては決して短かくはない。これが精一杯であろう。

だがこの授業を受けると受けないとでは、人間的に大きな差ができる事は言うまでもない。私達の緩んだ心を緊張させ、そして正しい道を示してくれる。映画も毎週一回は観賞できる。私はこれで満足だというわけではないが、ある程度めぐまれた環境の中で生活できる事を幸福だと思っている。

毎日を健康で働いて小さい弟達を旅行にも行かさられたし、又下の弟が筋肉炎で入院した時も、私は一生懸命弟のためにつくした。弟は、

「姉ちゃんいつも心配かけてすみません。僕は姉ちゃん達が働いていてくれるのでほんとうに幸福です」

とこんな便りをよこした。

姉妹であるからそんな事はあたり前なのに、弟からそう言われると私は、涙が出るほど嬉しかった。

健康で毎日を働いて過ごす事ができる私、私が働くという事は自分一人のためではなく、家族全体の生活を良くしていく事なのだ。このように考えると働く事の喜びを私は強く味合う事ができる。

団体生活で働いている以上は、家庭で味合う事のでき

ぬ苦しみや悲しみもある。だがその苦しみや悲しみに負けず努力して進んで行く事が、私達をよき社会人として育てて行く道ではなかろうか。健康で働らけるということに希望をもって、明日への喜びを見出して行こう。

大人の人に尋ねたい

滋賀県　志城むつみ
（縮緬織工　十六歳）

食べ尽したいような黄緑色の若葉も一雨毎に濃くなり、再び太陽の季節がやってきた。再び！　そうだ再びなのだ。私がこの工場へ勤めるようになってから二度目の太陽の季節なのである。満一年。私にはほろ苦い人生の味と、天国と思われるような楽しい思い出しか頭の中に残ってはいない。

一年と言えば生れた赤ん坊もそろそろ歩き初める頃なのだ。机にもたれ、障子につかまって、どうかして歩けぬものかと、ふんばっている姿が目に浮ぶ。実に可愛い。無意識の内にもきっと一生懸命なのであろう。両親がハラハラして眺めている。おばあさんがホイホイ調子を合わせている。一日の疲れも悲しみも忘れて楽しいの一と時を過しているのであろうこの一家。私もその赤ん坊と同じなのだ。だが同じ赤ん坊でも年が違う。体がずっと大きい。考える事もできる私だ。唯、社会というところで「一人歩きはできるかい」と手を離された赤ん坊、それが私なのだ。私が転んでも手を取って起こしてくれる人はおそらく居ないであろう。腰小物をすりないて泣

いている私を介抱してくれる人も見つからないであろう、この大人の世界。いや笑っているかもしれない。護っているのかもしれない。だが、私は針の山も茨の道も唯一人で越えねばならないのだ。哀しいというのか、淋しいと言っていいのか、そこまで考えつめると失神した人間のように、私には何も彼もが後へスーッと引き退ってしまうような錯覚を起すのである。概して私は神経質な性分である。矛盾した大人の世界を考えると、頭の中で釣鐘の破れるような耐えきれない痛さを感じる。いっそ何も考えない馬鹿でありたいと願う事も、一度や二度の事ではなかったろう。

三十人に満たない私の工場の生活が、冷たく身にしみる今、とても大勢の人中では暮らして行けまいと思うと、唯未恐ろしい気持で一杯である。女性という事がそうさせるのかもしれないが、他人の生活に干渉するというこの事実が、私の目にはすごく穢らわしいものに見えるのである。唯一通の手紙にも、射るようないくつもの目が注がれていると思うと、縛られたこの生活は哀しい人生のどん底と言わねばなるまい。だが「一寸の虫にも五分の魂」と言うように、私でも感情を持つ人の子である。なまじ若いからとて年上の人達に馬鹿にされるのは実にくやしい。同じ仕事をする友達と歌いた事は数えきれない程ある。そんな事が年上の人に聞えたものなら、静かな池の中に投げた小石のように、だんだん大きな輪になって、又私のいる岸辺に返ってくる。「人間恐るべし」とは真にこの事ではあるまいか。

又、大人は大のうそつきである。私が家でそう言うと、兄は「もうじきお前も大人になるんや、あんまりけなすなよ」といってからかいます。その度に「まだ二十歳になるまで三年もあるさかい、その内にビキニの灰でもようけ降って人間心理に大異変が起こるさかい、大丈夫や」と茶化して終りになるのですが、本当に人の心を自由自在に変えられる機械がないものかと、頭をひねる事が度々あるのです。

昨年の九月に基準局の人達が工場視察に見えました。その時工場の小父さんが、私達に「基準局の人に何か聞われたら、八時間労働だと言っておけよ」とおっしゃったのです。その時の腹立しかった事、今思い返しても腸

の震える思いです。幸か不幸かその時は何も尋ねられなかったのですが、又今年も同じ事に突き当りました。今度は新中卒の人達の上に。なぜ嘘をつかなければならないのでしょう。なぜ七時から六時までの十時間労働だと、本当の事をいったらいけないのでしょう。私は大人の人に尋ねたい、嘘を言ってもかまわぬのかどうか。学校の先生は嘘をつけとはおっしゃらなかった。母も言わなかった。だのに世の中の人はうそをつけという。こんな馬鹿げた事があっていいものだろうか。私の工場は朝七時から夕刻六時までの従業で、その間に四十五分の休みがあるだけだ。おまけに二週に一回の休日、誰かの言った月月火水木金金という生活である。物質的や、労働的には中以下の生活かもしれないが、精神的には恵まれている私である。十時間の労働がそうたいしていやだとは思っていない。だがそんな事を耳にした日から私は動く事がいやになった。真心こめて働いても浮ばれないような気がするからである。ああ、大人っていやだ！　大人にはなりたくない。大人になれば又青年達から嫌われるであろう。いや嫌われるより先にうそをついたり、嘘口をいったりしなければ良い。大人の人よ考え直して下さい、若芽をふみにじらないで下さいと、私は心から祈りたい。

仕事を通して

京都府　柴田郁子
（織物整理工　十七歳）

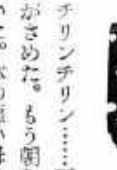
私は、二十八年に新制中学を卒業して、すぐに親類の〝今井織物整理工場〟で働くようになりました。私の工場の仕事は、小巾のチリメン製品、つまり一越縮子・八掛等に糊を入れる仕事です。従業員は男女共で二十三人です。〝糊を入れる〟と一口に言ってしまえばかんたんなようにきこえますが、品物の目方、しめりかげん、天候の様子等、細かい事までもよく注意して仕事にかからねばなりません。又最近ではいろいろの科学薬品も生まれ、同業者の間では常に熱心な研究が行われています。この仕事は、私達の京都の重要な産業である京呉服生産上もっとも大切な仕事の一つです。私のたずさわっている仕事は、加工する品物を受取り、出来上ったものを納める役目です。入った当時一番困ったのは、電話の取次をする事でした。生まれてから一度もかけたことのないものを、まして外からかかって来るものの要点をきき、それに答える事は決してたやすくはありません。「朝から何ぼやぼやきいてはんのどす、もっとしっかりした人いはらしまへんのどすか」とか「今日どうしても送らんならん言うのにそんなたよりない返事でわからしまへんがな」なんて言われた時、ほんとに自分が情なくなり、しらずしらず目頭が熱くなるのを感じ、「私は今年来たばかりで何もわかりません。そんなにガミガミおっしゃら

ないで下さい」と言いたくなるのです。電話のベルが鳴ると人に気付かれないようにそっと電話口をはなれる事も幾度かありました。又その頃自分が働らいている以上学校でおそわった〝労働基準法〟が頭からはなれず大人の人の行動について常に不満を感じていました。でもこの頃になって、労働基準法で定められているいくつもの細かい規則が、あらゆる工場で確実に実行されなければならないという考えがちがっていたのに気が付きました。特に、私達の住んでいる京都は、西陣のように昔のままの家内工業で少数の人を使って仕事をしている所が多いのです。又家代々の伝統をほこる焼物等は昼夜をとわず熱心に作られているのです。このような小規模の工場に労働基準法を根本的に取入れる事は、環境に恵まれ設備のよく整ったモデルスクールで行われている事を、それとは正反対の学校でそのまま実行させようとするのと同じ事だと思います。学校で習った事は、社会へ持って行っても必ず押し通せるという考えはちがっていたのです。私は常に使う人は使われる人の身になり、又使われる人は使う人の身になっておたがいの立場をよく理解し仕事を運営して行けば、いちいち労働基準法をひっぱり出さなくてもよいのだと思います。これから私達は〝自分はまだ子供だ〟といつまでも自分に言いきかせていないで、一日も早く大人の世界へ仲間入りできるように勉めねばならないのです。そのためには、まず自分の一番身近にあるものに対して、関心を持たなければなりません。自分の仕事に関係するいろいろな行事や書類等〝大人のためのもの〟ときめてしまわず、自分から進んで参加し、又研究して行かなければならないと思います。私達は〝やってみよう〟と思えば必ず実行できる力を持っているはずです。今日も「生地がありますから取りに来て下さい」と言われて「今配達が出ていますので帰りましたら寄せていただきます」ガチャンと受話器を置いた時、自分がうそを言ったのに気が付きました。それはうそを言ったのに気が付いたのではなく、私もいつの間にかうそをつけるようになったのです。

配達は、もうとっくに帰って来て、納めに行く品物が出来るのを待っているのです。大人の世界には、時と場合によってうそをつかなければならない事がたくさんあ

るのです。大人の世界にひそんでいる何者かが、正直な人にまでうそをつかしてしまうのです。

私は自分もいつの間にか大人になってしまったのに気が付きました。そして何かしら、さみしいものを感じるのです。



女工員になって

大阪府　新城経子
（工員　十六歳）

チリンチリン……豆腐売りのかねを、うっすら聞いて目がさめた。もう朝なのだ。妹は台所で朝食の支度をしていた。休の弱い母はまだ床の中で、ぼんやり何か考えているようだ。弟達も、まだ起きない。私はねむたい目をこすりながら、チラリと時計を見て、飛び起きた。床をあげて台所を、手伝った。「姉ちゃん徹男と邦夫を起こしてや。」と妹にいいつけられた。今では妹がもっぱらお母さん役だ。弟達を起こし、姉妹四人で朝食の膳に向う。食事をしたくないという母の事を気にしながら食事をすまし、二人の弟と妹を学校へ出して、ざっと後かたづけをしておく。「もう、おそいから早く行きなさい。」母に言われて「いってきます。」きしきしときしむ戸を後に外へ出た。いろいろな事が頭に浮んで来る。父のいない家庭とは何んというみじめな生活だろう。中学在学中は、進学したいという一心から希望を持って勉強した。だのに家はだんだんと苦しくなる一方で、卒業近く

なると、どうしても、進学出来ない事がわかった。親しい友達は大部分進学進学と言って夜まで勉強していた。私はその時まったく、気のぬけた人間のようで、ぼうっとして、何も考えられなかった。でも学校の事は自分自身でいろいろ考えてどうにかあきらめた。今では母の片うでとなって、働かなければ、ならないのだ。母もそして妹や弟もみんな、私一人をたよっているようだ。弱い体質ではあるが、一生けんめいに働いてみよう。そんな事を考えているうちにもう会社まで来ていた。今の会社は、よい所だ。まだ新しい、そしてみんな良い人だ。近頃はすっかり会社になれて何をするにも不安がなくなった。「お早ようございます。」「お早よう。」みんな笑顔であいさつをしてくれる。私はこんな時うれしい。友達はみんなはつらつとしている。私もできるだけ元気を出してほがらかそうに見せるために努力する。学生時代は、女工員といえば何んとなくいやな気がした。だけど今私は女工員である。女工員とは思っていた程いやな不潔なものではなかった。今日も一日一生けんめいに働こう。

会社では上役の人達も私達一人一人を尊重してくれる。近代的な会社に勤める事はうれしい。そうだ。卒業する時先生に贈っていただいたサインにこんなのがある。「過ぎ去りし昨日を追うな、まだ来ない明日を待つな、今日こそ今日をにがすな。」時々この言葉を忘れてはならない。今日こそ有意義にという言葉のもとに、一つの製品を作るのにも、しんちょうにやるように心がけよう。そのために、少しでも、ほんの少しでも会社のためになったとしたら、その日は、有意義だったと言えるだろう。会社での昼休みの雑談も、一日のもっとも楽しい時である。学校での昼休みとは異ったふんいきを感ずる。夕方家に帰る時はいつも急ぎ足になる。なぜか分らない。とにかく一時でも早く家に飛び込みたいような気になる。妹が学校から帰って夕食の支度をしてくれてある。妹がこしらえた御飯は代用品にしろ食膳に向う時は、しみじみ妹の有難さを感じる。夕食後は、弟達をやすませて、妹と後かたづけをする。ひまの出た時は少し読書をすると、少しでも心が明るくなる。弟達のつくろいものも少しする。床に入ると大きく息をして、手足を十分にのば

して見る。妹はまだ教科書をめくっている。母が「早く寝なさい。つかれるから。」と言う。母もきつそうだ。

何か口に合うおいしい物でも、あげたいと思いながら、昼間のつかれに、いつしか夢の中へ引きこまれた。

私の危機を幾度も助けてくれた人と制度

兵庫県　菅原淳三郎
（鉄工　十七歳）

会社の門を入ると、車道と歩道に白い線で分けられたコンクリートの道路が奥の方に真直に延びている。車道が朝の太陽に照らされて、白く健康そうに光る。歩道には自分の職場に急ぐ人々が、活々と流れるような列を作り靴音行進曲が軽々かにかなでられる。明るい太陽の光線を頭の上から斜めに受けた前を行く人の頬に、五月の緑風がすがすがしい。私がこの出勤時の人の流れの活々とした、会社内の一カットを、美しいと感じ、頼もしいと感じ、自分もこの一カットを形成する人の流れの中の一人である、ということに誇りを感じだしてから足かけ三年にもなる。

美しいものに対する感覚は誰でも持っており、何をより美しく感じるかは人それぞれの好みによる。私は、過去で最も美しいと思ったものを言えと言われたら、誇張でなく、この朝の会社内の人の流れと足音、その両側の建物、その建物の向うに、淡い煙をゆっくり流し散立した数本の煙突、それらを照らす、太陽の光とその影など、それらが一つになった時の絵画的な美と、その時の

感じをあげるに違いない。花や単なる景勝の美しさと違って、働く人と、場所と、時を兼ね備えて、奥底からわき上るような意気と力を清新な中に強く感じさせるからである。私がこうしたものに美しいと感じるのは、過去二年の勤労生活の中から、多くの良き指導者や諸先輩の指導に導かれて〝働く〟という事の正しい意義と尊さを、一端ではあろうが、理解し始めたからだと思う。会社に入って間もない養成工一年生もまだ始めの頃。

『君や君と同年齢の人では〝働く〟という正しい意義や尊さを理解することは非常に難しいことだよ。もっと大人になって、物事に対する考え方が安定し、働く事に慣れ、その結果の喜びを幾度も得ないとね。それに、この働くという事が本当に理解しかねるために、他から見るとうらやましいような仕事をやっていても、どうかするとつまらないと感じ、他人の仕事が非常に好ましいものに見え、自分の仕事の誇を自らきずつけ、非常にくだらない勇敢さで行動し、人生につまずきを覚え、〝しまった〟と思ったがおそかったと言うのも、君らの年齢に起こり易いことなんだよ。』と私が日頃導教する、働く事に

彼の生涯の大部分であろう三十数年をささげたAさんに聞いた。私はこのAさんの話を一年生の時には、そうかな、と思っていた程度でピンとこなかった。二年生の中頃になって私はAさんの話を幾度も思い出すようになった。それは彼の話にあった通りの、年若い誰もが一応出合う、自分の仕事への不満であり迷いである危機に実際に突き当ったからだった。私はその度毎に、同時にAさんの話を思い出すとともに、なるべくAさんの家に遊びに行ってAさんの人柄と彼の長い労働生活の経験に接するようにした。彼の三十年を越す労働生活からにじみ出る幾多の話は、自然に働く者の誇りと尊さを教えてくれ、強く僕にうったえ、迷う僕を救ってくれた。

Aさんの人柄と共に僕の幾度かの危機を救ってくれたのは、私が現在在籍する、養成工制度という働く年少者を守ってくれる理想的な制度であり、その制度のもとに日々暖い指導をいただいた教育課の諸先生であり、現場の指導員の方々だった。この制度で私は、正しい労働の精神と、一般社会人としての生き方、また、会社の生産人としての知識、技能等、週に四日間、一般の工員の人

に交っての労働に、その実際を学びつつ教育された。週に二日の学課勉強に知識と教養を養い、四日間の勤労で働く事の苦しさから生れ出る喜びを味わい、〝働く〟という本当の意義を学んだ。

Aさんの言葉にもあったが年若いということは、誰もが体験する危い人生の一期間のようだ。私の年齢は大人と子供の中間にある。中学校卒業までは父母の保護のもとに育まれ、子供として社会に交わった。中学校卒業、会社に入ると同時に私の社会での立場は一八〇度回転し、私の年齢的感覚も急上昇した。会社は少数の先輩を除いては大人の集りであり、その人々は皆〝働く〟事により自らの力で生きている人であり、家族を養っている人々だった。私もこの人々の仲間入りをしなくてはならなかった。生きさせてもらっていた立場から自らの力で生きる、また生きなければならぬ立場に急回転したわけである。だから私の年齢的感覚が急上昇したのも無理はない。自分は大人になった（事実は環境に変化があっただけで自分自身の成長は微少だったろう）と思い、それにしてはあまり差があり過ぎるとも思い、それからは、早く一般の大人のようにと低い背をつま先立てて背伸びし、身近かな人々と肩の線をそろえようとし、その人々の言動は大小の刺戟となった。肉体的、精神的にも、善、悪にも、それが現在の私にも引き続いている。だからそこには、第三者が客観的に見ると、危くて見ておれぬ、無理があり、多くのむてっぽうさがあったに違いない。それに私の年齢では自分を第三者の立場から客観的に見る事が出来ぬから、ここにも大きな弱さがある。だから私達の年齢には、その時々に、私達の背伸びを、正しい方向に、真直になるように助けてくれる制度や、人が必要なのだ。私はこの点からもよき制度と良き指導者に恵まれていることを感謝せねばならぬ。

私達年若い働く人達は、年齢的ななやみと弱さをもって常に危い背伸びをしている。これを将来の立派な労働者として成長させるためには個人の自覚と個人を守ってくれる、強い、暖い、正しい、社会の力が、制度が必要だ。私達は伸びられるだけ背伸びするのだ。素直に正しく、真直ぐに。社会は私達を守り、導びいてくれるに違いない。

私はこう考える

奈良県　塩田幸子
（紡績工　十七歳）

会社に入って早や二年余になりました。入社当時は仕事に対する考えも浅く余り熱心でなかった私も、日を重ねる毎に働いている時の尊い雰囲気を味わえるようになって来ました。それまで学校生活を呑気に過していた私は今やっと、人と人との関係のむずかしさや、精神的疲労の大きい事を十分に知らされました。

生きる事は本当にむずかしい事です。上役に叱られた夜など、仕事の能力に対する疑問を抱き、私自身の将来の事など考え、眠れぬ一夜を明したものでした。そして堪えがたい苦悩にぶつかる度に、進学した友達をうらやましく思い、劣等感にひたったものです。しかし、もう一度考える時、「そうだ、誰もが血みどろになって生活とたたかっている、私も頑張らねば。」と苦しみ、もがきながら努力し、伸びようと息をふき返すのです。毎日をぼく然と過ごすのが、近頃惜しくてなりません。生活能力がないばかりに、今までの女の生き方がいかに惨めであったか。私も、このままではいけないと、誰にも劣らぬ教養や、技術を身につけ、一個のよりよき社会人とならねばと考えます。

私は仕事のかたわら洋裁を習っています。洋裁と仕事の事でつらい時には、世の人々の生活の苦闘を考え、又、母が一人で子供の立派な成長を希いながら生活とた

たかっている事を思い、「これではいけない」と自分自身をむち打って洋裁学校に通うのです。仕事や学校を通して、人と人との融和や、あらゆる生きた社会の事を勉強する事ができると思います。誰でもきれいな良い職業につこうとあせるのですが、その仕事が社会のために役立つなら、決して上下があるものではありません。どんな仕事でも誰かがしなければ社会は成立しないのです。どんな仕事でも軽蔑せず一生懸命働くということは、大変立派な事です。生活や仕事に真正面から精一杯に取り組んでいる、そうした誠実な生き方に誇りをもつべきだと私は思います。

計画性がなく、自分の仕事に責任を持たないと自分の仕事がつまらなく思え、自然と生活自身をつまらぬ希望のないいじけたものにしてしまうと思います。私は一日の日課としてなるべく読書するようにしています。読書こそは、私にとって唯一の楽しみであり、教養を高める手段となっているのです。昔からよく「立身出世」と言われますが、みせかけや借りもので人生はおくれるものではなく、地位や名誉で満足するような人間になりたくないから、こうして毎日働き、努力しているのです。

私の日々の労働が生産を通して社会の力となっていると思うと、大きな生甲斐をおぼえ、働くよろこびにひたるのです。私は〝働いて生活している〟希望を胸一杯にして懸命に仕事にはげみつづけます。どのような不幸や災難がつみ重なってきても、それが又人間としての楽となり、教訓となって行くのだから、それに打ち勝てるだけの強い身心を養って行きたいと思います。

今日も、工場の中のほこりのたまった天窓から、五月の太陽が、機械の上にも、その強烈な光を投げつけています。モーターのうなり、歯車のかみ合う音の交った中に、白い綿がゆるやかに音もなく流れて行きます。その中で私は、明日の幸福を夢見ながら働きます。

果樹園を夢見つつ

和歌山県　山本敬吾
（農業　十七歳）

今度私が開拓をするために、この山の上に建てられた家ではもう先程から、地方の偉い人たちが、お祝いということで寄り集まっていた。中には今度当選した県議T氏もいたし、開拓の手続きに関係のあるM課長等、特別偉い人達も集まっていた。戦禍を受けて孤児となった私は、学園のお世話をうけて、やっと十七歳九か月になった今、新しい門出を祝福して貰っているのだ。私が下の池から食器を洗うための水を汲んでくると間もなく、祝いの言葉らしい挨拶ものべずに、これらの人達の酒もりが始まった。別の部屋で昼飯を食っていた私の耳に、ふと狭い六畳二間の壁をつつぬけにして、こんな話がきこえて来た。

「Tさん、どうぞ一杯つがせて下さい――。今度の当選は実に見事でしたなあ！　お目出度うございます。」

「ああ、有がとう。でも苦戦でしたよ、実に……」

「何しろTさんは評判がよいから……」と向かいに坐っている、おっさんと二人がうなずき合っている。私は聞く必要のないものだと思いながらも、このような偉い人達の話が聞きたかった。

「Tさんは実に庶民的ですからね。今度の立合演説の時など、とても評判がよかったですよ。」

「ああ、あの時かね。でも随分苦しい演説でしたよ。な

にしろ私は口が下手なものですからね――」仲々みんなうまいこと言うな――と思った。

話は続けられた。「兎角議員さんていう者は庶民的な事が第一だからね。Tさんなんかその点申分ありませんからなあ――」M課長は先程から同じような事を何度も言っていた。破れた障子の間をすかして見える小さな室に、ぬり立ての荒壁、その小さな背景の上には、だらしなく手足がのびている。成程庶民的な人だという意味が解って来た。しばらくして私はこの人達の前に出て挨拶をするよう強いられたので、唯黙って頭を下げたきりでうつむいていた。その時「君一人でこの山を拓くのかね？若いのに偉いな――。又何か困った事ができたら、知らせてくれれば力になるから……」とT議員さんのもつれた言葉があった。私はいつともなくその席から去って、便所の小さな窓から、荒々しい樹木の立ち並ぶ小高い開拓地をにらみつけるようにして、これからの開拓のことを考えていた。重い唐鍬を振り廻し、根っこのごつごつした奴をぶんなぐらなければならないのだ。私には宮沢賢治のように土と親しむとか、青花の如く花と戯れていられる程の余裕もない。唯毎日を汗腺の干く迄働かねばならないのだ。でもたしかに楽しい事もある。先日も、前に播種してあったインゲン豆が、むくむくとした青い葉の間から一〇糎あまりもある莫を出しているのを見てとび上った。早く、しのぶ竹を切って支柱を立ててやらねばならない。「俺が支柱になってやればいいんだが……」こんな事を考えながら、自分がこれから一体どんな支柱を求めて行けばいいんだ……。私も今迄は学園という緑の園で、自己を陶酔させる時もあった。だがこれからは、人を頼ってはいられないのだ。一歩一歩自分の心も開拓して行かねばならない。と思っている頭上を、四十雀が楽しげに飛び廻っていた。すると又寂しくもなってくる自分である。でも私は中学時代の二人の友からいろいろ教わったり、励まされたりしている。一人は当時習った国語の先生のもとで、昼は農業をし夜は勉強を教わっている。彼はしばしば土の中に見出した感興の詩を私に送ってくれる。私も少なからず彼の感化を受け、その日の感銘を綴りながら、一歩一歩心の開拓に努めている。今一人は父は戦死したが、やさしい母の手一

つで高工へ通い、電気技術者になるのだと頑張っている。先日もこのやさしいお母さんに、ささやかな夜食をごちそうになった。更角貧しい者同士がより集まると一段話に花が咲く。毎日荒々しい木の株を相手に働いている私には、このお母さんが、「私のマリヤ」だ。このお母さんにあった翌日は、何となく力がみなぎってくる。

すがすがしい朝だ
新鮮な風が頬をうつ
初夏の香りをのせて
腹一杯吸おう　この空気を
息の続くかぎり
そうすりゃ　もっともっと
味が出て来るのだ
石も岩も、毛虫までも

その夜はこんな詩をかきなぐってあった。でもどうかすると、私には社会というものが解らなくなる時もある。

今日も暮れた
多くの疑問を残して
それらがかぶさってしまいそうだ
でも頑張るんだ
力の限り　解決を見るまでは
負けてはならない
それまで進むのだ
明日もまた　疑問が生れるだろう
しかし　その次は　きっと解決する

私はやはり、何時できるとも知れない果樹園を夢見つつ、この荒地を相手に、一生懸命開拓をしようと思っている。

女工生活

鳥取県　野上弥生
（紡績工　十七歳）

屋内をゆるがすようにゴウ〳〵と唸る機械の騒音、真黒の機械に反映して白の制服制帽姿の女工が活潑に活動する。工場の就業時間は二交代制で、午前五時から午後一時四十五分までの部と、引続き午後の十時半迄の部とあり、各四十五分の休憩時間を挟んで一週間交代である。

中学を経てすぐこの社会に入って、ふと気がつけばもう二年余りになる。

始めて見た未知の世界、しかし学歴もなく貧しい私達には決して世間の人も親切でなく、きびしいいばらの道であった。

貧しくて学校へ行けない自分、そして皆の嫌がる紡績の女工として働かなくてはいけない。なぜ社会はこのように矛盾しているのか……。入社当時は、立ち通しの仕事のため足全体が棒のようにこちこちになり、仕事がすめば歩くのさえおっくうであった。又重い機械みがきや重量物を持運びしなくてはならないので、女の我々にはひどく重労働であった。毎日々々会社へ行くのが苦しみであった。私は現在の仕事に満足していない。できれば転職したいと思っているけれど、どの仕事も同じだと考える。他人の仕事がいいように見えるだけだと思うので、私は今の仕事を愛し努力したいと思っている。肉体的には重労であっても精神的には随分楽である。定めら

れた時間に出勤し、時間が来ればさっさと帰ってしまう。働く身となり特に辛い事は、我々女工が社会からどういう目でみられているかということである。も少し暖かい理解のある目で見てほしい。だれでも人間である以上、いい職場で働きたいのは人情である。我々だってすき好んで入ったのではない。貧しくて学歴のないが故に、なぜ紡績女工は軽蔑されるのか。近所でも何かすればすぐ女工の癖にと非難される。女工は「お嫁の貰い手がない」とか、女工なんて「えったと同じだ」と聞えよがしに言われるが、今はどこの職場よりもレクレーション施設も整い、たとえ仕事環境は悪くとも、女性の働きが大きな役目を果たしているところではないだろうか。

職場での楽しみは、短い休憩時間に換気のできない細埃の中から開放され、広い青空を眺め、甘美な空気をお腹一杯吸う事ができる時である。しかし上役は小さい時から何十年も紡績で育った人が多く、我々と思想も異りあまり理解がないように思う。時間内は使えるだけ使わなくては損だという考えからか、次から次と幾重にもあれもこれもというふうに仕事を言いつける。ゆっくり便所へ行くひまもない。心では腹だたしく思っても黙って我慢するほかない。

又朝四時に起きたり、帰りが十一時過ぎるので日常生活が安定せず、休のためにも非常に悪い。現在の職場にあって考えさせられることは、毎日毎日単調な進歩も希望もない生活のことである。将来のために洋裁でも習ったり、補導所で勉強もしたかったが、私の小さなねがいもふと家庭をかえりみれば、私の給料日を楽しみにしている年老いて病む父、小さな弟らにとって、私の給料はわずかでも大切な生活費である。大好きな本も買えない、新しい服も作れない、映画は年に二三度。でも、それだけ私は親のすねかじりする人より大きなプライドを持っている。つんつるてんの洋服でもいい、真黒な麦飯でもいい、沢山給料がもらえるようになって、父母においしいものでも食べさしてやりたいと思うが、生活は働いても働いても楽にならない。私がいくら働いてもこのような状態かと思うと、働く気力も失せてくる。このような生活をふみやぶり新しい生活を築くにはどうしたらよいのだろうか。

今日も暑く上衣まで汗が出てペッタリと体にすいつく。やけるように体が暑く、三十二度位が常温である。せめて寒位はあったら、通風が少しでもあったらと、皆暑いので顔をゆがめて、困ったような顔をして仕事をしている。私もあんな顔をしているだろうかと、一人でおかしくなった。悲しい時も苦しい時も私は唄を歌う。どんな大声をはり上げてもモーターの音に消されて、誰にも聞えない。仕事も楽しくなる。

今日も一日働いた。早く家へ帰りたい。何といっても一番安心してくつろげるところは家庭である。一日の勤務を終えて工場の門を出る時の気持、それは、工場での苦しみが多い時程楽しいものである。

大志を抱いて

島根県　甲山朋春
（煎餅工　十六歳）

「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず。」

僕は、幾度か同じことを繰返す。人通りのほとんど無い、川添いの田舎道だから、大きい声で言ってみる。すると、僕も人間として、立派に生きてゆけるのだという希望と自信が、むらむらと湧いてくる。

道が、次第に上り坂になっているからでもあるが、運搬車なので、ふんでいるペダルが重い。後の荷台には、一貫二百匁ずつ詰めた煎餅のかんを、四箇積んでいるだけだけれども、額に汗がにじみ、肌も汗ばんでいる。

「青年よ、大志を抱け。」

僕は、あたりにかまわず、大声で叫ぶ。山々にこだまして、わあわあという声で、はね返ってくるが、それは、天からのような声でもあって、たしかに「青年よ……オ、大志を抱け……エ」と、言っている。

僕が、会社の人員整理で失業した父の苦労を見かね、入学試験に合格した工業高校の進学をあきらめて、町の煎餅製造店に職を求めたのは、去年のこの月であった。進学する友達のことを思うと、くやしくて、泣くまいとしても、あとからあとから涙が流れ、眠れずに朝を迎えた一夜もあったが、働く友達の方が多いのだと気がつくと、二度とは泣かなかった。

一つの山を曲ると、僕がこの方面に銅に来るたびに、きまって「ああ、この当りだったなあ。」と、感慨にふける場所に来る。

去年の暮、空模様のただならぬ気配から、もしかしたら降るかも知れないぞ、とは思っていたが、冷えこむ寒さなので、あられならばたいしたことはあるまいと、いつものように四箇のかんを積んで出た。無理に頼んで一かん引取ってもらった店があったおかげで、ともかく全部渡すことができて、空の自転車を元気よくふみながら帰途についたのは、冬の短い日も暮れかかる頃であった。年過ぎから雪が降りだして、見るまに一寸二寸と積っていくのが、自転車の重さでわかり、ハンドルを握った手の冷たさとは反対に、全身が熱く汗ばんできたが、今日の外交が上しゅびで責任が果たせた喜びと、予定より、だいぶ時間をくってしまったのを、ばんかいしようと思う心で、力一ぱいペダルをふみ続けた。

「今ごろ、雪の降る中を働いている者がおるだろうか。夕飯をたべて、こたつにもぐって、好きな本でも読んで……」

僕のことか、幸福な友達のことか、つぶやくともなく一人言をもらしたのが、不覚であった。あっと思ったしゅんかん、横すべりした自転車もろとも、川側の斜面を幾回か転とうしながら落ちこんだ。

「しまった。煎餅は無いからよかったが、店の自転車がこわれたら、どうする。」

雪の中に頭をつっこんだまま、身動きもできないで、僕は考えた。いや、雪の中だから、自転車はこわれてい

ないだろう。そう気休めに思ってみると、何かに打ちつけた頭や肩の痛みが、ずきんずきんと感じられてきた。

起きあがる気力もなく、しばらく、そうしていると、世の中で僕が一番不幸な人間に思われ、あふれるように涙が流れた。

「こんな仕事、もう今日かぎりでやめるぞ。だれが、だれが、するものか。」

そう言って、泣いた場所がここである。だが、一夜明けると、はち巻をぐっと締め、痛む肩に顔をしかめながら煎餅を焼き、今日まで、幾たびもこの道路を御に通っている。

僕は、落ちこんだあたりに、ちらっと目をやり、にやっとして、足に力をこめると、自転車を思いきり早めて通り抜けた。

村の農協に着くと、仕入係の鈴木さんが、いつものように錠豆煙管をくわえて、何かの伝票をめくっていた。僕が声をかけると、顔をあげて、じろりと眼鏡どしに見つめ、好い人なのに、意地悪そうに早く返事もしない。

僕は、棚にならんだ十ばかりの、煎餅かんを見廻し、その中にあるうちの御した三種類の売行きがどんな工合か、見ることを忘れない。

「お前さんとこのは、どうも評判がよおないで。同じ値段で、味が雲泥じゃ。」

鈴木さんは立ちあがると、棚のところへ行って、一つのかんから煎餅を二枚ばかりつまみあげ、僕の前に持って来た。

「これ、くうてみたらようわかる。」

僕は一枚を受取って、形や色の工合をたしかめ、砂糖つけの調子をながめた。注意ぶかく二つに割れば、焼き加減が申しぶんのない程度なので「腕がいい者の仕事だナ」と思ったが、半分を口に入れて味わうと、やはり煎餅としての大切な風味があった。

僕は、店に帰ってから、主人や先ばいの人にも、どう思われようと注意しなければならない言葉を、胸のうちで繰返した。

勤労の中での勉強

岡山県　仁木啓二
（農業　十七歳）

私の家は水田一町四反、畑二反を耕作している農家である。七割迄は湿田の一毛作田で平均反当収量が四、五俵という非常に地力の低い土地ばかりである。家族は十人いるが、実際に農作業をするのは父と私だけである。

私達には日曜も祭日もなければ、労働基準法にも無関係である。だから父が小遣をくれないからといって、ストライキするわけにもいかない。

環境に恵まれぬせいもあるが私の地方では昔のままの考え方が強い。したがって、原始的な農業が行われ生活は極めて苦しいのである。だから私の生活も家業の手伝をする事が最も大切な事で、学習する事はほんの付けたりになってしまっているのである。しかし私は近頃勉強する時間の少い事に対して余り不満に思わなくなった。私の生活の場合、労働の中でものを考えたり、実験、実習を行うからである。学問を生活の中にとり入れようとすれば、自然勉強するようになるからである。

私の父も昔風な考え方をする人間である。だから少し位説明したって容易に納得しない。例えば「この土地には稲は適していない。米は四俵しか収穫する事ができないが、さつまいもを作れば千貫はとる事ができ、労力は半分ですみ、そのさつまいもで鶏や豚を飼えば、同じ生産費で米十俵分は軽く得る事ができる上に、堆肥や鶏糞

がとれ、肥料の自給率が上り、地力を増進させる事ができる」と説明しても、「先祖代々作って来た田をいも畑なんかにしてしまってはいかん」と、さつまいもを作る事も鶏を飼う事もゆるさないのである。

こんな考え方の大人達に支配されている農村を、どのような方法で近代科学と接近させてゆくか、これについて研究するのが我々の学習の一部であり、生活の一部分なのである。

農村では殆んど父親がサイフをにぎり、経営の計画も独断でやっている。そして息子や嫁は父親の指図どおり働くだけである。四十歳になる頃にやっと財産をゆずってもらう。その頃は父と同じ事を自分の息子にも言ったり、させたりしているのである。けれども父親は自分の耕作地を自分の考えどおり耕作しているのであり、それに対して息子達がああだの、こうだのと言って見ても、それにしたがわぬのが当然であるかもしれない。

こういう状態から脱却する方法は唯一つある。それは私達がでるだけ早く独立する事であり、自分の自由になる資金や土地を持つ事なのである。親から財産をもらおうなどと考えるから、親の所有物のようにあつかわれ、人権も認めてもらえないのである。二十歳以上になればたれもが親の保護から解放されるはずであるから、耕作地についても親から買うなり小作料を払って借りるなりすべきである。もしそれができぬなら悪い土地を自分で得た金で買って開くとか、いろいろな方法で自分の力で資本を作り、土地を開き、家を建てるよう心掛けねば、新しい農村は生れてこないと私は考えている。

お嫁に行くのに親から何十万という金を出させたり、又自分ではとうてい得る事のできないような多額の金を使った結婚式などやってはならぬと思う。あくまでも自分の力でできる範囲で行うべきであり、タンスが買えぬから、或いは着物の数が少ないからと言って、はずかしがる事はないと思う。むしろ自分達の力だけでやったのだというほこりを持つべである。文化農村を実現しようと思うならたとえ親であってもたよってはならぬと思う。

こんな事を考える所から私の勉強が始まる。又牛に与える飼料を計算するのに方程式を使ったり、計算尺やグラフ表等を活用したりする。水田の施肥設計をするのに

旧来の習慣などにとらわれないで、いろいろ参考書を調べて研究する。作業をしていても、たえず労力を軽くする方法はないものかと頭を使っている。そして考え付いた事はすぐ実行してみる。これらは哲立派な学習なのである。教室で講義を聴いてノートをするあの勉強よりもはるかに面白く、やりがいを感じ、よっぽど身に付く方法なのである。学校での学問は就職や進学試験に合格する事ばかりが目的となって、実生活の向上には余り応用されていないのではないかと思う時がしばしばある。と言って私は学問のみの世界に没頭する学者の存在を非難するものではない。私もそれにあこがれた一人である。けれどもその最高峰の学問を人類社会の幸福のために応用し、利用する事が、案外軽視されるのではないかと思うのである。

細いあぜ道を十貫匁余りの堆肥をてんびん棒でかつぎながら、原子力発電がどうの、遺伝ウラニュームがどうのと言われている近代科学と、我々農民の生活とを比べて、そのへだたりの大きさに溜息をついたのであった。

ある昼休み

広島県　横奥信之
（機械工　十七歳）

ボールは倉庫の壁に当ってポンという短い音をたててはねかえってくる。初夏の太陽がボールの影を舗装道路の上に落している。壁から七米位離れた所で小走りに走って、ボールを打ちかえしている私の顔には汗がにじみ

だした。壁テニスはテニス上達の好い方法だと聞いて始めてから三か月、大分打てるようになった。私は昼からの仕事に疲れが出てはと思って、今日は早めに止めてグランドの隅のクローバーの上に腰をおろした。グランドでは幾組かがソフトボールをやっている。

朝、起床以来、飯、支度、出勤とあわただしく始まる日課は、この一時間の休憩で一息入れて、又昼からの仕事へと続く。

私は機械工だ。二年間の実習場での基礎実習を終えて、現場実習になったのは二か月前だ。雰囲気は違うと言われたが、なるほどと思われるふしもあるが、これだからコストが高くつくのだと思うような所も目につく。

現場の人々は自分の使う機械の操作については優れているが、その構造とか、特徴、欠点等についての知識はあまりないように見受けられ、ただ昔からの経験でこの仕事はミーリング、これはレースと感で分けて行く。同じ型のミーリングを二台もっていても、それを十分に使いこなしている人は少い。材質、切削速度、工具等についても単なる経験だけでは立派な作業はできない。

工作機械はどんどん進歩している。精度は高く、自動的になり、昔の職工のような腕はあまりいらないようになる。この間の一技師の話では「そうなると工具管理がやかましくなる。そうして技術もより高度なものが要求されてくる。工作の中で難しいもの、これはネジと歯車だ。これ等の製品の精度、コスト等がその工場の技術程度を表わしてくる。ネジについてはもっと角度と有効経について技術を磨かねばなるまい。」ということである。そうなってくると、僕達は材質等について、これまで以上の知識を身につけねばならない。そうしなければ職工は唯仕事をする機械のようになってくる。

今の現場の人達が今そういう状態になりつつあるのではなかろうか。私の工場、特に私の職場の附近には、小学校だけの人が多い。そのせいかテーパー、リミット等についてすら、はっきり判っていない人がある。そんな人々は検査係と太刀打はできぬとか言って、単に計算の仕方が判らぬだけなのに安易に妥協して、それを自分のものにしようともしない。そんな人々は大概仕事がいやだといっている。又中には、仕事には不自由せぬだけの

知識をもっている人達でもそんな人がある。それらの人達は油に汚れるのが嫌いなのか、それとも毎日の生活が単調であるからか、いやそれ以上に職工という職が嫌いになっている。従来の職工が無学文盲の人が多かったために、いまですら世間にそんな考えが残っている。その恥辱を打破しようとする意欲を失っているのだろう。又その人達自身、他の人達と比較して（といってもその人達が比較するのは上級学校を出た人々だが）給料や一般的教養が劣っていると思っている——事実そうだが——劣等感がよけいに職工の社会的地位を低くしているようだ。まずこの劣等感をなくして自分の仕事にプライドを持ち、一方、一般的知識の吸収に努めねば職工の地位は向上すまい。

その原動力は若い世代である。しかし現場の若い人々にはそれだけの情熱をもっている人は少い。遊びにふけっているのが現状だ。こうしたイージーな態度は次の世代となる若い養成工の中にも影響をおよぼしている。最近の一般的傾向は勉強しなくなったことであろう。中の二三人は特にその傾向が著しい。なるほど僕達は若い生命の持ち主だ。異性に対する興味を引かれることもあろう。だが、それも好奇心ではなく、もっと真剣な態度が必要だ。そして僕達は僕達の使命が何であるかをはっきりと摑まねばならぬ。

真面目に生きるには多くの障害がある。僕達は定時制高校へ行っている。仕事と勉強の両立。疲れた身で睡魔に打ちかたねばならぬ。その他多くの困難に遭遇することであろう。そしてそれに堪えねばならぬ。人間は勉強しすぎていけないということはない。一見無味乾燥に見える勉強も長い人生の中には何処かで役に立つだろう。僕達は一日一日真剣に生活する事によって全日制高校生と堂々せり合うことも不可能ではない。単に理想を夢見ていたのでは駄目だ。それに向って踏み出さなくては。エベレストの征服も確実な一歩の集積だ。先ず実践だ。

ウオー、一時半のサイレンがなる。一時間の休みは終った。グランドも急に静かになった。五月の空に白い巻雲が飛ぶ。青い銀杏の葉が潮風に小さく揺れた。瀬戸内海の波はまばゆい。僕は立って黒い屋根が広く低く横う工場へと入って行く。モーターの音がする。

四つの信条

山口県　村上浩一郎
（事務員　十七歳）

父が長い間病気で寝ているし母も身体が弱いので僕の家は貧乏である。「貧乏」なんて嫌な言葉があるものだ。僕はいままでこの貧乏という言葉を聞くとたまらない気持になったものだが、働いたり、学校に通って勉強しているうちに貧乏に対する考え方も多少変ってきた。

貧乏でないのに越したことはない。誰しも好んで貧乏に陥る者はない。然し僕の家みたいに、みんなが身体を壊して働こうにも働けないような状態に迫込まれると始めて人間の社会は金のみが万能でないことに気付くし、金がなくても幸福というものはあるものだと悟ることが出来る。体験というものは尊いものだ。

僕は働いてみて始めて貧乏の有難さも知った。二年も進学の遅れた僕が、友達の境遇を羨ましく思ったり、腹を立てたりしたことなど、今では全く恥ずかしい。このように僕は自分自身が逆境にあることをあまり苦しいもの、悲しいものと思わなくなったが、その原因は何だろう。それはやはり父や教師の感化でもあるが、僕自身が社会を見て、いろんな体験をしたからであると思う。

「貧乏を追い越すもの」それは勤勉であり、健康であるのだ。教養であり、融和であるのだ。

この四つの尊い信条は僕の勤労の汗の結晶とも言えるものである。

昨年の春、十七歳のとき、ある大きい商店に就職した。沢山の商品、立派な店、大勢のお客、こんな店に立って僕が体験したこと、驚いたことはやはり貧乏に変りはないということだった。商店というものは、一見すれば非常に金廻りもよく贅沢な身分のように見えるけれども、生活の苦しさは僕の家と寸分の変りもないという事実であった。まして月末の苦しさ、集金に金策にかけ廻る人人の姿を見たとき、気の毒に思えてくるのだった。僕は持前の弱気から、とうとうこの店を辞めたのだが、母に相談するとき本当につらかった。「僕は辞めるよ」と切出したとき、母の顔は「なぜ」と不思議そうに聞いていたが、「でも先方に悪いんじゃないかい」といかにも気がねしているみたいにいうのだった。「僕は、仕事のつらいことなど構わないんだ。でも金のことで不機嫌になったり、返事もしてくれないときはたまらない」「僕のいうこと勝手かも知れないが、みんな明るい気持で、誠まじく働くところに勤めてみたい」「そんなことといったって……」母は僕の申出に大いに迷ったが、苦しい店の事情を話すと、結局辞めることに同意し、挨拶に行ってくれた。僕が至らないから先方でも辞めることを待っていたのであろう、心よく申出を入れて下さったとのことだった。

このようにして僕の労働は一か年の経験で消えた。しかしいままで家にいて母の内職の編物の手伝いをしていただけの自分の視野は、これを機会に広く大きく豊かになった。「働く者の気持、それは金銭のみにこだわるべきでないこと」「人間を完成する上に社会の一員として当然なすべき責務があること」それにもう一つ、「人に使われても、人を使っても人格を認めあって感情に走らないようにすること」だった。こうして僕は明るい気持で次の機会を待った。

待つ程もなく働く機会は訪れた。こんどは僕をよく知っている方だったし、それに母が信仰などで知合っている人の経営するローラースケート場なので、僕は金銭よりも気分的に楽しいものを感じて、心よく出掛けた。最初から土方である。二〇〇坪のスケート場を作る工事、

それこそクタクタになる程働くのだが、そこの主人夫婦から受ける印象、親しみというものは素晴らしかった。

「お前、学生か？」「ここで働いて夜学へ行っているのか、感心だな」土方の一人が僕に話をしかけてくるが、僕は自分自身よりも目的を持って働いている人は総て尊いと思っていると答えた。「ナアニ、そうやって卒業しているとキットいい事があらあ」土工さんは運命論者みたいなことを言ってくれるけれど、僕は笑って汗を拭うだけだった。

病気をいつも心配している母の不安も、土工作業が終了すると「よかった」「よかった」という感謝の声に変っていった。スケート場が完成してそこに遊戯しにくる人人を、こんどは事務員として迎える気持はまた格別だ。勤労の喜び、それが完成して人々の心になごやかなものを与える。こうした喜びは、仕事を完成した人によって始めて体験されることである。人間が明るく建設的な意欲を持つことの尊さ、崇高さ、そこに生きてゆく総てが包蔵されているのではあるまいか。

ここの御主人たって奥さんだって、いろんな経験をされている。でも僕らが感心することは、事業の消長に対して決して感情に走らない、愚痴を言われないことであり、又円満さである。それは生まれながらにして備わるものではあるまいと思う。人間が磨かれてはじめて放つ人格の光であると思う。僕はいま張切っている。これが若さというものかも知れないが、健康の必要を身をもって体得し、貧乏を征服するものは勤勉以外にないことを悟った。更に土方さんがいうように学問も必要であり、その上もう一つ調和というものが絶体に人格完成の上に不可欠なものであることを体得した。これからまだまだ高等学校を卒業するのにも二年半もかかるのだが、希望を持って進めば、たとえ苦難が伴っても、やりとげられると信じている。そこに僕の将来が築かれなくてはならないと思っている。

或る日

徳島県　工藤恵美子
（紡績工　十七歳）

ゴォーッ、と吸い込まれるような音に神経をいら立たせながら、私は織布の戸を静かに開ける。ムッとするような暑さだ。

急に鼻につく糊粉の匂いと、もやのような蒸気を気にしながら、機械の勢よく廻っている、四工場の一番奥にある自分の台に足早やに近づき、先番の人といつもの挨拶をとり交わす。「御苦労さん」「御苦労さん」「二等品出たの？」「ううん」

やがて一時四十五分の終業のベルと共に先番の人は帰って行く。これからの八時間を一生懸命に働くのだと心をひき締めながら、夢中で糸をつなぐ。今日はあまり糸が切れない。そういえば外は雨が降っていたっけ。

隣のA子さんも、いつもより余裕をみせて、「今日はよく廻るね」と話しかけてくる。「織布の雨蛙よ」と言い返すと満足そうに笑っている。機械の音の中だから一寸したことでも、大声を出さなければ相手に通じない。

雨が降ると台が調子よく廻り、私達がよろこぶので、他部の人から織布の雨蛙と言われるのである。現場での軽いユーモアは仕事に潤おいを持たせる。

自分を忘れて仕事に熱中している時、いつも気になることは、二等品が出ないようにということである。同じように仕事をしながら、二等品を出すほどくやしいこと

はない。

見廻り長さんが二等品のエフを配りだすと、そわそわと落ちつかず、出なければいいがと心で祈っている。

今日も向うの端から順番に見て来た見廻りさんが静かに私にエフをくれた。胸がドキドキして見廻りさんの顔をそっと見上げると、背の高い見廻りさんの「また出たのね」というような、きびしい目にぶつかって、おどおどとしてしまう。

仕上室に行く途中、どうして又二等品を出してしまったんだろう、私は台持はだめなんだろうかと情けなくて仕方がない。モーターの音までが自分を嘲けっているように聞こえ、皆の視線が自分に集っているように感じて、顔が上げられない。二等品は五十ヤール位の二本通しである。じっとみつめていると、一瞬にして色々なことが頭の中を去来する。これは私の不注意だったのだ。今少し注意すれば出なかった筈ではないか、いつまでもこんなことではいけない、もっと真剣にならなければ、私はまだまだ研究が、努力が足りないのではないか。

私は上級学校へ行きたいと思ったこともある。家庭でお稽古事をしている友達をうらやましく思ったことも二度や三度ではなかった。しかしこの仕事を選んだことはよかったと信じているし、一旦決心したからには誰よりも立派な職業人とならなければ……、そう思うと何だかとても勇気が出てきたようだ。

例の見廻りさんは、じっと見ていたが、「もう少し気をつけてね」と冷たく言い残して去って行く。私は唯「ハイ」と答えて逃げるようにして仕上室を出た。心の中ではさあしっかりやるのだと誓いながら。

自分の台に帰るとB子さんが「何をしょげているの。今度から気をつければいいじゃないの。元気を出しなさいよ」とはげましてくれる。にっこりして、それに答え、やがて自分の台の木綿を目を皿のようにして、じっとみつめている私だった。

ほっと一息つけるのはやはり夕食の休憩時間だ。大急ぎで御飯をすませると、思い思いの姿勢で話をしたり、本をよんだりするのは、何といっても一日で一番たのしい一刻だ。

A子さんが突然「私ね、この間友達にどこに勤めてい

るの、と聞かれたから嘘ついちゃった。」と首をすくめて笑っていた。私はハッとした。

どうして自分の職業をはっきり言えない程卑下しなければならないのか、幾ら紡績工場といっても皆の女工とは違うのだ、日本の国では如何に紡績工業が大切かということもA子さんは知っている筈ではないか。自分から卑下したり劣等感を抱いていたのでは、私達女子工員はいつまでたっても向上しないのではないか。そういう私自身もそのようなことはよくあった。でもそれを乗切り勉強していくことで自分は向上して行くのだと思う。

就業時間中、そのことがくやしくて頭から離れなかった。

やがて今日の勤めも終りのサイレンが鳴ると、やっと解放された気持で台を止める。外はいつの間にかお天気になって少し肌寒さを感じる位の夜風が気持いい。

満天の星を仰ぎながら、皆は思い思いに歌を歌ったり走ったりしながら女子寄宿舎へ向って消えて行く。

私も今日一日のことを考えて反省しながら、ふっと郷里の母の顔を思い浮べてみる。悔いのない今日の一日を母も満足に思ってくれるだろう。

私は寄宿舎に向って、セメントの道を思い切り走った。

僕のもつ宝

徳島県　川上小太郎
（歯科技工　十七歳）

僕は昨年鳴門市の養護施設から中学校を卒業致しました。僕の父は、僕が十歳の時になくなりました。そして、ただ一人お母さんがいますが、持病で全身不随のため、市の厚生施設に世話になっています。僕は昨年学校卒業直後十数倍の受験者中から選抜されて、鳴門を遠く離れた新居浜市にある、四国電力技能者養成所へ入所致しました。僕が労働者となって一番嬉しかった事は「自分で飯が食える」ということでした。こんなことを突然言い出しても、この時の僕の嬉しさを十分にくみとって戴けないかもしれません。それは僕が父を失って以来六年間、人々の血とあせの結晶とも言うべき税金を食って育って来たからです。中学校時代には、女子の級友達から頭を合わす毎に「私等の税金で養ってやっている……」等と言われました。その時の事を就職一日目の、自ら得た朝御飯の時に思い浮べたのです。然し僕の突入した社会とは、学校卒業当時の夢と期待を裏切った、いつわりと行詰りのきわまりないものであることを今始めて知ったのです。中学校時代には、愛児園連中（鳴門市にある児童福祉施設で、孤児院連中等と敬遠され、その雑言の中に、就職後に望みを持って月々を送ったのでした。然し今では「孤児院連中」等とさわがれながらも、精神的、物質的に何の心配もなく勉強できた中学時代が、僕

の生涯に二度と帰ることのない楽しい想い出となっています。四国電力に入社して六か月を経過した八月下じゅん、僕はオート三輪の練習中誤って交通事故を起してしまいました。丁度その時は交通安全週間でした。翌日の愛媛新聞は、会社の名をのせてしまいました。僕は〝退職〟より外に何の方法も見いだす事ができませんでした。辞表を出す僕の前途には、星一つの輝きもない、真っ暗な世界が広がっているかのようでした。ところが、僕の過ちはこれだけのいましめではゆるされなかったのです。それは、入社当日給金を頂いたので、その後毎月の給金は一か月前に前収する事になっていました。ですから、辞表にそえて一か月分の給金を返納しなければならないのです。勿論僕にはそれだけの返納金もなく、その上、辞表提出後帰る家もありませんでした。……僕の前途に大きく立ちふさがったものは〝死〟以外の何ものでもありませんでした。この苦しみの中にすべてをあきらめようとした僕の肩をたたいたのは、僕が辞表提出と同時に後継委員長として立った渡部君でした。「川上君これは、昨夜君が寝てから皆で自治会を開き、一人五十円ずつ出し合って、君の餞別にする事になった、君の真実からの再起を祈る！」電力会社の帽章も荒々しくとり外した学生帽を頭に、ボストンバッグをさげて力なく鳴門駅に降りたあの日……。あの日から早や九か月のさい月が流れてしまいました。今では鳴門市内の歯科医院へ技工手として勤め、四月から鳴門高等学校夜間部に通学しています。然し外面的に落ちついているかのような僕に、精神的なやみはたえ間なくぶっつかって参ります。僕は知人の家に下宿し、毎朝六時までに出勤しています。日曜日を除く毎日は、午后六時から九時まで学校に行き、日曜日にも勤務先の休日はありません。この時間的窮乏生活の上に母の無理解がおっかぶさって来たのです。僕が三日以上も母の所へ面会に行かないと、「子はいざりの親にあいそをつかし来んようになった。ここにいる者も世話役の者までが自分をにくんでいる……」等と狂気のごとくあばれ廻り、世話役の小母さんが御飯を配って行くと、それを投げ返し、ガラスを割るなど手の施しようもない程です。たまりかねた世話役の小母さんは、僕のいる医院へ入寮者を使いに出すのです。勿論勤

「め先の先生は不気げんで、その都度僕に「あの母親がいる間はお前のために十分な世話もできず、将来困って来るだろう。今の内に養子に行くとか何かの方法で母親との縁を切れ」等と言われます。前述のように恵まれた数時間とは月に一度あるかなしです。このようなことが起るのは一度や二度ではありません。時には社会のために「母を殺し自分も同行しよう」等というあさましい考えを起すことさえあります。このようなことを頭にしながら、知らせを受けて駆けつけて行くと、必ず人間が変ったように、母は世話役の人や同室の人に涙ながらにわびるのです。この姿を眼にした僕は、母のことを再び自分の心に問い返さずにはいられなくなります。「五十数年間全身不随の病床生活と、父を失って以来の苦しみから一種の精神的障害を受けているのだろうか……」僕は急に、母に対する今日までの不十分な自分の態度について恥ずかしい思いで一ぱいになりました。

以上で僕の書こうとした事は終りです。しかし僕はこの文を作ることによって、誰にも劣ることのない僕自身の宝を見出すことができました。この宝は僕を苦難にも失望にも勝たせてくれます。この宝が僕を立派な社会の一員としてみがき上げてくれることと確信を持っています。

二つの希望

香川県　香川・綾子
（事務員　十六歳）

病身な母と当時五歳の私、三歳と一歳の妹、この四人を残して父が中支湖南省で戦死したのは昭和十九年の八月でした。とても子供思いの父は戦地からも度々便りをよこしてくれました。今は大切な形見となった父の手紙には「暮しは豊かでなくとも、子供にだけはいじけた心を持たせないように、新しい玩具でも、ご本でも買ってやりなさい」とか「綾子ちゃん、(妹の)浩子ちゃんや芳子ちゃんをかわいがって、仲よく遊んであげなさいよ」とか、今読み返しても涙のにじむ優しい言葉が書いてありました。

その父を失った家庭の淋しさは、子供心にも強く感じられました。しかし私たち三人の姉妹は母の努力と慈愛によって、いじけもせず、ひねくれもせず、健やかに明るく育ってきました。

私は中学校時代から高校入学はあきらめて、就職を決心していました。でもいよいよ卒業期が近づくと、高校に願書を出すお友達がうらやましくて、何度も人知れず涙ぐみました。しかし弱い体の母が夜遅くまで頼まれ物を縫っている後姿を見ると、泣いてばかりはいられませんでした。昨年卒業と同時にK産業株式会社に入社しました。二十人近くの志願者中、中学校卒業で採用されたのは私一人でした。学校の成績がよいという以外、別に有力な、つてがある訳でもなく、かえって父のない子という不利な立場にある私が採用されたのは、本当に有難いことでした。

私は入社決定と同時に庶務課長さんに、高等学校の定時制に通学させて頂くようお願いしました。「会社の仕事に差支えなければ」とお許しが出ました。私はもううれしくてたまりません。でも働きつつ学ぶという事は、想像以上に苦しいものでした。会社は私の家から南へ三キロ、学校は会社から西へ四キロ、家は学校から五キロとちょうど三角形になっています。会社は午後五時の終業、あと片づけをして、夕飯も頂かずに自転車で学校へかけつけます。時には遅刻をすることもあります。雨の夜、雪の夜、空腹をしのびながらの往復の辛さ、今日は欠席しようかと思うことも度々でした。

会社の仕事は単純で、先ず雑務という程度のものです。現在十二人の女子事務員の中、中学校卒業は私一人

だけで、他の方は高校または短大卒業ですから、私が難務に当るのは当然のことであります。が、ただ書類を持って課と課の間を回ったり、その書類を綴じたり、極く簡単な計算をしたりというような、小学校卒業生にでも十分できる仕事だけでは、何だか物足りません。

自分の才能とか手腕とかを買いかぶる訳ではありませんが、中学校在学当時二級の珠算検定に合格し、書道の方も人並には書ける積りです。それに私は数学と文学とが好きという、ちょっと変った傾向があり、複雑な計算をさせられても、何かの文案を作らされても、高校卒業の方に余り負けないだけの自信があります。しかし、やっぱり肩書がないと、実力に相当する仕事は与えられません。うぬぼれてはいけないと、常に反省しながらも、こうした不満からぬけ切ることのできない私です。

しかし不満は不満として、現在の仕事を忠実に正確に果たすことが、やがて、明るい将来をひらくかぎです。私は書類一つを綴じるにも、どんなにすれば見た目に美しく、長く保存できるか、後で調べる時どう綴じておけば都合がよいか、という風に細かな注意を払っています。そして現在よりも、もっと会社の役に立ち、自分の能力が十分発揮される仕事を与えられる日を希望しつつ、自分では熱心に勤めています。

今一つの希望は、来春中学校を卒業する次の妹浩子を、高等学校の全日制へ入学させてやることです。「私と同じ道を歩ませたくはない。三年間の高校生活を愉快に過させ、就職するにしても一人前の職場につけるようにしてやりたい。」こうした念願から、私は僅かな給料の一部を割いて貯金しています。浩子も私の気持に感じてか学業に熱心で一年毎に成績もあがっています。

父はなくとも楽しい我が家、日曜日以外に親子四人揃って食事を頂くのは朝のひと時だけですが、それでも明るい空気があたたかく家を包んでいます。母も緊張した生活を送っているせいか、少しずつ丈夫になっていくようで、こんなうれしいことはありません。

入社して以來

愛媛県　阿部純子
（電話交換手　十六歳）

昭和二十九年三月二十四日、私は中学の義務教育を終え、その年の四月にある機械会社の某製造所に入社できました。と言っても、私の仕事は極くつまらない、毎日毎日、

「モシ、モシ、ハイ、ハイ、何番ですか」

を、繰り返しさえしていれば、それで一日の勤めが果たされ、報酬が得られる、いわゆる交換手として採用されました。

自分が何か不愉快なことがあり、憂鬱な時でも、直接の応待でしたら表面的に笑顔さえつくっていれば、それで一応相手方に不愉快さを与えるということはないでしょう。

しかし私達は、声の応接だけに、とても気を遣わなければなりません。不愉快な場合等、自然言葉つきも荒々しくなってきますが、それを我慢して温厚にするのは大変難かしいことです。言葉というものは、心の儘に出てくるものですから、まずは、いやがおうでも心を静穏なものに返さねばならず、とても精神的に疲れます。

私達の仕事は、声の応答だけに、時々とても乱暴な言葉を浴びせかけられます。例えば、応答の遅れた場合等は、

「何してるんだ、昼寝でもしていたのか」なんて叱鳴ら

れます。そのような時は、もう弁解のため満身冷汗が流れる位夢中でした。でも今思えば、どうしてあのように夢中になったものかと不思議でもあり、又可笑しくもなります。しかしまだ忙しかったとか、何だったとか弁解している時の方が至って純心だったと思います。今ではもうどんなに悪罵されても慣れてしまってますので、逆に反感さえ持つようになってしまいました。

なんだか物事に慣れるということが空恐ろしいような気さえします。初めてというものは、ありとあらゆるものがただ珍らしく、興味が有り、会社に行き、定められた仕事に従事するということがとても楽しく、働く面白さをしみじみと味わせてくれました。でも、三か月、半年、一年とたつにつれなんだか馬鹿らしくなって来ました。と言うことは、仕事に飽きてきたということにも共通し、いや、むしろ倦怠期に突入したと言う方が適切でしょう。今が私にとってはその倦怠期の真最中とでも言いましょうか。一日一日がとてもつまらなくて、会社に行くのも嫌な位です。私はこの倦怠期をいかに切り抜けようかと目下考慮中ではありますが、まず私は、今の考えでは、「辛抱」「努力」ということが一番に浮び上ってきます。

実は、今思えばとても恥かしくて言えるものではありませんが、入社した最初は、認められたい一心から、出勤にしても、誰よりも早く出勤し、お掃除を済ませました。しかし大きな会社だけに、小さな、女子の新米の私達の行いが知れるわけはなく、それが当り前です。その内一年もたちますと、どうして自分だけがこう一生懸命せねばならぬかと疑問をもちだしますと、なかなか最初のように真面目にはできにくくなります。こういう所をもう少し努力すれば、早く出勤することが習慣となり、誰のため、何のためという考えはなくなりましょう。

辛抱という事についてですが、まだ新米ですからいろいろな点でミスをし、誰、彼から注意を受けますが、このような場合、自分のミスと認めた時は素直に謝りますが、しかし自分がしたことの方が正しいと思っていても、「こういう点がまちがっている、以後気をつけるように」と注意をされ、私の一存など全然無視されがちです。このような時は誰でも、一時は、誇張して言えば反

撞したくなります。でも、もしここで口論すれば、両方共に苛立っているため事が重大になり、辺りの空気を濁すようなことになるでしょう。だからここでもう少し辛抱して、その場では素直にあやまり、辺りの人に迷惑をかけないで、ことを穏和に済せることが大事だと思います。それではどうしても、気がすまなければ、その後の機会に、ことの真相なり、考えを説明すれば、笑話位で事が済ませるのではないでしょうか？

以上二つの例は、私の一年間の経験中極く些細なことにすぎず、これに対する私の考えを書いたわけですが、自分でも、自分の考えが正しいかどうかは判断できないまでも、一応正しいと信じたいと思います。

この外にも、辛抱、努力、の言葉が該当する事態は、いくらでもあると思います。

私はこれからさきも、精神一到何事かならざらんという言葉の通り、心をこめて、毎日の仕事に励み、交換手として誰よりも優れた、価値ある人間になるように努力を続けたいと思っています。

百姓の娘

高知県　真辺千枝子

（農業　十七歳）

親は子供が成長するにつれて経済や、労働面の負担をおわそうとする。私は中学校へ行っていた頃、宿題や予習を家に帰ってすることをゆるされなかった。「いくら頭がよくても体が弱かったらなんじゃあ。女の子が学校

の勉強を家に帰って来てまでするようでどうする。」とよく言われたことでした。部落全体が昔からこういう考えなのです。百姓の子供は百姓を手伝うのが一番親孝行であるし、それにしたがっていれば子供達は将来安定した生活ができるといい、いらぬふんばつや反感を示そうものなら、今までやって来たことに今さら逆らうこともなかろうにと言われます。子供の意見や要求を実際に取り上げて、子供達の将来のことや教育について親としての役目が真剣になって選択し考えるより先に、父ちゃんや母ちゃんはお前達を成長させ、そのからだにまでする間なんぼ苦労したものか、義務教育を修業できたことをありがたく思わないのか、お前達を大きくして少しは楽になるだろうと楽しみにしていたものを考えてみるがいい、女の子は先ず家を手伝っていれば年頃が来ればもらい手もあろうから、それ迄ひまな時は縫物にでも行き、おとなしくしているにこしたことはないと信じているのです。私が「百姓するだけがのうではない、縫物を知っただけで一人前の嫁になれるもんか」と申せば母はおどろいた風に丸い目をして、「まあお前なんということを。少しは母ちゃんの身になってみなさい。」と涙声。

親は子供達は自分の飼牛で、やっと大人の牛になれば片うでにも両うでにもなって働いてくれ、嫁入するにもまず重労働する体にきたえ「何んにも知らないが体だけは丈夫。」と丸で家畜の売買のようなことをいい、嫁をもらうにしても家の馬にも牛にもなって働いてくれる嫁、右むけと言えば右をむき、左むけと言えば左をむく嫁、家の渡世を上げてくれる嫁をと、私達はとんな家風の中に成長して来た。ともすれば当然のように思われがちな風習で、私達のように終戦後に育った者にとってはなんと合点のいかぬしきたりだとおどろき、同調しかね大いに奮発する。どうして夢多き希望高い青年達は、封建的な親達に、「自分は一人の個人で自由でありたい、平等なのだ。」と主張しないのでしょう。親達が如何に親の権利を主張しても、成長した子供としてもっとしっかり自分を自覚すべきです。農村の青年は自分の収入がなく、家業を手伝い食わしてもらっているので、つい一人立できるかと言われれば不安になり、どうしても親の下をはなれて独立する力を出ししぶってしまう。私達は教

育も不十分なものですから、理性が働かなくなって何か物にたよってその中にやっと自分の小さな座を見つけ、生きのびる程度。本能的に喰い、ねむり、要求に応じて働く、なんと情ない、進歩のない、暗い前途なのでしょう。

学校がすんで家事を手伝い、嫁入して又家にしばり付けられ、女性の行くところ行くところに限られた壁があり、中で自分の希望や夢は一切取上げられ、ただ働け働けでは実につまりません。こんな風に中学校が済んだ当時、私は山村の女性の立場について、不合理、不安定をふんがいし、私達は絶対に環境や家風に左右されることなく、そして、生きなければ食わなければしかたがないという生活から、食べる喜びや生きる倖せを見つけなければ、と山ほどプランを立てはりきっていました。が、なんとまあ世の中のすごいこと、生存競争のはげしいこと、私達はおしながされそうです。これでは大変です。又再び親たちと同じことをくり返しそうです。親達は何んにも知らず考えず平々凡々と暮らして来たのでしょうが、私達は農村生活のありかたなどに深い関心を持ち、こんな貧困の中では生活水準が次第に下って、更にその何倍も何倍も苦しくなっていくのだろう。なんとかして生きるのぞみを持ちたいと考えているのです。

青い山も野も食いつぶすばかりの人口過多のうずの中で、こんな状態であるのに、又もや戦争準備が高まり、一度味わったあの敗戦当時の不安がちまたにただよいはじめているのではないでしょうか。今のままでは、日本はやって行けそうもなく、革命か、それとも爆発がおこるのではないでしょうか。にもかかわらず、政府は日本の国のほろびるようなことをも、金もうけのため大いにえん助し、げきれいしている。こんな小さな山村にもデフレ景気がおしよせて、その後にやってくる、何物か不安や恐しさがみなぎっています。私達は何事をも知らぬ、存ぜぬではおさまらないのです。私達の生れてきた世の中のなんとあれはてた土や風であろうか。心せまい大人達のためにふみにじられ、ぶちくだかれた国土を、ほんとうに愛することができる日本に立てなおさなければなりません。それは私達のこの手だけです。

進歩

福岡県　広田正子
（事務員　十六歳）

希望にもえる中学卒業も間もない頃、父は突然中風で倒れました。

幸にも姉が看護婦でしたから手当も早く、注射も毎日うちましたが、遂に休の自由がきかなくなり、姉一人の収入では、一家九人の者が到底食べていかれないので、やっと満十八になった兄が、炭坑で働くことになりました。

それでも生活は日増しに苦しくなるばかりです。いかに貧しくても明るい家庭でありたいものですが、いよいよどん底生活になると、実際には明るいなどとは考えられません。そして高校進学も今は全く娘心の夢となりました。ほんとに悲しいけれども諦めました。

諦めて自分が働けば少しでも家計が楽になり、両親もどんなにか喜ぶだろうと、自分で自分をはげまして鉄拾いをしましたが、中々思い通りにならぬもので、その仕事も間もなくなくなり、その上、姉は結婚して静岡に行くともいいだしました。「もう二、三年しんぼうしてくれ」との、困りぬいた母の頼みもきかず、「結婚しても病院で働き必ず給料は送ります。」といって、行ってしまいましたので、私もじっとしてはいられません。母もやっぱり同じ思いであったのでしょう。中学の先生に頼んだのです。

ところが、何と幸せなことか、先生のお父さんが責任者である、現在の所にいれて下さったのです。

職場は福岡に本社をもった証券会社で、出張所が数か所あるなかの一つです。私の主な仕事は、ラジオをきいて相場をとるのです。初めはこわい気もしましたが、側で見ているうちに、一週間目頃からとれるようになりました。余り骨の折れる仕事ではなく楽ですが、女は一人で話相手もなく、淋しい時もありました。

でも友達がいれば、交際費もいるし、人が洋服を作れば自分も欲しくなりますから、「経済的にはその方が良いではないか」と責任者の方もいわれます。

或る日の事、お世話をして下さった先生がお見えになりました。そして、「もうなれたかね。」とやさしくきいて下さるのを、私はどんなに嬉しく思ったことでしょう。私は、先生に心から感謝しております。責任者の方は父くらいの年配で、落度のあった場合は、懇々とさとして下さいます。お客様が見えれば、「いらっしゃいませ。」というのが当然の礼儀です。でも無口な私には、その一言が中々でなかったのです。私は自分の余りにもぶしつけなのに失望すると共に、サービスを要するような所には、とうてい勤まりそうにないと悩み、全く自分ながらくやしくなりました。

しかし、一家の苦境を救うために一生懸命勤こうと決心したのです。私は、「働いているのだ」とやっと心をとり直し、これ位のことでやめては先生に申しわけがないし、両親も私の収入を当にしているのにどうしてやめられるでしょう。どうかして愛嬌のよい人間になろうと思いました。

責任者の方もさすがに私の心の動きを見て居られたものか、或る日、私が驚くようなことを話されました。それは私が会社に入ってから一か月余りもした頃、会社のある方が、「君の所の女はかえたらどうかね。」といわれたそうです。

しかし責任者の方は、「いいえ私が立派に導きます。」と弁解されたとのことですが、よもやこんな宣告を受けているとは夢にも知りませんでした。家庭の事情を知っていればこそ弁解もして下さったのだと、今さらに責任者の深い愛情と親切とに感謝し尊敬しております。いわ

れるまでもなく、私は、私自身をどんなに残念に思い苦しんでいたか知れません。それで私は今こそ自分の短所を十分自覚して、逆にほめられるようにならねばと、固く固く心に誓いました。そして改めて私は、「はきはきともものをいう。」「お客さんによく挨拶する。」「出来るだけ気をきかせる。」これをしっかり守ってほしいと言われました。それからは、一層一事々々に細心の注意はしていますが、やっぱり手ぬかりなことが度々あります。すると責任者の方は、「今の中にいわれたことをよく身につけておかぬと、外の所にかわった時、恥をかかねばならないよ。」とやさしくいわれます。

学校生活と違い、実社会で働くのは決してなまやさしい事ではありません。給料や勤務時間、或は友達同士の問題などで、私以上の苦しみをなめている人もありましょう。ほんとに一生懸命でなくてはなりません。

しかし、働くことによって、実社会にもなれ、考え方も進み、常識もつき、一年前では高校進学を夢見ていた私も、現実に一家の暮しを助けて、両親の喜びを目の前に見ると、何だか、一人前になったような誇りも喜びも感じます。

現在、経済状態が悪く、地元の炭坑会社も炭坑町も、景気がでないので、私の店も全く閑散です。どうにか仕事にもなれた今日、一人々々が、それぞれの職業を楽しみ、お互の生活が安定して、早く明るい社会となり、活潑な取引のできることを祈っています。

職業人となって

佐賀県　北村高公
（看板職　十七歳）

一家六人家族の柱である父の失業、兄の永久的な病身、文字通りのどんぞこ生活を日常としている現状で僕は市の中学校を出て、市内の某映画館に就職しました。看板職見習としてまだ一年足らず、雀の涙程の給料でも受取る時の母の喜びようを見ると、一と月の疲労が跡形もなく消え去る思いです。数々たる金でも喜んでくれる母の両肩には常に家計の重荷があり、そのため、母が内職をして生計をたてています。今日僕が好きな絵筆を握って仕事にはげんでいられるのも、もとはと言えば母のお陰で、四方八方に就職の事で奔走して戴いた甲斐が実ったからなのです。何も判らない儘に実社会へ放り出され、就職難という現実の荒波に直面して、初めて大人の世界の生活の厳しさをおもい知りました。そこで僕は完全に失業者が一人も居ないようにする事ができたら、どんなにか明るい文明の進んだ国家になり、民衆の生活は安定するだろう、そして現在のような犯罪ははるかに減少するだろうと思いました。詩髭した夢かも知れませんが、つくづく、こう思わずにはいられませんでした。

話は前に戻りますが、現在（おそらく生涯だろうと思っていますが）苦楽を共にしている仕事は宣伝部で、仕事部屋には師匠（職人）さんと兄菊子さんが二人居られ、僕が加わって四人、賑やかで明るい職場です。先ず

僕の与えられた日課は朝八時出勤、仕事部屋の掃除をし、七輪に火を起し、糊を作って看板用の板に紙を張り、泥絵具をにかわ汁で溶かしておいて、師匠さん達がいつでも使えるように準備しておく事です。又その間には市内の看板立てやポスター下げ(これは週一回)館一切の雑用何んでも引受けます。つまり雑役で、僕の一日は目が廻るようにいそがしく手足が余分に欲しくなる程です。幸いに僕の五体は健康に恵まれていますので仕事の疲れなど、若さにものをいわせて吹き飛ばしてしまいます。僕は現在の職業を自分に一番適したものと思って、全精力を傾けています。が、ただ一つ小さな悩み事があります。それは表の事務所の雑用が多々ある時、下絵の塗り込みの最中などは、手を外すしたが最後、絵が反古になる恐れがありますので機(ひま)を考えて用件を依頼して下されば、もっとスムースに仕事が運べるんだが、と思う事です。ただそう思うだけで、まだ入社して間もない僕には、そんな贅沢な事を言える筈もありません。僕は黙々と仕事一途に邁進するばかりです。

曇天の、手もかじかむような吹雪の或る日のこと、吹き荒さぶ寒風に身を切られるおもいで、例のごとく市内に平面積三平方米板の看板二十五枚を配置にと出かけましたが、極寒のため手が思うようにはかどらず、普段より暇どったのです。遅く帰館した僕は『予定の時間より長く手がかかるようでは駄目だ』と、ひどく叱られました。言ってしまえばそれだけの事ですが、もしや首にでもと、心配が先にたち、胸のうちに拡がってくる不安な鼓動の波を、どうする事もできませんでした。吹けば飛ぶような自分の存在価値と、貧弱な労働者の立場を、この時初めて体験したのでした。

僕がどうやら絵筆を握れるようになった頃、二人の兄弟子が月を異にして辞め、後に残って仕事に従事するのは、僕と師匠さんと二人っきりになりました。二人の減員を生じ、それだけ余分の仕事が数日追いかけ廻してきたが、どうにかしていけるようになってきました。もっとも、この現象は、少数ながらチーム・ワークつまり僕と師匠さんとの名コンビのなす業でしょう。軽い冗談の一つも言いながら仕事もきわめてスムースに進み、働く事の楽しさを切々と味わい前途にみちた日常を送って居

ます。その上今度一部分ですが、絵看板を描く事を許されました。愈々時機到来、僕はこの日を待ちに待っていたのです。思わず、こおどりして喜んだ程、生涯の嬉しさを、この一瞬に満喫してしまったように思いました。僕は有頂天になり、この気持を何かに例えて見たいような衝動にかられ、庭の雑草の根に例えてみました。どの雑草にも共通する事ですが、非常に根強く踏まれても刈られても太陽の光輝やく地上に生を受けたいと絶間なく努力しています。季節が変り暖い微風と共に春が訪れ、今迄その暖い息吹きを待っていた雑草の根は、夢にまで見てきた大地へ水も滴るようなみずみずしい色さえ匂わせて、若葉の芽を誕生させたのです。誇張しすぎた例え方ですが当時こんな心境だったものです。だが一時の幸福感に度を過ぎた浮れ方をすると取り返しがつかず、人生の落伍者になるかもしれません。この道での達人になるためには、まだまだ遠くこれから先の未知の世界にどのような難関、あるいは苦楽が待ちうけているのかも知れないのです。元来絵を好む僕は現在の職業を天職として、将来のために又立派な社会人となるために今迄と同様、一生懸命頑張っていきます。

手袋とともに

長崎県　前田栄三郎
（艤装工　十七歳）

この手袋は、一般の通行く紳士や淑女が、防寒用として或は伊達として用いる手袋の類とは大分ちがうのであ

る。形は親指と人指指の間だけが割れていて、親指の外は一緒に入れるようになったものである。木綿のボロ布を数枚重ねて、中にわた状のものを入れて、縫目の大きいミシンで縫いつけた、ぶあつな手袋である。

工場で角のたった鉄材を持ち運ぶ時、熱い物を扱う時又は振動がはげしく伝わる物を握る時等に、なくてはならないものである。

僕は日頃この手袋をつけて仕事をしている現場の人を見て、よく似合うなあと思う。そしてその現場の人の姿が逞しい姿に見えるのだ。

僕が最初にこの手袋を使ったのは、二年生の実習場での鍛冶実習の時だった。焼方をしていた僕は、火ばしを持つ手が熱くて、うまく焼けずにいたら、先生は、はめていられた自分の手袋をぬいで貸して下さった。僕にはだぶだぶであったが、火のこが飛んで来ても火ばしが少少熱くなっても平気であるし、仲々よいものだと思った。そして、急に現場の人になった気がしてうれしかった。一緒に実習をしている友達は「よく似合うぞ」と冷やかした。

三年生になって現場での実習に移った。艦装工場の組立場N組に配属された時、最初に渡されたのがこの手袋であった。片方はみどり色で、一方は灰色をした新品であった。はめてみるとよく手に合った。今日からこの手袋を使って現場の人と一緒に僕は実習をするのだと思うと、見知らぬ人達の中で、どういう仕事をするのか不安だった。でも僕は新しい手袋を手にはめて、いやが上にも緊張するのであった。

現場実習の数日間、日増しに面白くなった。それはこの組の人達が、組長さんをはじめ、指導を受け持って下さるK伍長さん、そのほか全部の方が非常にあたたかく、後輩の僕に接して下さるためだ。その場その場で任せられた仕事が、僕の尊い体験となるのだ。

電気溶接、ニューマチックハンマー、可搬グラインダー、大ハンマー等、実習場では使ったことのないこれらの工具類も、一通りは使ってみて要領を学んだ。これらの一つ一つは初めて扱う面白さに反して、仲々うまくゆかないものである。

たまたま溶接する個所があって、僕が溶接器を動かし

ていると、Kさんは一緒に眼鏡を取って、アークの状態を見ていて、も少し棒を立ててとか、はなれすぎるばいとか、もっとゆっくり進んでとか、注意して下さる。その通りにやってみるが、パラッとはなれてしまって固着してくれない。うすい材料の場合等、固着するよりか小指大の穴をあけてしまったりしてKさんをわずらわせた。少しうまくできると「うまいぞ、そのコツを忘れんなよ」と笑ってほめられると、ほんとうに上手になったようでうれしかった。熱いので体中汗ばんでくるのも気にならず、すずしい気持がした。

ニューマチックハンマーを使えるようになった時もうれしかった。現場ではテッポウと言われる通り、すごくやかましい音を立てるこいつは、体をつかれさせることも甚しい。ブルンブルンと手袋を通して振動が伝わる。支える力、押える力でかため、目はただ一点のはっってゆくタガネの先に止って動かない。しばらくつづけると体中が汗ばみ、顔がやきやきしてくる。防塵眼鏡がかすんでくるとタガネの先が見えない。「おい休もう。」とKさんが肩をたたかれる。僕は深呼吸をして又取りかかる。ダダダ……と音とともにするするとタガネがすべる。けずられてゆくのが鉄ではない物のような気がする。

日を重ねるにつれて仕事に自信もできてきた。「こうして仕上げてゆく仕事は、張り合いがあるね。」とKさんが言われたが、その通りである。

亜鉛メッキの塗装済みで箱につみこまれるばかりになった品物を、僕は一つ一つなでまわしてみた。これは僕がこの手で作ったものであると思うとかわいくてたまらない。

もうぼろぼろになって穴があき、油やほこりでよごれてしまったこの手袋に、僕は愛着を感ぜずにはいられない。又新しい手袋で、明日からの新しい僕の実習の世界をきずいてゆこう。

私はこうして働いてきた

長崎県　田崎文典
（農業　十七歳）

長崎県の離れ島平戸島の南部に位する私の町は狭い谷間にはさまれ、環境に恵まれない所です。そして私は貧しい一農家の少年として昭和十二年六月一日に生まれ、毎日貧しい生活を営んで参りました。そして父母は昔からの慣行農法に従って、いっこう不自由も感じないらしく、改善しようともせず、生れつき不幸と考えていたらしく、母も父のいう通りにして貧農の妻の宿命と考え、暗い一生で終るようなふうをしていました。

私が学校生活を将に終ろうという中学三年の秋、修学旅行が行われることになり、自分も家の貧しさを考えず皆と共に行くことに決めたのですが、旅費と僅かの小遣銭だけがやっと手に廻りましたけれど、帽子やかばん、靴等買うことができない。靴下すら買えない貧しさで靴代りに地下足袋の痛んだのを洗濯して履き、旅行出発の前夜、母は弁当を準備してくれるので自分は色々と考えながら、地下足袋修理をやったのだった。そして考えた。父母を見れば、腰が折れて実に見苦しいかっこうをしている。ああ神は何故に吾等貧しき者に恵んでくれないのだろうか。こんな事を考えると頭の中がとても曇ってくるのでした。明くる朝出発をして登校してみると皆立派な服装をしている。金持と貧乏人はこうも違うのである。そして面倒な事ながら修学旅行を終ったのだった。

今でも、地下足袋をはいて大珊公園で写した写真がアルバムに残っている。そして学校生活も何とかつとめて終る事ができた。成績もかなりであったので進学して見たかったが経済がゆるさない。そして少しは経済面を考えるようになった。又兄達が計画を立ててやって来たがなかなかその通りに行かず、雨が降っても働けるように是非したいものと思いながら、或る日机の上の本を手にしずかにページをめくっていると「積小成大」と書いて有り、小を積んで大となす、いわゆる千段の階段を一〜二度に大足で上る事はよほどの事がなければできないが、一段一段と間断なく上る事ならば誰にでもできる。どんな貧しい人にも必ずできる。この文句を味わう事ができ、その日から煙草銀として一日十円必ず貯金することを覚悟して、小さい板で箱を作って、取れない位に釘付けをして始めた。貧しいこととて十円の金も家中にない時がある。これはどうしても続けることができないと思い、夜炭俵を編んでその金と理髪屋行きの金、映画行きの金もできる限り辛抱して、小遣銭を戴いたのも皆貯金した。そしてあけた年に箱を開いて見ると何と七千五百八拾円溜っていたので、とんで喜んだ。又家内の皆も喜んでくれ、早速前から考えていた雨が降っても金の取れる法を始めようと、ブルモスロック初生雛五十羽を導入、飼育を始めたが大失敗して二十羽死んだ。残りの三十羽を刺りに一生懸命に努力して、産卵がものにならなかったのを六割五分に向上させることができた。

野菜等も特に力を入れて今年は白色レグホン百羽を導入し、今度こそと目の色を変えていたところ、導入して十六日目、晩十一時半頃育雛温湯から出火し鶏舎三間に一間半、ブルモスロック成鶏二十七羽、雛九十七羽を全焼。しかし成鶏一羽がどこからか飛出していた。その鶏が話せたら、どんなにか苦しかったろうと鶏を抱いてその晩は涙を落した。今迄の苦労も水の泡となった。家内中から少しは栄養面もよくなったと喜ばれていたのに。そして甘藷代や少しの日傭稼ぎ賃と卵代等を利用して噴霧機、二段耕犁、撒粉機、中耕培土機等を購入する事ができ、今年からはいよいよ雨が降っても金がとれると喜んでいるところに災難がやってきて、理想も破れたのだが、皆の勉ましにより、また二間に一間の豚舎を作り、

二頭の豚を導入して一日十円の煙草銭による蓄産が又第一歩を踏み出し始めた。こうして最初の積小成大こそ今日の貧しい人々のとるべき道であると思い、皆にも、どんな職業によらず必ずできると私は断言している。

日本のように雨の多い所ではなかなか遊ぶ日が多く、計画的作業が思うようにできない。それで私は天気観測をして、天候にしたがって作業計画を樹て（天気観測による経営の改善）、そして将来この線を力一ぱい努力して生活改善をどんどんとやってゆく覚悟をしている。ビタミンの補給もできるよう蜜柑園をつくり年中手製ジュースも飲め、又今蜜蜂が一群いるがもっと多くし、又山芋を導入し、乳と蜜の流れる郷土にして、食事も一食位はパン食にし、蜜や山羊乳をつけて食べるようにしようと朝一杯だ。又炊事場、風呂場、寝室の改善やら、農耕はメリーテーラー耕耘機を購入して更作も大きくとり入れ、家畜をでき得る限り増殖させ、女は家で家畜の世話と子供の家庭教育も充分にできるようにし、老いも若きも子供迄も仕事ができるという風にして、新時代にそくした生活を行う覚悟で、中学卒業当時の苦しさは何時しかとび去って希望一杯で、毎日毎日が楽しく、世の中でこれよりたのしい職業はないと思っている。

必ずやりとげようという一念で、身を一段人よりも下げて懸命の努力を続けている。

僕のアルバイト

熊本県　山内　正勝
（新聞配達　十五歳）

僕は新聞配達人だ。このアルバイトをはじめてからもう三年になる。その間僕がどんなことを考え、どんなことを経験したか。思いだせばきりがないが、いま三年間をふりかえりひとつひとつ糸を手ぐってみたいと思う。

僕は小学六年の時この仕事をはじめた。六年生にもなるといろいろと家庭のことがよくわかる。僕は家庭の苦しいありさまをみるにつけても、「これに負けてはならない。」と思った。そうだなにか自分で金を得る仕事をして、自分の身のまわりのことは自分でやろう、そうしたらすこしでも家のくらしが楽になるだろう。そして僕はこの新聞配達という仕事についたのだ。

初めは大へんはずかしかった。なぜなら小学校でこんなことをしているのは僕一人のようだったからである。その上新聞配達をしているということが学校や近所の友だちにわかると、「熊日君熊日君。」と言って、からかう人がでてきた。僕は一時は友人と会うのもいやになっていた。でも、僕は人からなんといわれようとも、「働くということは、よいことだ。」と自分で思っていたので、歯をくいしばってがんばった。そのかいあって、小学校を卒業する時、働きつつ学んだ僕を学校でみとめてくださった。僕は表彰された。それからはだんだん友だちも自然に僕を尊敬してくれるようになり、僕もこの新聞配

達という仕事に、ほこりをもって働くことができるようになった。僕は働くことの喜びを感じつつ、今日までこの仕事をつづけている。

僕は新聞配達という仕事が大へんすきである。朝早く起きてひえびえとした新鮮な空気をむねいっぱいすいこんで、家々に新聞をなげ入れる。「お早うございます」と、あいさつすれば、家庭のおじさんや、おばさん達は声をそろえて「ごくろうさん」といって下さる。新聞配達をしていたために、小さかった僕の体もすくすくとのびてきた。配達をしている家庭の人々は、年月がたつにつれて大きくなる僕の体を見ては「大きくなったね。」と言って、見上げたり、見おろしたりされるので、こんな時はすこしはずかしくって、顔を赤くして下をむいていたことがある。

が、たのしいことばかりはない。悲しかったこと、苦しかったことのはじめは、まず新聞を入れそこねた時——。すぐ電話がかかってくる、販売所のおじさんからはおこられるし、あとで配達に行くと、そこの家庭の人からもおこられる。僕は六年生のころ、まだ気が弱くて、なみだもろかったのでそんな時は泣くまいと思っても、どうしても泣いてしまう。もう一つは冬の朝だ。つめたい北風がふいて来る。休の中まで、はりでつつくように、きりきりともみこまれるようなつめたさで体がうずく。そんな時、一人で泣きながら新聞を配達したことも一度ではなかった。もう「今日こそはこの仕事はやめだ。」そんな時はしみじみ思う。でもそう思っていても、あとからよく考えてみると「負けるものか。やるぞ。」という気が新たに強くわいて出た。そういう気をおこさせたのは、一つは販売所のおじさん、おばさんのおかげである。二人は自分の子供のように、僕たちをかわいがって下さるし、おじさんは僕たちをりっぱな社会人にしようとしておられる気持があるからか、その話はなにか強いしげきを僕たちにあたえるのだ。おじさんがよく言われる言葉。「この職場を、人生道場と思え。先輩にはいろいろとえらい人がたくさんおられる。その人たちに負けず、えらいりっぱな社会人になってくれ。」それが僕の頭に強くのこっている。僕にはそのよい社会人と言うのは、どんな人であるのかまだはっきりとは、わから

ない。でもだんだんわかってくるだろうと思う。
こうして僕は、おじさんやおばさん、それに配達をしている家庭の人々のあたたかい愛情の中で、よい社会人になるべく成長している。

「働く」ということ。そのことに僕はよろこびと、ほこりをいだきつつ今後もより以上にがんばりたいと思っている。

山で働く喜び

大分県　坪根　博
（材木出し　十七歳）

朝日に照され自分の影を追い追い、今日も登って行った。檜山を通り、杉山を通り、目的地へ進んだ。鶯は私の目の前を飛び回る。やがて広々とした牧場に着いた。汗ばんだ顔に気持のよい風が吹いてきた。皆も疲もその方向に向いて私に真白い葉の裏側を見せた。夏に特有の風景だった。自分はなぜか、ここに書き表わすことの出来ない悲しい気持になった。後を振返り振返りあたりの山々を見渡した。山は何の変りもなくじっと私を見をろしている。僕は急に元気づいた。すがすがしい夏の山の涼しさ、これは山に住む者でなければ味わえない。又山に住む者は都会に愛着を抱き、都会の者は山に憧れを抱く事だろう。これが人間かも知れない。そのうちに目的地に着いた僕の仕事は長い木を道端出す仕事だった。弁当と時計を木の枝に吊るし山の中に入って行った。僕は

早速第一本にカンを打ちこんだ。何と静かな事だろう。カンを打ちこむ音が四方の山に響き渡った。打ちこんだ木を引いて見た。長い上に枯れていないので大変骨の折れる仕事だった。けれどその位の事に負ける自分ではない。汗だくだくになって引っぱった。木を引く綱が体にくいこんでくる。やがてお日様も大分高くなって暑さも蝉の声も急に増して来た。小鳥も歌いだした。遠くの方で人間だか鳥だか分からないような鳴き声が聞えて来た。「あおあお」とまるで人間のターザンのようだ。十本も出した頃汗は顔を涙のように流れ落ちる。裸になりたいが蚊がよって来て遠慮なしに体をさす。シャツは汗でずぶ濡れである。時計を見たら十一時である。昼には早いので引き始めた。汗だくだくになっても、一生懸命に引いた。山村の若人達の根気強さであろう。一歩一歩と足に力を入れて引き出す。二十本も出した頃、腹時計の昼にした。タオルをぬらして、体をふいた。いい気持だった。一点のにごりもないこの水、雑草木の根がゆり動かされているだけ。きれいに洗われた根。赤い根もある白い根もある。みんな自分に適した根を持っているのだ。サンショ。魚が石から石へ泳ぎ廻っている。こんな水は山に来る者でなければ見られない。又山にくる者の楽しみの一つだ。話し相手もなく一人で箸を動かした。蝉は人の気持も知らないで友と大声で語り合っている。働いて食べる弁当のおいしさ、これも働くからこそ味えるのだ。

山にきて家の事を思い出す程淋しい事はない。木を合わせ、その上に寝た。遠くにいる友の事が思い出される。今頃どうしているか。自分のように働いているか。又旅行か。青空の中を白雲が走って行った。風が体の上をざわざわと音を立てていった。自分は蝉の声、小鳥の声、そして水の音に守られて深い眠りに落ちて行った。後は山の葉を鳴らす風の音ばかりであったろう。それから何時間後に自分は目をさました。二時だった。顔を洗って見ると午前中はあんなに良かった天気も雲の多い天気と一変していた。間もなく午後の仕事に取りかかった。午後はむし暑かったので汗は流れ落ちる。辺りは急に暗くなったのでひぐらしさえ鳴きだした。雨が降らなければよいかと一人言を言った。木を引く綱が肩に切れこんで肩がもげそうだ。十五本も出した頃終りに近づいた。あと

一息と小高い丘の上に立って当りを見渡した。村の方を見るのがなつかしい気がした。汗で濡れた体に風がたえず吹いて来る。本当に気持がよかった。牧場の草もどんよりし、雨の降りそうな空の下で風の吹く方に曲がるので裏側の白さが目立って見えた。風は働く人に与える風であった。なぜなら遊んでいれば、この風が当った所で何を感じよう。働くからこそ自然の風でも気持のよさを感じるのだ。自分はシャツのボタンをはずし体内に風を入れた。疲れも何も吹き飛んだ。杉油の着いた上に土がついて黒くなった手は何かを物語っている。僕は古峰の岩岩をじっと眺めた。松の生えた岩。何も生えていない岩、何年か雨風に打たれても平気で立っている岩。岩は僕に「若者よ勇気を出せ。がんばるのだ。」と話しかけているようだ。あの高い岩に登りつめた時の気持、それは登った者でなければ味えない。盆になったらあの岩々を訪問しよう。

僕は再び山の中に入って行った。何本か出した。時計を見た。あと一時間もすれば帰えらなければならない。お日様は一寸と顔を出し、古峰の岩々を赤く照らした。空も夕方になったからか、晴れ間も多くなってきた。ひぐらしは一層烈しく鳴き出した。なんだか僕との別れを悲しんでいるようだ。六時になった。自分は弁当を腰に吊るし一日中友となってくれたターザン鳥や蟬と別れて村の方に下りだした。檜山の所で振り返った。古峰の岩に、お日様が夕方の別れの光を投げかけ、その上空をからすが飛び回っていた。「若者よ勇気を出せ。がんばるのだ。」自分は口でつぶやき、夕風を受け、すがすがしい気持で下った。ああ一日中別れた村に、どんな幸せが待っているやら。

職場の一日

宮崎県　柳田美代子
（看護婦学校生徒　十七歳）

蛍の光に送られて、悲しいような、うれしいような気持で学窓を巣立って、早や二か月の月日が流れました。社会に出る喜びと不安で胸は高なり、明日への希望にみちていました。家の都合で高校へ行く事をあきらめた私の選んだこの看護婦の道は、私にとってあやまっていたでしょうか？　いいえ、私はそうは思いません。私はほんとうによい道を選んだと思っています。私にとって最善の道であるとさえ思えます。ただ職につかねばならないからこの道を選んだのではなく、又白衣にあこがれて選んだのでもありません。肉体的にはもちろんの事、精神的にも不健康な患者さん達にいくらかなりとも心のゆとりを、幸福を、私の手によってあたえてあげたかったからです。こんなわけで選んだ私の職業、勤務中の一コマを書きつづってみたいと思います。

私の勤務は結核病棟ですから、その大半が掃除です。午前午後の二回、看護婦さんや病棟婦さん方と一緒に病室に行きます。ここへ勤めるようになってすぐ、看護婦主任さんに「マスクを作らないときたないからね」といわれ、ガーゼを下さったので、自分で作りましたが、なれないマスク使用なので、息苦しくてたまりません。毎日洗濯をした清潔なマスクをするように努めています。掃除方法は、床に茶がらをまいて、その後をはいてゆき

ます。はいた後から棒づりにした雑巾を、クレゾール水であらってふいてゆきます。これがすむと最後に床頭台をふきます。この掃除方法で毎日毎日の日課が終るのです。勤務するようになって一か月余の日数がたちましたが、まだ充分に掃除する事が出来ません。私の一番とくいな事は、掃く事と床頭台ふきです。棒づりはむずかしいので、掃く事をするように病棟婦が言われたので、いつもそれをしていたら、なれっこになって今では棒づりを手にする事はほとんど有りません。こんな事ではいつまでたっても上手にはなれないと思いながら、いつもそれをやっているのです。患者さんの寝ておられるベッドの下を、はいたりふいたりするのですから、むずかしいのはもちろんの事ですが、なれない私の体は固くなってしまって、自分が思っているようには動いてくれません。だからベッドの角に棒づりをガタンガタンぶっつけたり、床頭台にぶっつけて、あやうく花びんをひっくりかえしそうになったり……。患者さんが見ておられるので、あがってしまってとんでもないことばかりしてしまいます。その内に私は赤面して、一寸先きもかすんで見えないような気がしてきます。こんなにもおどおどした私の姿。それにひきかえ看護婦さんや病棟婦さん方の手ぎわのよい美しい仕事。そして楽しそうに、なんらの苦もなくすべてをやりのけておられるその姿。私はその姿を見る時、自分もあのようにやりたいという気持から、我を忘れて仕事に熱中するのです。こんな時、私は胸に強くきざみつけられている、一つの言葉を思い起すのです。

「なせばなる。なさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり。」

これです。この言葉です。忘れもしない小学校の卒業式の日に、受け持ちだったK先生にいただいた大切な言葉なのです。私が中学時代になしたすべての事は、この言葉のはげましによってなし得た事だ、と言っても言いすぎではありません。テスト勉強で夜ふかししてねむい時でも、自分の事に自信をなくした時でも、「なせばなる！」こう言って再びそれらにとり組んだのです。今の私もこの言葉を口ずさみ、「なせばなる」事を信じて困難に立ち向わなければなりません。そして最後の勝利を

得なければならないのです。「苦あれば楽あり」私は今楽を得るために苦を歩いているのです。いばらの道を歩いて行けば、はてにはきっと美しい花園が待っています。美しい花園の中で楽を得るためには、すべての困難にうちかってゆかねばなりません。勝ちを得た時、そこには花のアーチがまっているのですから……。

今の私には重くむずかしい仕事ですが、これをのりこえれば、いつもうらやましく思っている看護婦さんや病院婦さん方のように、素晴しい仕事が出来るようになれるのです。こんな事を胸におきめて、苦しい中にも楽しい毎日の勤務を終えるのです。

今も又この事を胸にし、五月晴れのさわやかな風を胸一ぱいにうけ、青空の下でせっせと麦かりをしているいく人かの農夫の姿を、病室の窓から見下しながら……。

若芽

鹿児島県　有村悦子（織工　十七歳）

私は姉と一緒に近くの旭織絹に働いている者です。従業員二百数十人からなる工場は朝は五時から一時五十分迄と午後一時五十分から夜の十時半迄の二交代制になっています。家から三十分で通勤出来るし、姉がいるし、夜間学校に出すという事で、家が貧しいため、先生方から再三進められた進学をあきらめて、就職したのです。進学できぬなら遠い他県に出ようと思ったものの、自分の身体や、父母や妹達の事を考えて、進まない気持を押

えて入社したのです。

織布という人組でハンカチを織る職場に廻された時、ゴウゴウうなるような騒音の中で助教婦さんの指導をうけるのに自分ではわからない程夢中でした。立ち続けの八時間労働はとてもきつかったのですが、今は三台の織機を持っています。深夜業する時は睡眠不足で休の調子が悪く、夜間学校も望めなくなりました。家計が苦しいと働くために何もかも犠牲にしなければならない。都会に憧れて行った友達の便りには、故郷の母の傍にいられるのが一番幸福だと書いてありますが、私は旅に出て母の恩を知り、心をきたえたいと思います。

冬の凍りつくような朝、機械を動かす手がいう事をきかず泣き出したい時や、機械の調子が悪く修繕ばかり頼んでしかられた時、家で迎える母の笑顔は疲れを吹き飛ばしてくれます。季候の好い早朝は、白帽をきりっとしめて働く事がとても楽しいのです。成績表が悪かったり考え事のある時は能率は上らず、止めようと何度思ったか知れません。友の便りによるとあちらの工場では冬は暖房装置がしてあり、夏は涼しいように設備が整っているそうです。テレビがありレクリエーションなど催されて大変面白いそうです。どんなにつらい仕事でもそんな催しで職場生活も楽しいでしょう。私の工場ではどんなに暑くてもがまんしてきびしい監視の下に働かなければなりません。楽しみと言っても春の花見、夏の海行き、秋の組合の慰安会があるだけですが、それでもその日を待ちわびているのです。何の施設もなく、やかましい注意の下にいては、私達のような若い意欲の芽が伸びそうもありません。昼食のひとときでも、よい静かな音楽をききたい、本を読んで教養を高めようと考えても、どうにもなりません。三十五分間の休み時間も次の仕事の準備のため、御飯を食べるだけが精いっぱいです。工場に娯楽がないため映画に行く回数が多くなり、品行の悪い一部の人達のために皆から女工と見下げられます。真面目に生きようと一心になっている私達に、どんなに痛く響くでしょうか。

働く年少者は恵まれぬ環境にあります。再軍備にも等しい予備隊、自衛隊、海上保安隊と、その方に私達にはわからない莫大な金が使われています。少しのお金で

も、貧乏で働く年少者の文化向上や、その他の施設にまわして下さったならと小さな心を痛めます。働いた給料が自分のものに使えたら働きがいもありますが、家を助けるためには無理も言えず、いつも変化のない工場生活を送らなければなりません。姉は「若い時は身につける事が大切だ。」と言います。姉は五年間も同じ生活をくり返しています。私はただ働くだけでは、物足りないのです。

今私にできそうなのは通信教育です。わずかな月謝代も家計に影響すると思えば、なるたけ父母に迷惑をかけないように今迄よりうんと精出して働きたいと思います。三台の織機を動かしながら、胸につつみきれないような希望を描いて真剣に働いてこそ、自分が立派になるのだろうと考えています。

朝晩通いなれた道を姉と二人で歩きながら希望を語り合いました。私の心は働く意欲に燃えています。いつも明るく朗らかに働けるため「唇に歌を持て、心に太陽を持て。」しみじみとこの意味をかみしめて、風にも負けず、りっぱな女性になるよう心掛けたいと思います。

明日をになうもの

昭和31年4月25日　印刷　　定価　140円
昭和31年4月30日　発行　　〒　24円

無検印
編者
承認

編　者　労働省婦人少年局
発行者　婦人少年協会
印刷者　武村正夫

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋1—1　婦人少年協会

婦人少年協会